

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十六年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九二三号

● 日川協加盟



No. 922

三月号

川柳塔創刊八十周年記念

合同句集 『川柳塔』

「川柳塔」は、大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成十六年で八十周年を迎えます。これを記念して、同人・誌友を中心とする合同句集『川柳塔』を発刊いたします。合同句集は昭和四十九年以来、十年毎の刊行で平成六年の誌寿古希記念につづく第四集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎いたします。一人でも多くの御申込みを心からお願い申し上げます。

★刊行 七月七日 ★締切 四月二十日（火）

★体裁 B6判・約五百ページ・上製本

★参加費 五千円（句集一冊呈）

★掲載句 一人十五句（自選）

★申込 所定用紙に掲載句（平成六年以降の発表句

または未発表句）を記入し、参加費を添えて川柳塔社事務所へ。なお、参加費は同封の払込用紙でお願いします。

〒545-0005

大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第二ビル二〇二号室

川柳塔社

電話 〇六一六六二九一六九一四

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741代 FAX 06-6652-2928

「ら」抜きことば

河内 天笑

文法的には満たされていないけれども、意味が通じるので「ら」を省いて慣用的に使われているものを「ら」抜きことばと言います。例えば

A「この部屋で五人も寝るのんちよつと狭いんちゃう？」

B「寝れる寝れる、詰めたら寝られる。なんせ二食付で五〇〇〇円は安いよつとちよつとぐらい辛抱せな」

この会話のBさん「寝れる寝れる…」は、明らかに「ら」抜きです。しかもそのあと「詰めたら寝られる」はちゃんと「ら」を入れているのです。特に気にならないくらいよくある日常の会話です。また、

A「この松茸食べれるんやろか、見たこ

とないけど」

B「食べれると思うよ、天ぶらにしたら。」
C「食べられへんのちがう、気持悪いよって止めとこよ。」

この会話ではA、Bさんは「ら」抜きでCさんが正常です。然しCさんの言葉は「ら」抜きでは言いにくいのです。

前の二つの例のような会話が気にならずに聞けるところが、「ら」抜きが慣用される原因なのです。

或る待ち合わせの電話です。

川藤「六時はきついで変えられるもんなん

ら七時に出来んやろか」

岡田「もう変えられまへんよ、藤田にも

鳥谷にも六時に来るよう言うたから」

「ら」抜きことばはこの様にごく普通に知らしの中で生きています。私自身、意識せずに使っていると思います。

そもそも「られる」は可能性を現わすことばです。「ら」抜きに限って支障なく意味が通じるところが、日本語の曖昧なところなのです。

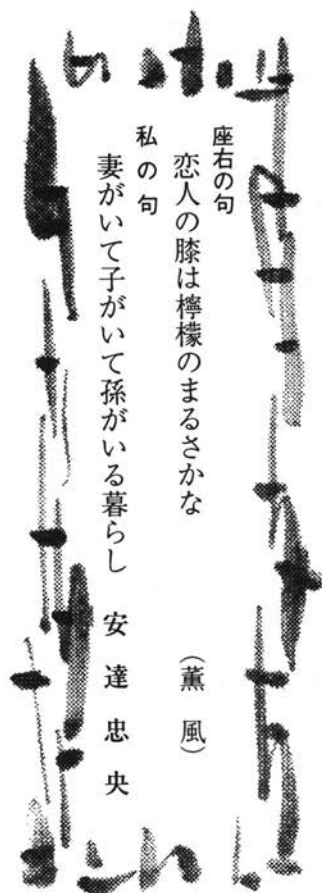
次に「このピンクまだ着れるか知らは「着られるか知ら」の「ら」抜きです。しかし同じ発音でも、

あの人は「切れる人や」とか、このごろの少年は「すぐ切れる」などは「ら抜き」ではありません。

同じ動詞でありながら「ら」抜きことばになり易いものと、そうでないものをどうして区別するか、これが出来れば常に正しい日本語を使いこなす事が出来るのです。

方法がありました。

「生きよう」、「考えよう」、「食べよう」、「寝よう」、「変えよう」など（今はこれを浮かびませせんが）動詞の下に「よう」を付けられることばは全て「ら」抜きことばの対象になります。「着る」は「着よう」と変化出来ますが「切る」は「切よう」と出来ません。いろいろな動詞を当てはめて試していただければ一目瞭然、「ら」抜きことばの悩みは解決します。



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薫風)

私の句

妻がいて子がいて孫がいる暮らし 安達 忠央

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言「ら」抜きことば

雅号の由来

河内 天笑 …… (1)
桜井 千秀 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

河内 天笑 選 …… (4)

自選集

板尾 岳人 選 …… (52)

水煙抄

東野 大八 …… (57)

麻生路郎物語 (27)

波多野 五葉庵 選 …… (79)

愛染帖

波多野 五葉庵 選 …… (79)

誹風柳多留二四篇研究 64

藤田 泰子 選 …… (84)

茴香の花

藤田 泰子 選 …… (84)

雅号の由来

桜井 千秀

京都市伏見区醍醐町から上の醍醐寺までは急な登り坂。その醍醐寺を横に見て峠を上りつめると山の中に広がる村落が東笠取。それからまた峠を越え西笠取、そしてまた次の坂道を越えて阿羅谷までひたすら歩かねばならない。この間凡そ三里は半日の予定。たまに会う行人商人は、肩の荷に喘ぎながらも「おきばりやす」と挨拶は忘れない。こうして雨の降らぬ限りは、歩き通した青春時代。

当時私が通っていた和裁専門学校の全生徒に軍需工場への徴用令が来て、それを逃れるため父が京都林業の重要な地位を利用、材木検査官という役目を頂いて来た。山林要員(山林の伐採状況を点検に回る役)でお役人さまである。山の空模様は変わり易く、雨になると最後の阿羅谷の豪邸が泊まり宿である。係官がうら若き女性ということで花柄の寝具が用意されていた。戦時下でも空襲を知らぬ京都ならではのことで。そして此処でちよいちよい催されていた俳句会で、花を持たせてくれたのだろうか、天位に抜けることが屢々。集まる方々は土地の長老、京都の公家の末

「ルーズ」……………黒田能子選…(86)

一路集「墨」……………山本益子選…(86)

「みえみえ」……………北野哲男選…(87)

初歩教室「まさか」……………三宅保州…(88)

秀句鑑賞 同人吟……………江口度…(90)

水煙抄……………上田俊路…(96)

二月本社句会……………(92)

各地柳壇(佳句地十選/小野句多留)……………(97)

柳界展望……………(111)

三月各地句会案内……………(112)

■編集後記……………楓葉・朱夏…(114)

座右の句

生き場所がここにもあった屋根の草 (暁明)

私の句

明日食う米があるから笑つてる 中居善信

裔とかで、農業や山林業に従事しているとは思えぬ、優雅な立ち居振る舞いに魅せられた私は、いつしか自分もその一人になっていた。おつちよこちよいは昔も今と変わらなかつたようで「よし千や二千の秀句はお茶の子さいさい」とばかり「千秀」の雅号。落款まで作る意気込み。だが熱し易く冷め易しとか、「瞬間湯沸かし器」の渾名通りで終わった。以来、流れ流れて浮き草の…そんな文句そのままだちこちへ移り住みつつも、何故か私の懐から軋げ落ちなかつたこの落款。私自身の弱点が滲み出ているようだ「あんたはんはやろうと思えばやれるお方ですえ、辛抱強うおきばりやす。誰でもいろんな思いを抱えて詠むから、人に伝わる句が詠めるんどすえ」優しく練り返された老婦人の言葉が、この落款から囁かれてくる感じがしてならない。川柳を始めてもう二十五年。雅号もそのまま。落款もそのままだが、青春時代のあの慢心とひ弱さは、心の奥に潜めてあの山里に埋めたさき、時々戒めにする程度。そして私にはあの老婦人のような気高さはないが、そこは歳の功、後輩に「あんたならやれる、しつかり基礎を身につけて、人に伝わる句を目指すように」と励ましている。ああ、あれから幾年か…時の流れの怖さが身に沁みる。

川柳塔

河内天笑選

高石市 浅野 房子

年寄りに金はどっこい要るのです

一言が止めどなくなるから言わぬ

適齡期逃しそうだが口出さぬ

可愛くて人畜無害なのがよい

少し好き沢山好きな人がいる

頼られず当てももされずひとりかな

米子市 政岡 日枝子

旅を行く醜き影をひきずって

独りいてむらさき色の日を過こす

わたしから近寄っていく冬の月

根元ではいつも響いている太鼓

ひとふしの骨がドスンとちびていく

太郎は翔んだ 男の尻尾なびかせて

西宮市 山本 義子

鏡見るまだ化ける余地ございます

待ちばうけ桜の下は許される

ちちははの優しさだけを覚えとこ

山歩く県境ひよいと一またぎ

いろいろとあった日は風呂熱うする

安全神話日本も疲れ出してきた

河内長野市 村上 直樹

たて軸は日本人たる心意気

ぱつと散る星の美学にあこがれる

如意棒で鬼退治した春の夢

嬉しい日字も小躍りの壁日記

千鳥足妻の尻尾を踏む不運

添うほどに比翼連理の共白髪

鳥取市 春木 圭一郎

家族にも大きな声でありがとう

欠点を認めた上で好きになる

真剣にほめて叱って子が育ち

夫婦仲良くて信用できる店

暖かな家庭 会話のある家庭

今日食べるものがあるから幸せだ

弘前市 高橋 岳水

残り福期して日暮れの初詣で
かばかりの石に蹟く老いしかな
そばの花咲かせ貧しき村が好き
天寿とも尊厳死とも老いの欲
自画像の老斑ふえるそぞろ寒
院長の机の上の宗教書

米子市 林 瑞枝

健やかと言う書もらい福を抱く
新年会の写真が美女に撮れている
磯の香にまみれ架けたい橋がある
長寿の輪広げ明るい彩を着る
アルバムを捲る宝を探すように
山麓でいい雰囲気の人と逢う

三田市 北野 哲男

逆風が止むまで正座崩せない
荷車の後押しをした疎開先
私の漬物類張る子の夫婦
墓の中嫌です閉所恐怖症
天国は身ぶるい高所恐怖症
朝夕に鉦を叩いている絆

河内長野市 山岡 富美子

歳時記の暮らしがずれる温暖化
志 天まで目指せ新成人
柏汁に愛が溢れる具沢山

一病に余儀なくされるギアチェンジ
メル友の喜寿が送ってくる元氣
スニーカー春の舞台へスタンバイ

豊中市 吉田 あずき

屠蘇祝う家族の善人面がいい
筋書きへ手直しばかりする暮し
残り火を素敵に燃やしたい祈り
月ひとり飄々として妥協せず
七草粥やさしい色であたたかし
頂点から奈落へ夢でないドラマ

広島県 福島 万年

日の丸を血で塗らしてはなりません
負けた旗立てて再び銃を執る
数値より私を見てよお医者様
若者の死を美化するな花吹雪
寺焼けて貧しい人に寄進帳
コオロギよ鳴け鳴け月が昇るまで

米子市 青戸 田鶴

火星の土にナサも世界も大よろこび
久々に次男のホラを聞いている
三日月が漫画チックな夜の道
遠回りしよう若者がたむろする
親切が足りない駅の階段だ
幸せな絵を見たあとの淋しい日

奈良市 米田恭昌

ターミナル人間模様醸しだす
年末年始へそくり出番せがまれる
浮き世捨て自由気ままな青デント
調子はずれの口笛きつと御前さま
いつまでも笛と太鼓の俺お前

生駒市 飛永ふりこ

不意衝かれ空白となる震度3
深層にちくりと棘が飛んでくる
雲海と出会い弾むよ初シャッター
心身のトレーニングを今年こそ
アイゼンの重さ忘れる雪の華

香芝市 大内朝子

調子いい日と悪い日とあるいのち
マネキンにもうすぐ春を告げられる
口だけの元気を足に笑われる
新色の口紅買うてみる弾み
迷いつつ今日も確かに生きている

橿原市 安土理恵

綻びをたんねんに縫う母でした
ヒロインはわたし女の城守る
わたくしは君の占有物でない
鎌の月 歪な愛を切りつける
騒がない女にさせた修羅の数

橿原市 居谷真理子

忘年会下戸には下戸の騒ぎよう
手袋を田舎銀座で買った旅
飛行機も地球にしがみついて飛ぶ
背の荷物ひとつ捨てよう誕生日
木枯しよ私にまだ母が居る

大和郡山市 坊農柳弘

アドリブが効かぬ万座の眼が怖い
空白のページを埋める春の章
タカラジェンヌまたすみれ色づく初舞台
二次試験春はあけぼの国公立
粗衣粗食めし一粒にある命

奈良県 渡辺富子

母も子も木枯しも哭くイラク行き
あざやかな敗北光るハルウララ
鍋底にこびりついてる妻の愚痴
八起き目も突っかい棒の妻がいる
森のしづく浴びて人間取り戻す

和歌山市 木本朱夏

子を抱いて猿に見習う母性愛
はぐれ猿のうしろ姿は父だろ
小鳥くる庭にひとりのティータム
泣いて笑って一生なんてシャボン玉
最後まで使ったことのないノート

和歌山市 古久保 和子

いい天気ですね献血日和です
エンゲル係数ベットの餌も加算済み
てんでこまいさせて小さな悪魔たち
気を抜くとすぐ引力に負けてくる
ポケットの隅にこの世の塵芥

和歌山市 福井 桂香

初鏡今朝はきれいと言いきかす
昭和史の黒い部分に積もる雪
気骨は稜稜 腰にカイロ貼り
イースト菌反骨の気は溜めている
お荷物にならぬ道具でいたいけど

和歌山市 武本 碧

カラットの重さで愛は計れない
的を射た意見へ横槍が伸びる
ギヤラ無しでやれないものに馬の脚
本心に近いところに棲む阿修羅
ベストセラーへつい乗せられたバカの壁

和歌山市 田中 みね

肩書きが取れて暢気な一人旅
ばあちゃんもママも半額好きなんや(スーパード孫6歳 2句)
人前でお願ひ孫よ黙ってて
あっちこつちと五体の捻子が軋み出す
ティータイムあんころ餅を二つ三つ

和歌山市 桜井 千秀

反乱の気配動揺せぬことに
よじれたらぶつけて直す外はない
欲張った荷物余生を脅かす
グラスの中の嵐見て見ぬことにする
ひとり旅自問自答の繰り返し

和歌山市 木村 初子

未来図がまぶしく見える朝西
健康を感謝八十路の日向ほこ
陽と遊び風と遊んでひとりごと
自分史のつもりで綴る一行詩
日々好日足の弱さも気にならず

和歌山市 玉置 当代

穏やかな新春を迎えた夫婦箸
暮れからの風邪持ち越して寝正月
気遣ってくれる優しいお婿さん
加齢するたびに体が狂いだす
一匹の猿に振り回されている

和歌山市 松原 寿子

風吹えて女の戦始まりぬ
差しつさされつほのほの染みる国訛り
修羅越えて膨らむ夢にある期待
大切な捻子だ緩ませてはならぬ
やる気まだ妥協をせずに弾む靴

和歌山市 細川 稚代

シヨッキングなニュースばかりで年が明け

文明の中で心がやせ細り

公園の猿が教える家族愛

カタログを積んでながめて風邪の床

ふくらんだ夢のつづきを追い求め

和歌山市 牛尾 緑良

一通のハガキが春を連れてくる

一幕の民話が終わる母眠る

慣れない読経に亡父が苦笑する

サッチモのCDを借る息子から

暦みな夢を大事に秘めている

和歌山市 楠見 章子

カラフルなスイートピーを玄関に

ちぎり絵からまれるお猿の笑い声

手つかずの自然の中にあるいやし

ひと言で開くこころのバラシユート

わたくしを貫く林檎丸鬚り

和歌山市 榎原 公子

児とつなぐ手から元氣を送られる

夜話をテレビに盗まれた茶の間

テロップが流れまさかが走り出す

記憶力落ちて切り抜き増えていく

反抗心だけが若々しく疼く

和歌山市 山口 三千子

境遇が似ていて絆深くなる

削除キー押して消したい事ばかり

予想せぬ事で向かい風に遭う

人事と思えぬ明日へ我が身置く

油断して言葉のマジックに嵌まる

和歌山市 青枝 鉄治

年金のふところ揺る義理の数

政治家の辞書から消えてゆく誠

当選が疎遠の人を引き寄せる

使途不明の真相知っている女将

就職難大学院で待機する

和歌山市 西山 幸

心機一転と今年も大書する

おんな正月姦しいのいいものだ

よく眠りよく食べ明日がこわくなる

思い出をしつかり喋る鮫小紋

そしてまた歩き続ける女坂

和歌山市 松尾 和香

カタログで家もお墓も建てました

西方浄土目指す余生に徳を積む

膨らみに母のうれしい岩田帯

白百合に千両墓もお正月

おもしろい人生送るひとり旅

和歌山市 上 地 登美代

海南市 三宅保州

心猿を静めてくれる星月夜

怪我をしたお陰のような寝正月

ワントッチで開いてくれる母の胸

病室の窓から見える別世界

姿見にまた食み出した体脂肪

病名を知りたくて取る診断書

借りたいと思う時ある猿の知恵

FA宣言してみたいわと妻が言う

初夢の富士鷹茄子を今に見ず

真つ直ぐな道のり余所見したくなる

和歌山県 中 後 清 史

鳥取市 杉本孝男

麦めしにトロロがけして流しこむ

徹夜より体に毒な妻の愚痴

遣り甲斐のある人を選ぶお裾分け

結論は急ぐな果報寝て待つか

用件を切りだす前の深呼吸

レンタルで我慢一度のモーニング

甲高い声に圧されている受身

愚痴の山積んで崩して笑い合う

手抜きしてあとから倍の尻ぬぐい

青虫も一緒に買って来たキャベツ

海南市 堂 上 泰 女

鳥取市 永原昌鼓

初日の出拝む米寿の母の燦

しみじみと阿呆になった探し物

小さい芽摘んでしまったあわてんば

飽食の跡を詰め込むゴミ袋

雑煮から家族の絆太うする

悪人は愛想笑いで隙がない

マリア・カラスの熱唱聞いて明日へ熱

悶々とあの一言が眠らせぬ

子別れの作法キタキツネに学ぶ

夏は冬 冬には夏を恋しがる

海南市 谷 口 義 男

鳥取市 有沢せつ子

火達磨も覚悟で意地を通し抜く

観光へ演歌 砂丘よ風になれ

当てにした老後の福祉先細り

待つ間きよろきよる駅のコンコース

余暇と金出来て病魔に魅入られる

往復をウォーキングして歯の治療

政治家のラッパで躍る雑魚の群れ

懐が寂しくカイロを入れて出る

主張など無い手も混じる多数決

買つてない籤鳥取で二億出る

鳥取市 植田 一京

老化防止に恋は薬のように効き
ケイタイを持たねば輪から外される
失敗を赦し合つて泣き笑い
情報の多さに何時も溺れそう
まだ欲があつて元氣に明日を待つ

鳥取市 福島 庸二

一言の添え字で活きる年賀状
ハイチーズ笑顔づくりがきこえない
おふくろに似た味付けの煮たき物
正論の裏に屁理屈見え隠れ
一拍に盛り沢山の神頼み

鳥取市 徳田 ひろこ

阿弥陀くじ迷つた果てに凭れ合う
心まだ肉付けがなく揺れている
上げ底のころ寒々雪が舞う
目を閉じて春の風景画に浸る
平然と成人ごとき詩を詠む

鳥取市 加藤 茶人

戦争を美化して徴兵を知らず
出来るのがひとり従兄弟にいて苦言
成金になって吹き出すすきま風
自己嫌悪隠せば隠すほど目立ち
同窓会針が止まつたまま和む

鳥取市 宮脇 道子

新年の誓いは老いと勝負する
新雪でイランの過去を洗いたい
意識して自分に惚れる年にする
おとぼけが解る頭が憎らしい
老いた友賀状の筆はまだ見事

鳥取市 岸本 宏章

謝罪するトップが猿に見えてくる
マンシヨンの名前聞いてもすぐ忘れ
凱旋のときには降りぬ無人駅
向き合つて話せばこころ響き合う
金の成る木の根元には罌がある

鳥取市 岸本 孝子

欲のない絵馬に神の目ふと止まる
年毎におせちの手抜き多くなり
事始め堪忍袋修理する
あれこれと夢を肴に屠蘇を酌む
毎日がとても大事な歳となる

鳥取市 武田 帆雀

九条の鎖日に日に瘦せ細る
悪びれもせず歳末の高値札
落書きのような賀状が来て元氣
南田と長門のような初春の膳
閑人がトップニュースを提げてくる

鳥取市 西村 默 光

宇宙旅行夢見て燃える好奇心
ペン先へ今も脈打つ好奇心
赤い爪へはち切れそうな好奇心
鼻の下の長さを競う好奇心
ノーベル賞へ生命を賭ける好奇心

鳥取市 倉 益 一 瑤

明日の絵はでつかく描けよ男でしょ
泣き笑い夫婦でこねたまるい餅
ボタン雪やさしい言葉欲しくなり
不器用な鬼の温さを知っている
正月は銭がなくてもやって来る

倉吉市 山 本 玲 子

全山もみじ何思うたか俄絵師
みんなまで言わぬが匂う下心
お互いの寝息窺う共白髪
言いかけた事を咄嗟に忘れちゃう
不揃いも我が家の自慢手打ちそば

倉吉市 牧 野 芳 光

愛らしい犬も獣の息を吐く
ネジ一本抜いて気ままな一人旅
ごめんねの形で寝息たてている
妻の尻辺りを叩く布団干し
赤ちゃんが笑うと皆が笑いだす

倉吉市 猪 川 由美子

釘を打つ薬人形が足りません
MRI心臓まで見透かされ
命救うはずの病院頼れない
ゆーらゆーら小泉丸よ頼みます
年金へ背筋ゾクゾク冬の陣

倉吉市 米 田 幸 子

無人駅人待ち顔の犬が居る
ざりざりで交通事故の難逃がれ
面目を果たして消えたシャボン玉
全身に汗が噴き出す失意の日
年金でその日暮しも乙なもの

倉吉市 松 本 よしえ

にんげんに武器を与えた神の過誤
二億円当ると顔に出してしまう
山を出た狸の親子肥りすぎ
毎日が日曜なんて洒落とれん
赤ペンの○×があるえんま帖

倉吉市 野 口 節 子

明るさがたった一つの取得なり
ほら吹き元気印に惚れている
詩人より料理上手な女が好い
泣き笑いきつと花咲く時が来る
礼節をかなぐり捨てているラッシュ

倉吉市 淡路 ゆり子

健康は四方八方倅せにする
わたくしが借り物で出る美容院
動物はやさしい人の匂いがわかる
世話好きで村の広場の草を引く
一病と大事に暮らすさくら待つ

米子市 野坂 なみ

古時計気ままに生きていいのだよ
空っぽにしてお説教落語さいている
老化徐徐にがい薬でバランスを
添寝する枕メルヘン詰めている
甘辛両刀きつと元気な証でしょう

米子市 光井 玲子

気骨ある人だな信頼が出来る
この歳で人のところがまだ読めぬ
満月に私のころさらけ出す
観点の違いはあるがさからわぬ
咲く花は土の美味しさ知っている

米子市 木村 富美子

ダイエツトあきらめてまた和菓子買う
私が猿に似てると子が笑う
人間の弱さが村に群れて住む
鴉群れ怖いと思う道一人
来るものは来ると読んでの風まかせ

米子市 永井 三津子

謎めいた医者^がの動きに血^が凍る
金と余暇出来たが若さ無くしてた
謎なぞの楽しさ子にも教えとく
告白も出来ない人に胸焦^がす
触れられた腕^があなたを恋^がしがる

鳥取県 西川 和子

それぞれの個性繋いで楽しい輪
欲ばってみても一人前で足り
ご先祖の遺伝子を継ぐ面構え
満月の夜も争いまだ続く
もう二度と地球にきのこと雲いらぬ

鳥取県 原 みさを

あの世への待合室にいる笑顔
マドンナの笑顔がいつもめめさせる
今年の計あれもこれも具沢山
ぬるま湯の仲を賀状が行き来する
やがて子等に焼かれる顔を刺っている

鳥取県 土橋 睦子

笹藪の中で小鳥の初稽古
湿原も雪どけを待つ水芭蕉
ゆつくりと進む愛なら信じよう
地下鉄は怖い方向音痴なの
常備薬揃えて旅の準備する

鳥取県 土橋 はるお

鳥取県 奥田 保子

耳に負担かけないように栓をする
毎日が退屈そうな鬼瓦

手を貸さぬこれもひとつの愛だろう
見栄を捨て気楽に生きることにする

退屈をさせぬ一升びんがある

生きている証に夢を追いつつ

欲張っていつも大きな損をする

逃げ道を考えてからのものを言う

人生もホレたハレたで楽しいな

食べ物の王様米に感謝する

鳥取県 岩崎 みさ江

鳥取県 奥谷 彩子

生きている証に年賀状を書く

お屠蘇くみほつと主の顔になる

いろりの火消え語り部も消えていく

生き方を変えて現世もまだ楽し

胸底にまさかの鬼が隠れ棲む

生き上手仮面いくつも持っている

豆撒きもしないで鬼と共住まい

悲しみに沈んだ毬も浮き上がる

目を閉じて息つめて聴くピアノシモ

風花と和みあつたた仏さま

鳥取県 太田 幸枝

鳥取県 村上 信子

ダイエツト心の方が先にやせ

落葉したポプラが男らしくなり

恋したら荒れたお肌が艶を出す

新聞に包む焼芋あつたかい

火の車ひいた母の背温かい

花の苗間引き近所へおすそ分け

仲人は裸でよいと軽く言う

やりくりは上手いまだまだ呆けてない

ほのほのの恋で終った早春賦

腹の中読まれていそう横を向く

鳥取県 平尾 菜美

鳥取県 蔵本 悦子

挨拶をしながら帯を結んでる

日本が大きく揺れている師走

起爆剤もちこたえれぬ悪い癖

イラク派遣遺猿もびつくりするだろう

地だんだの涙知つてる大地の樹

ああ拉致よ家族の思い届かない

紙つぶていたたく度に目が覚める

くり返すたびに神経太くなる

上がらない税に情けかけている

貰うばかりでいまだに恩が返せない

鳥取県 小谷 孝美

嘘一つ大きな罪になっていく
泣き笑い重ね夫婦の唄綴る
偶然が重なり罫に気づかされ
破られたページ手帳がきな臭い
夫婦ゲンカ避けてベットと仲が良い

鳥取県 西原 艶子

用もなくふらりと降りた無人駅
逢いたくて心に描く夢の駅
これからは同行二人ひとり旅
ライバルへ敵愾心が渦となる
魚捌く手付きいつしか姑に似る

鳥取県 夏目 一粹

塩水にときどき命漬けておく
ろくでないこと考えて癒してる
諦めのこころを持って金を貸す
火の恋もいつかはただのひとしずく
年金日まず居酒屋でアカ落とす

鳥取県 澤 裕子

大胆になるには酒がまだ足りぬ
気が向くと手間暇かけて料理する
根性は餅の粘りに負けている
退屈な人が見ているワイドショー
退屈に無縁育児のど真ん中

鳥取県 石谷 美恵子

三が日雑煮がパンに寄りきられ
溺れそう甘いお世辞も悪くない
他人さまのシヨックはみんな軽く見え
お互いに荒れ球避けて夫婦ごま
露天風呂あーこの辺が極楽か

鳥取県 谷口 次男

三が日迎賓館の顔の居間
新しい顔に化けたね初詣で
恙なし一年ぶりの年賀状
頼もしい消防団の女たち
不思議だね年々違う餅の味

鳥取県 上田 俊路

呆けるからと今年限りの賀状来る
御来光拝みお城でウーロン茶
鉄砲と戦車でイラク井戸掘りへ
貯えたら人に施すのを迷い
核をもち拉致する隣怖い国

鳥取県 新家 完司

除雪車の音聞きながらカニさせる
カニを食う首は無邪気で無防備で
絶対に焼酎七分お湯三分
肝臓よ年中無休許されよ
お花見の夢を見ながら眠ろうか

鳥取県 埴 寛子

賀状たち過去温めて集い来る
老いの味しみこむ賀状文字悲し
賀状来ぬ老友気にかかる雪もよい
お近づき年々ふえて旅立てず
三百枚詠って描く年賀状

鳥取県 田 村 きみ子

赤飯を炊いて息子の退院日
ウィルスは恐い息子の耳奪う
ソロバンが好きで計算機はいらぬ
草むしり好きな役ですありがとう
馬鹿になる役をそこそこ演じてる

鳥取県 下 田 茂登子

一悶着ついてあしたの風を待つ
大胆な嫁は言い訳などしない
無職とは言えない主婦の座についた
別れの日泣いた涙は宇宙まで
男でしょ負けて勝つこと知るもよい

鳥取県 国 森 武子

酒酔いはよろめくけれどころばない
陽があがる何と神々しい瞬間
陰陽師もつともらしい髪のはし
交通量少い時に車出す
これだけの事出来ぬかと独り言

鳥取県 山下 節子

老老介護一日ひとひが泣き笑い
ロックした手帳に秘密ありそうだ
偶然が続き疑い深くなる
しんがりに居たばかりに捕まった
つま先の向いた方には母がいる

松江市 銭 山 昌 枝

大観の富士を眺めて屠蘇を酌む
新鮮な烏賊の目玉に睨まれる
雑音を遠くに聞いて自然体
遠回りしても避けられない閑所
瞑想の温度で入る仕舞風呂

松江市 川 本 畔

蓑虫が遊んでいるよブルーランコ
叶わない夢が時どき立ち止まる
歯ブラシも私も一途擦り合い
少しずつ缺が錆びて愚痴っぽい
綿菓子が入り天神様をなでる

松江市 松 本 知恵子

絵手紙の筆に任せて初春を描く
神技のようにじいちゃんコマ回す
眠らない街から神が逃げ出した
梟を眠らせ森の夜が明ける
千年の巨木は神を宿らせて

松江市 三島 松丘

何だつて危険なものは面白い
節くれた男優しく卵割る

夫婦の眼何時しか同じ相になり
百回忌ですと寺から来るメール
嬉しさを泡にとかして振る茶筌

出雲市 城 多喜

びつたりの靴を探して小半日
足元を大切にするおばあさん
突然の傷みに狂う一ヶ月
触れたものの皆杖にして立ち上がる
いささかも恥じてはいない朝寝坊

出雲市 小白金 房子

新風を通す畜舎に初あかり
元朝も昨日の続き搾乳す
寝正月たつぷり農婦の骨やすみ
玄関へ我流を生かす花はさみ
女五十 裏も表も持つ演技

出雲市 多久和 敬子

ちよつびりのやる気温め春を待つ
衝動買いの服はタンスで眠ってる
ソロバンをはじいて今日も無事終る
無欲にはなれずやる気をちよつとだけ
父さんのとほけを見抜く寒の月

出雲市 佐藤 治代

お早うさん元気に言える朝がある
仕合せを感じる朝のプチトマト
雪かぶり大根甘く舌にのる
病人は病人らしい歩き方
六度目のお猿なおさら頑張るぞ

出雲市 竹治 ちかし

妻の眼を通すとゴミになる宝
だんだんと脳が腐って口が冴え
事務的な口調で詫びのアナウンス
綺麗事言つて互いに笑い合う
茶畑も荒れ母さんの三回忌

出雲市 吉岡 きみえ

春だなあひとつ大きく深呼吸
サシスセンむつかしことは言わぬ味
まだ余力あつて明日の風をよむ
とほとほと影もいとしくまるくなる
浮き草のこの世じつくり従いてゆく

出雲市 岸 桂子

実をつける術を知つてたこぼれ種
聞き馴れた足音ペット走り出す
自我捨てて見ればたいがい許される
少年の回り道には手を貸そう
日記書く今日の素顔が見たいから

出雲市 小玉 満江

二〇〇四年平和の願い込めて初春
アメリカの自由の女神眠れない
忘れたい軍歌をニュース見せつける
予約したお節豪華に大晦日
終章に輝くものを残したい

出雲市 園山 多賀子

三猿に狎れた私のモノローグ
訥訥と独り芝居を演じきる
蹶いた弾み石にも論される
ジョークには弱い女の逃避行
身の回りほんわか春の風が吹く

出雲市 石倉 美佐子

ストールを深く被って雪女郎
さんさんと火の雪が降る胸の中
ルーベで見ると鱗に見える喜寿の肌
夫傘寿 戦陣訓をやっと抜け
桃の花 妻は一日内裏雛

島根県 伊藤 寿美

穏やかに流れていこう後少し
夢に出る亡夫は横顔見せて消え
法恩講さん和尚と啜るところ汁
朝市の鮫鱈に降る斑雪
また明日に延ばす返事が胸にある

島根県 榎原 秀子

お年始にゆく寺の坂山の坂
初市の小さいしじみがいとおいしい
指体操悲しいことにぎこちない
私の嫌な噂をふっと聞く
じっとして自分探しの時にする

島根県 多々納 テル子

しゅっしゅっしゅっ乾布摩擦で湧く活気
若くなる水が飲みたい七合目
花に水ゆっくり頭あげてくる
飲みすぎて呂律回らぬ縄のれん
仏壇のお菓子を貰い午後のお茶

倉敷市 井上 富子

心の被爆 暴言卑語の放射能
シェーバーに苦勞をかけるイボ黒子
棺から重いバトンを渡される
ご近所に筒抜けだった隠し事
慢心の毒がまわった鬼瓦

岡山県 小林 妻子

宝くじやっぱり欲を買いすぎる
お雑煮は神様の次ぎ父無職
コネ次第この世はまんだ不公平
神様に貰った眉が気に入らず
正月は休めと雪が降りつつく

岡山県 山本玉恵

あの笑顔幸一杯の人らしい
相棒になる盃にある迷い

世を拗ねて見ても時間は過ぎて行く

或る時は首振り分けて生き上手

精一杯愛積み重ね番外地

竹原市 森井菁居

緊張が解け居眠りの心地良し

やり残し多くて六十五歳のフアイト

前金を渡すとドロンされそう

集中砲火浴びそうだから出しやばらぬ

強引なエゴは墓穴を掘り易し

竹原市 正畑半覚

一言が忘れられない人になる

一日一善一年三百六十五善

一円を押し頂いて拾う老い

もう一度いっしょに飲んでみたい人

一日の時間がとまる妻の留守

竹原市 時広一路

塞翁が馬で今年を生きようか

コーヒーを濃い目に入れて今日一人

黒い服好きな鴉の意地っ張り

檻に住む安心感か昼を寝る

好きだから昨日はうどん今日は蕎麦

竹原市 石原淑子

白鷺の舞う竹原の住み心地

七草を探す畠の草むしり

赤粘土やっぱ居たかも火星入

初詣で厚かましくも命乞い

ときめきの延長線にある六十路

竹原市 古谷節夫

日々好日雪も桜も句に残そ

ネクタイと転勤辞令はもう忘れ

弱点に触れず夫婦のティータイム

酒と辞書両手に持って句集読む

変身をしるとお酒が活を入れ

竹原市 三宅不朽

健さんが小百合が老ける富士暮色

豊かさという霧の中影がない

老醜を意識折り目をいうて着る

鉛筆に袴を着せる肥後守

講話より美人の手話に気をとられ

竹原市 小島蘭幸

観覧車くると街を初春にする

麻生路郎の本を見つけたお正月

二〇〇四年も比翼塚から明けてくる

箸袋に犬の名前も書いておく

九連休退職してもやれそう

広島県 藤 解 静 風

一年が早い元氣なカレンダー
ヒツジから苦難のたすき継いだサル
九条はしばらく箱へ封じとく
ハルウララ僕も妻には連敗中
波長さえ合えばお喋りするマスク

宇部市 平 田 実 男

説得に行つてミイラにされました
深追いをしすぎネズミに手を噛まれ
弁護士をつけると刑が減る不思議
背比べするどんぐりを笑えない
実家では顔も心もノーメイク

美祢市 安平次 弘 道

変化球妻につこりと受け止める
やさしさに飢えた女の束ね髪
丸木橋 女に度胸試される
手術するときまりごとりと水を飲み
理屈ではわかるが運がついてこぬ

熊本市 永 田 俊 子

変る世や真冬の女のノースリーブ
除夜の鐘わたしの小さい鬼を打つ
いい話鍋の余熱で温める
捨てきれぬガラクタが知る戦中派
夢ひとつあきらめました針の穴

熊本県 岩 切 康 子

兎に角に逢う人に会い勧めねば
正常値告げて再検予約させ
ダイエット運動法を変えてみる
ナノ金利安全のため良しとする
わが嗜好淡泊味に落着いた

唐津市 久 保 正 剣

八十二歳まだ前向きの筆洗う
目のゴミを舌先で取る愛がある
均等法土俵の砂がいやと言う
半眼のダルマが見てた茶封筒
上座なら下戸のそばにも来る芸者

唐津市 山 口 高 明

追悼の言葉むなし遺族席
国民はしほり他国へ援助する
妊娠の妻がゲテ物食べたがり
儉約は昭和人間戦中派
巫女さんの衣裳脱いだら十九歳

唐津市 市 丸 晴 翠

挨拶を丁寧にしてはてどなた
拉致家族切つてはならぬ糸電話
通学路人信じない子を育て
心音を聞いてだんだんママの顔
聖誕祭済めば寺社への初詣り

唐津市 樋口輝夫

改革の二字がコラムの餌になり
クラス会天下を取って二日酔い
うまい餅体重計が目を瞑る
ひこばえの生きる力に教えられ
光輝万歳中国飛行士無事帰還

唐津市 井上勝視

やっと今出雲のくじに感謝する
定年のない老妻に頼り切る
同居話 笑顔ひきつる若夫婦
自覚する老化に生きる欲が増え
つきあいの下手なあいつは貯めている

唐津市 宗水笑

寒の水 古稀まで生きた音で飲む
生きてこそ花も実もある七日粥
人の顔猿から見ると変だろう
祭神は問わぬ三社の初詣で
雑草の人生ですと太い指

東かがわ市 成重放任

健康食今朝も御膳に梅一つ
老松が私の過去を知っている
惜しいなあ あの門被り松食いか
竹割ったような気だてに惚れなおし
その人の顔を浮かべて賀状書く

東かがわ市 神保坊太郎

縄のれん先代からの義理を呑む
めでたさを上位に据えた常盤松
菊花展菊の香りを着て帰る
盃に梅一輪のおらが春
梅切らぬ馬鹿と言うから切り過ぎる

東かがわ市 瀧井勝

欲が出て感謝心をつい忘れ
若者が生き甲斐探す世界地図
切手代に足りぬ利息のご案内
梅咲いて悪友と酌む至福の日
この星の何処かで今も殺し合い

東かがわ市 川崎ひかり

栄枯盛衰時代見てきた城の松
復活の夢を支える竹刀ダコ
種袋ふれば土恋う音がする
梅一輪ゆっくり開く春の画布
初天神梅の小枝でゆれる絵馬

松山市 古手川光

逆らわず風の形に川柳 かわやなぎ
借金付きの道路は要らぬ孫ひ孫
立ち飲み屋仮面はずしてから入り
オメデタイのはあんなや言うて笑われる
初詣で神さま今年変えてみる

愛媛県 中居善信

九条を曲げてもやはり行っちゃった
落ち葉はらはら私はひとりぼっちなり
外面へいい人ですと言われてる
ブーメラン戻って来ないのは誤算
いい女ばかり武富士ダンサーズ

高知市 小川てるみ

みの虫も私も春を待っている
一灯を掲げて神と話す
ロゼワイングラスに恋の灯がともる
白菜を一気に漬けた霜日和
寿限無じゅげむ孫がすらすら電話口

砂川市 大橋政良

めし三度老後を語る箸二膳
自画像に貼ってる夢よう一度
こぼれ種こぼしたように芽が育ち
後ろ指自分の背にもうしろ指
嘘一つ伸るか反るかの賭をする

黒石市 相馬一花

大物の秘密を握る女秘書
披露宴ラストは花で締めくくる
呆けたよと人に言うほどまだ若い
初めての浮気に弾む軽い靴
教養のある人と酌む苦い酒

十和田市 阿部進

肩のこりおやつを食べてほぐします
おしどりと言われた夫婦離婚する
ほのぼのと仲良く妻とおくりたい
不器用で皆なに迷惑かけている
満ち足りて人の痛みに気づかない

弘前市 今愁女

小春から今朝は大雪まぐれ天
本読めと言うごと雪に閉ざされる
雪まつり雪への憂さをちと忘れ
雪像にしばしメルヘン漫遊す
真冬晴れの外で雪眼に冒される

弘前市 高瀬霜石

アンテナが低いと楽な時もある
社長より偉い顔している達磨
道草が好きで時々火傷する
平穩無事今日も電話の鳴らぬ幸
酒を飲む明日も元気でいるために

弘前市 宮崎ヒサ子

暖冬を塗り替えていく虎落笛
雪国に住み雪掻きという悲哀
雲間から覗く陽と和すシクラメン
真冬日の道きゅつきゅつと会話する
束の間のこの冬晴れのいとおしき

弘前市 富士慕情

さいたま市 八田 敏

術中に嵌まり足湯を抜け出せぬ
地獄から欠員待ちという知らせ
水槽の円さに慣れてきた金魚
休むのに詠え向きの石がある
北限の猿はじつくり春を待つ

弘前市 一戸ツネ

夜が明ける天の岩戸の隙間から
よせばいいのに嘘の片棒がついでる
仏飯に春の野菜の彩を盛る
引き潮に静かな蟹の身繕い
老いてなお等身大の夢多感

弘前市 櫻庭順風

豊艶を天女の貌で彫る志功
一気呵成に心眼で描きまくる
豪胆に彫る緻密な下絵手繰りつつ
鑿と眼が走るが如く彫りまくる
留学生のカンパに絵図を摺りまくる

弘前市 岡本花匠

地吹雪や鬼の念仏児は黙る
盆梅の慕情にひたる北の性
つばみ梅 天神さまへ夢願う
早春の陽ざしを狙う椅子の位置
春遠き津軽を見詰め夢あまた

七草の粥に亡母の影浮かべ
純白の富士へ今年もカメラ向け
レシビ見て材料買つてもう忘れ
冬至芽にまた追われ出す菊作り
未練捨て身軽な余生明日の夢

佐倉市 岡井 やすお

おもうさま おたあさまからパパママへ
同盟の証 咲かせるポトマック
上野は炭に大統領もぐら
花を見て食べる梅桃桜ん坊
裕ちゃんをまた兄ちゃんが掘り起こす

東京都 岸野 あやめ

痩せ薬死なぬ程度に効くならば
駅新装消えた歴史と思ひ出と
三面鏡自問自答もほどほどに
縄電車今運転手ひとりだけ
切り札をちよつと虫干ししています

東京都 後藤 早智

予定日待つ幸せのベビー服
猿年へ世界が交差する銀座
初春の歌舞伎座包む猿尽くし
猿芝居笑いの渦にある悲哀
猿山のルール見直す干支の春

東京都 清原悦子

夢ひとつ小さな家で弾けてる
まあまあと酒つぎ合つて飲み過ぎる
お花屋に今日の幸せ買いに行く
タマゴツチ今頃何処にいるんだろう
他人の目細かくチェックしてくれる

八王子市 播本充子

高齢者マンションというユートピア
知恵を絞つて税金を取り戻す
赤チャンの耳に正しい日本語
初夢を覚えていないのも加齢
タクシーで意気揚揚の福袋

横浜市 菊地政勝

絶食を解かれ生きてく希望湧き
空元気出してもたかが知れたもの
飛ばされた黄砂とまどう広い空
いさかいもあつて障子を貼り終える
裏切りの予感飲屋でウーロン茶

横浜市 保田絹子

君の手に触れてときめく歌加留多
噛みしめる御節が誘う里心
忍耐も自負の支えがあればこそ
寄り道で得た人生の隠し味
筋書の無い人生にト書増え

横浜市 小野 句多留

大晦日プラスマイナス零とする
正月の客は楽だなすぐ笑う
ケイタイのオフに疑惑がつきまとい
緩急の絆で越える夫婦坂
参拝にまだあきらめぬ不快感

富山市 島 ひかる

百歳へ後押しをするいい仲間
ケイタイとわたし充電をする夜中
不眠症くすり飲む人飲まぬ人
臨死体験して死に際は怖くない
郡集の中で昔の声に遇う

富山市 舟渡杏花

寝違えの首手弱女の手が伸びる
歳月が思わぬ味を置いて去り
風花の道 再びのない人と
武装解除ゆつくり帯に手がかかる
恩に着るぞ着るぞとこうるさい

静岡県 蘭田 獏 杏

今年こそ皺を一本減らしたい
山奪い里に來た猿追い回す
介護士が仏のように拝まれる
煎餅が硬い明日も晴だろう
福袋僕の要らない物ばかり

愛知県 早川盛夫

一本の道へ迷つてばかりいる

判断は間違つてない回り道

老いを知る目から足から五欲から

町内の見回りいい散歩です

酒をやめタバコを止めて生きている

京都市 都倉求芽

いつの間にか乗せられている時流

山々は反り身でかわす季節風

いつまでも元なになにと言うでない

人さまの役に立ちます汚れ役

日常の続きで終る三が日

京都市 高島啓子

メダカなど無くても困らない子ども

風邪引きも脳梗塞も犬のせい

淋しくて放送局へ出す手紙

早死にをしそうな多芸多才ぶり

幕僚長派兵へ少し嬉しそう

亀岡市 井上森生

金や銀世界遺産の京の寺

水仙の便り淡路は早い春

風雅にも愛で育まれ京野菜

担がれて炎が踊る二月堂

余生ではなくて涅槃に向いてGO

京都府 稲葉冬葉

宝くじ仏壇に入れ年を越す

大王松活けて寿ぐ未来像

ブルーマウンテンの香りにひたる昼下り

頭悪いが銭の勘定出来ている

裸になつて湯舟にお湯のない悲鳴

京都府 丹後屋 肇

露天湯を茜に染める御来光

托鉢に両手合わせる雪の門

捜査犬土砂のうめきを見過さず

またたいて星も拍手の薪金

てにをはに神経質な短詩型

大阪市 西出 楓 楽

落葉掃く姿絵になる歳となり

そのうちに狂豚病も出るだろう

きさらぎの街チョコレート色になる

酒二合あれば天女にすぐなれる

敵はまだ林檎がぶりと丸鬻り

大阪市 前 たもつ

ハルウララ高見盛のどこか似て

時代とや仲人までも死語にする

天辺を誰にもくれる観覧車

霊長を返上したいことばかり

呼んでください旗振りぐらいまだできる

大阪市 古今堂 蕉子

大阪市 川久保 睦子

いないさみしさ いるわずらわしさ夫婦です
お外様と呼ばれるほどの出かけよう

子が三人雀が雀生みました

外面は鴛鴦のごとく満点

煙幕をはりすぎ味方も敵にする

大阪市 榎本 日の出

初メールやりとり出来て友も増え

嬉しくて金魚もおどるフラダンス

生き方の違い同情いりません

本当を知っているから黙ってる

サラ金の看板いやに目立つ町

大阪市 神夏磯 典子

それなりの覚悟が出来てから楽し

年賀状の数は私の守備範囲

好物はちゃんと残してくれている

消しゴムはいいなシコリを残さない

ゆつくりと噛めば味わい倍になる

大阪市 小糸 昭子

尻尾切り何時も弱者が選ばれる

家出かと思うほどの荷詰めている

ミス一つ外されましたリストから

正論を吐いて自分に酔っている

建て前の議論はびこる偽正義

恥を知るだから頑固になっていく

太らない程度に毎日食べてます

ワンカップ戦う話ばかりする

ホケキョケキョうぐいす春の準備中

不仲とは知らず垣根をこえる花

大阪市 津村 志華子

生きるってすばらしい よし頑張ろう

一枚の賀状に遠い恋がある

母さんの訓えは肝に命じてる

うかうかと過ぎた人生悔いばかり

心地よく揺られて駅を乗りすごし

大阪市 鈴木 トヨ子

ケアの坂 嫁と一緒に登る幸

補聴器もランラン春のスニーカー

妻の愚痴また唇がふるえ出す

セクシーな夜の蝶にも母の顔

貧乏くじでしたと妻が目で笑う

大阪市 中村 叡子

年賀状なんとワープロ多い年

イラク派遣身の引きしまる年あける

新年会あいたい人に会い感謝

友の家猫三匹が迎え出る

七草の名をみな言えて粥を食べ

大阪市 川 端 一 步

うらかな早春汚す靴の音
病む友に長生させよと返り討ち
春ですよお城の梅が呼んでゐる
少しづつ新陳代謝する賀状
飲み過ぎにいい塩梅の七日粥

大阪市 玉 置 英 子

今以上何も望まず袖の風呂
年頭に景気よろしき福袋
お詣りの楽しみ露店見て回る
鶏もインフルエンザ気の毒に
落ちてなお人の目を引く紅椿

大阪市 熊 代 菜 月

思ひ出を重ね家族の旅日記
枯れてなど居られるものか古稀だとて
旅に出て心開いた友が出来
真夜中に酒盛りしてるおひな様
有難や今年も出来た初詣で

大阪市 星 野 きらり

新年へ願ひは一つ平穩に
日の丸を汚さないでと語りつく
ウォーキング翔んで見ようか碧い空
転がってくるチャンスには手を広げ
慰めはうわべだけでもついほろり

大阪市 西 川 更 紗

雪の駅老いたる母に迎えられ
検査みな終りにっこりVサイン
予定ばつばつ来年のカレンダー
大寒にてつちり囲む核家族
食卓を花で彩り春を待つ

大阪市 伊 藤 博 仁

五十肩年越しをして五十一
値引き札元値を見せて喜ばす
頑張れと送ってやろう自衛隊
反対の声ににんまりアルカイダ
またやった財布を取りに引き返す

大阪市 津 守 なぎさ

健康が資本あき缶ボランテニア
プランターでも出来ました京野菜
コスモスへ風が運んだ祭り笛
食べ残す料理へ高い宿泊料
取りまきが無理やり着せる赤づくし

和泉市 中 川 楓

わんぱくも真顔となつて雑煮食べ
七種を刻んで折り目つけている
風邪という隠れ蓑あり欠席す
風邪の舌 味定まらぬ茶碗蒸し
湯豆腐を囲んで暫し姉妹きり

茨木市 藤井正雄

終業ベル楽しく鳴って三連休

楽ちゃんは晩酌二合ひと眠り

極楽へ行く気の祖母の寺参り

キーつけや祖父の口癖怪我しなや

今日の悔いいつもの倍の竹を踏む

大阪狭山市 矢野 梓

元旦に旗出す家が珍しい

ゆつくりと歳重ねたい古稀の春

古稀ですのおいしいものを少しだけ

方言のシャワーを浴びた里帰り

忘れてと言われきつちり覚えてる

泉佐野市 山本蛙城

狂う世に春告げ花の真正直

雛祭 壇それぞれに歴史秘め

もうをまだなどと通販そそのかし

合併協ふところ具合隠しつつ

派兵先想うこちらはもう修二会

柏原市 永浜 加津子

元氣な日 北風さえも心地よい

日めくりの一枚にある重たさよ

銭勘定母よりずっと確かな娘

躓いておでこぶつつけ目が覚めた

穏やかに日は明け暮れて待つ手術

河内長野市 植村喜代

ふる里も他人ばかりの風が吹く

戸を開けて寝るといふ日はもう来ない

治安よい思った日本も怖い国

枯葉踏む音に似て来た日本人

借金は甲斐性なんて言った頃

河内長野市 加島 由一

佐渡おけさ出稼ぎそつと席を立ち

手作りのチヨコは貰ったことがない

守る気はないが禁酒と書いて貼る

寅年でさそり座恐い美人です

始まりも終りも恋はアメリカン

河内長野市 石堂 潤子

佇立てていても心の冷え癒えず

オンリーユー今頃悔いてみたとても

チヨキチヨキチヨキ深夜を刻んでいる不眠

野良猫におせちを少し勝手口

温室の中ですんなり育ち過ぎ

河内長野市 水谷 正子

正月は餅と骨折気をつける

自信など無いが兎も角今日を生き

水仙に負けてなるかと腰伸ばす

冬眠を洗ってくれる小糠雨

ゼブラゾーン黄色に見えて虎始動

河内長野市 井上喜酔

パチンコを止めて淋しい父の指

年金で狭い日本をつまみ食い

心停止医学の進歩が妻助け

病棟へ孫の一念千羽鶴

褒められてびっくりお世辞とは知らず

岸和田市 井伊東吉

黒豆煮古いストープ役に立ち

逆撫での靖国参拝する総理

偽ラベルもうご免ですBSE

朝のパン普段のリズム取り戻す

火星着面目果すNASA技術

岸和田市 岩佐ダン吉

一善のニュースに浸る寒い朝

子らの明日摘む硝煙が絶え間ない

混迷が続く汗だけ信じよう

金で済む話と小さい声で言う

イラク派兵また九条が騒がしい

岸和田市 原

お世辞でもうれしいですとのぼせてる

土壇場がこんと熱中できぬ性

おふくろの味で人氣の縄のれん

阿呆らしいと思う利子でも預金する

抜け目なく握手握手の選挙戦

さよ子

岸和田市 木村正剛

元旦に御神酒で断酒誓う夫

惚けるなら欲ばけになる僕の夢

あの噂わたしの家が震源地

雪明かり一本提げてくる予感

九条に頬被りして陸海空

交野市 森本弘風

めでたさは妻と元気に初詣で

双六と百人一首で孫を待つ

酒税だけ納め年金貰てます

美人から買ったジャンボが一万円

着飾った新成人は皆茶髪

交野市 田岡九好

地球儀のイラクこちらへ向けておく

四十になった息子の顔を見る

人生の哀歎を小津安二郎

極楽は風呂につかって雨の音

人の金だから役人太っ腹

交野市 山川日出子

イラクよりイランの地震救助隊

フセインの末路はあわれ穴の中

空襲で無い小学校クラス会

毬つきは軍歌だったよ年女

大根とかえっこしてる魚売り

堺市 西村 りつえ

堺市 和田 つづや

初孫と嫁と天下の三が日

初詣で前厄払う守り札

追われずにさつさとすまそ家事その他

笑い上戸話す前から笑いこけ

初鏡今朝の若さをインブット

堺市 柿花 和夫

三猿は飼わぬ私が消えるから

一幕を演じて暮れたお元日

願いごと一つ減らして二つ足し

案の定禁酒の機会医者がくれ

薄型のテレビなぜだか頼り無い

堺市 宮本 かりん

快速が走る空車を引つ張って

目を閉じてあなたの心聞いている

何げなく言うてる事が図々し

嬉しさを伝えに行こう花手桶

白黒をはっきりさせて揉め出した

堺市 村上 玄也

孫生まれ否応無しにおじいちゃん

問われると飾ってしまう癖がある

マイホーム建てた頃から社のピンチ

何につけ老人性という病

説法が眠り薬のように効き

平坦な道に油断をせぬ事だ

時折に個性軋ませつつ夫婦

いつ以来でしようか妻と喫茶店

聞かれても話しますまい過去の恋

ラブシーン娘と見るは面映ゆい

堺市 志田 千代

姫達が手玉にとった物語

白木蓮なんと賑やかなんだらう

赤ワイン男はしまいまで紳士

カーナビが袋小路へつれてきた

袋がけしないうりんごも私も

四條畷市 吉岡 修

明日はだめあさつてもだめ脈がない

孫ひとり就職をして予算浮く

中国のことに詳しくなる八百屋

顔色を読んでゆつくり手を上げる

ためらわず大きい方を取った悔い

吹田市 穴吹 尚士

これまでに呑んだ酒代足してみる

芸のない男だ呑んでばかりいる

席蹴つてにわかになくなる

子育ても介護も済ませ自由人

古稀近く夫婦の味を噛み締める

吹田市 瀬戸 まさよ

きょうだいの死に濃淡のある悔み
遠いなあ弔電にしてごめんなさい
粕汁の粕も蔵元選ぶ通
コーヒー代勿体ないというお酒
記録用家計簿日記ために書く

吹田市 太田 昭

窮屈な田舎の情が重くなり
秒針に先を越させて身を癒す
相槌を打つ人だけを見て喋り
真つ白な障子木洩れ日遊ばせる
甲冑も仮面も外し風邪をひく

吹田市 山本 希久子

譲られた席へどっこいしょと座る
春の陽に母の余命を干している
配られたカードの運にまかせよう
イメージを描けばシャンソンが聞こえる
みかんころころ隙は一瞬骨折す(左手指骨折)

吹田市 大谷 篤子

心地よい台詞が耳に芝居はね
夢に見た友とひよっこり出くわした
雲流れゆっくり解けるわだかまり
生き下手で目減りしてゆく待ち時間
錦へも顔を出したくなる師走

高槻市 江原 秀夫

目ざわりな兆という字が踊ってる
交わすだけの賀状うれしい友がいる
焼酎は芋に限るとゆずらない
ほけ少し浮世の風を受け流す
百八ツそれでは足りぬ除夜の鐘

高槻市 生田 義一

三代で目出度さ祝う初詣で
年毎に手書きの賀状影ひそめ
お目出度い一膳増えた祝い箸
胸痛むビーポーを聞く師走の夜
電話鳴る何年振りか旧友の声

高槻市 乙倉 武史

自衛隊出す説明の舌足らず
百歳へ逆算をして屠蘇を酌む
好奇心 火星儀欲しくなる余生
未熟恥晒し成人式終わる
無洗米研ぐ技知らぬ娘は育つ

高槻市 井上 照子

うますぎる話だもつと考える
うっかりと本音一言みぞ出来る
希望校目指す孫には甘くなり
梅の枝蕾愛らし東風を待つ
方便についた嘘でも胸いたむ

高槻市 傍島 克治

富田林市 藤田 泰子

厳冬の満月もよし屋台酒

小指の偽り知っている薬指

国訛りとれて外出好きとなる

語呂のよい切符に人気の過疎の駅

騒がずに見過してやる子の過失

豊中市 江見 見清

わくわくとさせる幕間の音合わせ

亡き母に上座を空けてお正月

紙バッグいつか使うと溜めている

主婦心くすぐる赤いセールの字

手際よく黒白の幕たたまれる

豊中市 安藤 寿美子

居心地の悪さ貴女に救われる

酒好きとバレてるらしいプレゼント

初恋は学徒出陣で消えた

何忘れたかそれが分らない朝

死屍累々ニワトリ小屋の地獄絵図

豊中市 岸田 知香子

週間分献立あれこれカート引く

傘寿でもピリオド打てぬ貧乏性

父母は亡し故里もなし実家なし

一年分歩き溜めた初詣で

正月を楽しむ寝溜めの小商い

欲しいのは私を叱ってくれる人

フォアグラもキャビアも食べてみたけれど

牛丼が食べられなくても困らない

一本杉目指し生涯登り坂

せっかちな花だちらは白い梅

富田林市 大橋 鐘造

甘言で腹の底まで覗かれる

過疎になり山紫水明蘇る

着飾って賞味期限を引き伸ばす

花道を渡らぬままに黄昏れる

止り木で明日のパワーを貰ってくる

富田林市 中井 アキ

庭すみれ一輪春を先駆ける

別居した妻が奇麗になつてゆく

生き様を見せて私の決算書

平行のまま黄昏れる破裂音

吹っ切つてわたしが鳥になる一瞬

富田林市 片岡 智恵子

生きている証 失敗くり返す

逃げる人追うひと街は酸欠に

カーナビに説得されて引き返す

孤独感 慰めもらう鈴を買う

打つ人も打たれた人もこころ持つ

富田林市 中崎深雪

二〇〇四年軍事国家の一步なり

春ですよ元氣を出せと梅便り

障害の娘と作る雛の寿司

スマップに歌声合わせハイになる

自然体と決めたはずだが白髪染め

寝屋川市 江口 度

一寸ずつ変わると誰も気付かない

赤ボストなくなるだろウ民営化

背を見せた金は追わないことにする

信号も休みが欲しいお正月

花の名を思い出してるアイウエオ

寝屋川市 坂上高栄

錯覚と思えば視野も広くなる

盲導犬信頼通う此の絆

消臭剤私の匂い消えそうな

豊かさに溺れしきたり消えてゆく

茶の間から世界が見えるニューメディア

寝屋川市 籠島恵子

自分さがし水脈さがしてみよう

母が逝くあの世が少し近くなる

白線を引くとだあれもいなくなる

人嫌いの夫の息を持ち歩く

今日の調子ドレミドレミを繰返す

羽曳野市 酒井一壺

母さんのタクトに乗らぬドラ息子

なんとなく降りたくなつて降りた駅

腕前があがり仲間から外される

仲間にも心許せぬ人が居る

不況にもベット病院繁昌す

羽曳野市 徳山みつこ

列島へ赤信号をとます猿

正月を消すスーパードコンビニも

夫への言葉もあるく研いでいる

暖冬にフライングした初桜

大家族ふと思わせるシクラメン

羽曳野市 三好専平

多次元の宇宙に住んでただ独り

うしろにもお面をつけているわたし

口開けた患者に歯医者ジョーク言い

耳だけの知つてることがたんとあり

知らないと言えぬ勇氣を腹に据え

羽曳野市 吉川寿美

そして春 妻の帽子がとびたがる

ワアッハッハたまには心空っぽに

バツ一ですと勲章のように言う

ど忘れの抽出しばかり増えてゆく

まだ回るコマを見捨てるリストラよ

羽曳野市 安芸田 泰子

東大阪市 安永 春

歳だからと自分で自分を甘やかす
春の冷えだんまり続く二人きり
本心がなかなか見えて来ぬ無口
老妻がふと口ずさむ恋のうた
亡夫とは来世約束しないまま

東大阪市 笠井 欣子

水のようにさらさらならぬ我が心
三猿を捨てて世間を見直そう
歩かねば鎮座している万歩計
宝くじ当り心配一ツ増え
喜びも愚痴も入ったごみ袋

東大阪市 谷口 義

あの姉が一人はいれば派手になる
おもしろい遺言状を書いている
旅先の吹雪も思い出のひとつ
贅沢は言わぬ都会の雪だるま
神様にやさしくして頼んどく

東大阪市 中岡 妙

申年に猿の似顔絵溢れ出す
ポチ袋詰めてやれやれお正月
風邪引いた人をサーズのように避け
人様に見せる笑顔も持っている
昨日会い今日は無常の友の影

七福神 紅一点が音頭とり
地唄舞すずめ百まで背をのばし
食べ力出して風邪引き追いかえす
外食も粗食を選び自己管理
新居には液晶テレビ買うつもり

東大阪市 指宿 千枝子

シンボルの国旗平和な風を待つ
日の丸をワッペンにして派遣隊
時を越え日の丸離れしてる今
下鴨の焚火は温し初詣で
人の流れ追えば場外馬券売り

枚方市 寺川 弘一

戸は手で開けることを子供に教えよう
オンリーワン目指す希望の若い夢
初恋も最後の恋も妻である
息継ぎを入れて下さい火の接吻
下戸に生まれた遺伝子を恨みます

枚方市 二宮 山久

面接へ背筋のばして六十歳(昨年未面接受けうかる)
再職の疲れをいやす露天風呂
手弁当片手に再職ああ楽しい
新年を息子夫婦と祝う膳
還暦へ第二の人生胸を張り

枚方市 安達忠央

白髪の幕引き前の枯れた恋

てつちりの旨い老舗も幕を閉じ

こつそりと白旗用意自衛隊

噂では東京にテロ花の頃

むしろ旗こわがっている消費税

枚方市 海老池 洋

振り向けば過去残月になっている

お袋も小さくおなり古連木

走り疲れた木馬を癒す丸い月

袋小路ここで拾ったいいヒント

死ぬという祭りが僕にまだ残る

藤井寺市 太田 扶美代

中風のまじない今年は大真面目

新しい私になって退院日

プレゼントに凝ってるクリスマス以後

信号で夫婦は傘を持ち替える

何もかも打明けてから自己嫌悪

藤井寺市 中島 志洋

自分では果せぬ夢を子に託し

白酒で和気藹々の嫁姑

上には上自慢したのが恥ずかしい

明日からの禁酒を誓う二日酔い

手応えは割れんばかりの大拍手

藤井寺市 高田 美代子

飾りつ気なくても光る十五歳

アカペラで歌うマイペースのリズム

春嵐内部告発にも触れる

香水の似合う女であった頃

絡まれて絡んで罪な花見酒

藤井寺市 楠 昭子

好きだった先生も来るクラス会

頼りない明日に期待ばかりする

合格をするまで神は頼られる

祝い酒それから中毒になった

ごちゃまぜの大阪にいて目立たない

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

小綺麗に暮して恋が遠ざかる

似たひとに会ったと電話かけてみる

やさしさは八方美人だった彼

カルメンは褪せても薔薇は赤である

忍び逢い尽したりない事ばかり

松原市 小池 しげお

神の声聞きたく窓を開けておく

昼に飲むくすりはどうしても余り

相続の本三冊も持っている

三回に二回は目薬をこぼし

べつばらもばんばんでしたパンシロン

松原市 國 見 蘭 香

天と地の神に詣でて年明ける
木枯らしがさらつていった宝くじ
保険証よごさぬままで更新期
ああしんど言うてる方の口達者
舌はよく回るが話まとまらぬ

箕面市 出 口 セツ子

幸福がオセロゲームのように変わる
生きている証続いている波乱
生き方は変えれぬ人を信じてる
優しい子居るから明日へ頑張れる
雨に色つけければ紫色の今日

箕面市 岩 津 ようじ

笑わずに漫才見てる評論家
いうならば地球のヤクザ超大国
嫌な奴ブツシュ フセイン キムジョンイル
ちよつとしたオシヤレ ピアスの迷子札
据膳を食えばよかった夢の中

八尾市 宮 崎 シマ子

好きなものいろいろ作り誕生日
抱き合せて喜ぶ倉から出たお雛
山の湯で俗世に戻る花遍路
水軍の長は漁師の好々爺
連れ舞の楽しい人生ありがとう

八尾市 神 原 まさと

暇人も何故かそわそわ年の暮れ
元日の眠りを覚ます消防車
お雑煮を祝う体重気にしない
校長を脅してゆすりする教諭
命までかけてメールで夢を追ひ

八尾市 高 杉 千 歩

持ち歌を一つふやして春になる
辻褄が合わなくてすむ老人会
賞味期限信じないから生きられる
コンビニを素通り二合の米をとぐ
御主人とおんなじように犬も老け

八尾市 生 嶋 ますみ

そば食べてなんと一年早いこと
曾祖母に何時のまにやらなっている
なんでもないプライドだけど捨てられぬ
満ち足りて唸りも吠えもしない犬
カトレヤとお喋りすこし癒される

八尾市 井 尻 民

真っ白にしてひらめきをたぐりよせ
気ぜわしく動く歩道を走り抜け
白梅に想いをよせる春障子
束の間の恋は素敵なまま胸に
繚乱の中で無口になる私

八尾市 吉村 一風

嘘ひとつまだ悔やんでる昼の月
聞き役のコーヒー冷えて腕を組み
金婚へもう手がとどく指を折り
野望なんかいつの間にやら消えている
よく笑う嫁と妻居て酒うまし

八尾市 山本 宏至

待合所時計の針が進まない
イエス様とご縁ないけどクリスマス
誰も皆そう言ってると妻が言う
忠告に心がゆれてなお迷う
吉野家へ話のたねに食べに行く

八尾市 内海 幸生

気に食わぬ顔も頑固も僕のもの
三猿を守れぬ小さな正義感
恩人の肩の下がり气に懸かる
肝腎なシャッターチャンスに電池ざれ
足踏みをして紅富士を待つカメラ

八尾市 長谷川 春蘭

生々流転花は無言のまま褪せる
激しさと哀しさ織って薪能
薄氷踏んでしまったハイヒール
うっかりと素顔を見せたバラのとげ
花は可憐に影を求めて愛を求めて

大阪府 米澤 俣子

時折のときめき脳を活性化
夫婦にもことは控えるタイミンケ
再会の余情を胸に持ち帰る
騒がしい人ではんとは淋しがり
流れ星何かつぶやきつつ消えた

大阪府 初山 隆盛

書初めにでかい抱負の字が躍る
若水を汲んで初釜立てる幸
デジカメで撮る命の絵共白髪
大阪のおばちゃんはいやぐ野天風呂
初恋の人バツ一と風に聞く

大阪府 澤田 和重

うまいから酒は良薬だと思ふ
雨女やつぱり雨を連れてくる
あこがれた人がお墓の中にいる
ホテルから土地の名物食べにゆく
無器用で自分飾らぬ人が好き

大阪府 野田 栄呼

落ちつかず急ぎ出て行く諭吉さん
夫逝きその大きさを気付く老い
正月も待つてくれない冥土の灯
正装に手首の輪ゴムふと気付き
人間の都合で神も超多忙

神戸市 山口 光久

川西市 米原 雪子

待合室同じ病に励まされ
甘くみた糖尿病が牙を剥く
診断書頑固な父を黙らせる
診断書僕より妻がショック受け
夫婦独楽まだまだ忘は狂わない

神戸市 木村 貴代子

内からの声に素直に生きてゆく
忙しくて優しい心置き忘れ
反抗も無視よりはまし子の瞳
渡れない橋に祈りをささげおり
季の花を供え仏に明日を問う

芦屋市 黒田 能子

ゴミの日のひとりの小さいポリ袋
手提げ袋一番底にあったカギ
助手席はしゃべって食べて寝てばかり
楽しんだ旅の疲れは心地よい
幕上がるまで何回も咳ばらい

川西市 西内 朋月

春の陽を背に浴び爪を切っている
髭を剃る鏡の中の古稀の皺
コンビニが増えてる町に住んでいる
引出しにもう着てもらえない和服
一円が貯まって邪魔な消費税

暖冬の油断を笑う冬將軍
熱爛と湯豆腐描き地酒買う
年頭に向き合う日記一頁
お受験に燃えてるママを児は嫌い
飛行機雲紺碧の空切って行く

三田市 久保田 千代

合わす手に母は母なる願い込め
三が日私の音符はねている
初詣でみんなめでたい顔になり
私にも隠し事あり二つ三つ
パソコンへ負けず嫌いの手を染める

尼崎市 長浜 美籠

再会の積もる話へ雪こんこ
おびんずるさんに耳打だけしとく
枰酒に思わず吐いている本音
峠一つ越え冬瓜の舌ざわり
胸の内探り合ってるモンブラン

尼崎市 内田 美也子

ひたすらに生きて悔いなく明けた年
冴えわたる冬の銀河や震災忌
死の淵を覗いた友に励まされ
リハビリに燃えた日を記すカレンダー
切り札を出しそびれては回り道

尼崎市 山田 耕治

蛇口から湯がでる朝を感謝する

教え子に裸にされるケアハウス

イブの夜はさらに俗なることばかり

スポンジで水吸うごとく愚痴を聞く

この世とは思えぬほどの月を浴び

尼崎市 田 辺 鹿太

納豆のような粘りで生きてきた

ひとりっ子らしいおっとりした嫁だ

老化した脳を耕す本を選ぶ

決着がつくまで僕は傍観者

子が嫁ぎ止ったままの置時計

尼崎市 軸 丸 勝 巳

大阪は虎年でした羊さん

干支飾りまた会おうねと箱に入れ

十六年私の昭和遠くなる

年賀状活字はなにも喋らない

駅伝のドラマに二日テレビ漬け

尼崎市 春 城 武庫坊

ゴミ袋に去年の僕を詰めて出す

大晦日に八坂清水遠い過去

曾孫膝に新春の盃受け至福

トイレにもカレンダー吊り心満つ

土の道下駄で歩くと足生きる

尼崎市 春 城 年 代

人知れず指先運動しています

新参者の小犬が遠慮なく吠える

思い出の傷と出くわす古机

約束はしたが果せぬまま老いる

鮎ひとつ貰ったご縁連れになる

伊丹市 山 崎 君 子

石焼き芋おせちにあきた人を呼ぶ

初釜を終えてキラリと光る指

娘の温みひとりじめする山の宿

枕許聖書一冊娘の寝顔

陸自派遣 夢に出てくる征った人

西宮市 門 谷 たず子

残照にひとりの背なをあたためる

いつまでの暮しか風呂の湯を落す

前向いて歩けば会える小さい幸

堺筋歩けば活力湧いてくる

一人しか居ぬ部屋に鳴る鳩時計

西宮市 緒 方 美津子

楽天家いつも胃薬もっている

定年でかくれ家のごと図書館へ

エルメスのバッグに鮎玉入っている

死ぬことなんぞ考えぬ蟹かじる

辻褄を合わせる幹事の小銭入れ

西宮市 坪井孝一

奈良市 天正千梢

握手してさすがライバル冷たい手
運勢を印刷された籤を買う

神妙に祝詞に列ぶ金額順

酒飲むとみんな出世のひとばかり

二次会によくも揃った不平組

西宮市 西口 いわゑ

星月夜 一入しみる寒の風

悪友は痛いところにも触れてくる

すこしならいけますなどと大ジョッキ

手の内のカードに運をにぎられる

戦争の音がきこえて落ちつかぬ

西宮市 秋元 てる

傘寿なおバズルにうつつ抜かす幸

曾孫に不思議がられて一人住む

飛石に老いの歩幅を覚られる

餌台を上手に作り満ち足りる

ばさばさと切られる庭木首竦め

姫路市 古川 奮 水

雪国の旅情を醸すワンカップ

旅の湯に機嫌よくして二泊する

長電話ときどき愚痴が混ざりだす

四コマのマンガぐざりと刺しくくる

なまはげに追われ泣きだす餓鬼大将

競争はげしすぎ友情芽生えない

贅沢すぎて精神の迷子たち

他言せぬポストに安心して入れる

誰だって裏に不安を持っている

和歌山市 宮本 三喜夫

趣味の絵を出品すると夢えがく

委員さん都合悪いと辞任する

脱税も連鎖反応しています

医学界不正事故あり困ります

鳥取市 富山 檳榔樹

老いの道蟹の横這い惑わない

朗らかな女と飲む酒味が乗る

窓ガラス磨けば明日の夢が舞う

初春は夢を力に老いを描く

鳥取市 山宮 愛恵

普段着のお正月言うこともなし

梅さくら咲いてくぎりの衣脱ぐ

ひとり旅気ままに降りていた無人

鳥取市 山本 益子

グツグツと時に怒りも煮込む鍋

親離れ出来ぬ倅に嫁が来ぬ

人間はトラブル巷泳いでる

現代子親思いなど薄れ行く
言い過ぎた言葉は酒のせいにする

鳥取市 福田登美

魅せられて花屋の前を去り難し

病む夫の心を覗き春を待つ

回診が凍った心やわらげる

いたわりを受けても翔べぬ冬の蝶

鳥取市 中村金祥

非行から覚めて一枚大人びる

火星から水の便りを待っている

春一番仕事始めに吹いてくる

さあ春だニユー虎ファンの夢を乗せ

鳥取市 美田旋風

年寄りは年輪生かす知恵がある

休まない上司へ部下はくたびれる

悪い癖返事をすぐにしてしまう

隠し事できぬ友へは喋れない

鳥取市 前田一枝

借金を頼みに来たとも知らぬ顔

落ちつかぬ男にくさりつけている

この葉一つ位は効くだろう

やさきもちも上手に焼けば味が良い

倉吉市 山中康子

松葉蟹はどう姿態披露する

わざとらしくない装い心得る

牝猿がお気に召さぬかそっぽ向く

利かん坊別の私に抗議する

倉吉市 森川あらた

上ばかりみていて殻を捨てきれず

携帯がなくても痛み感じない

携帯のメール緊張感がない

夢を持つ人は背筋が伸びている

米子市 門脇晶子

説明書読み直してゐる処方箋

応接間読まない本の展示室

試験前こっそり漫画読んでいる

抜群の運動力で人湧かす

米子市 中井ゆき

思いきり派手に仏壇お正月

一点をみつめ牛歩になるくらし

顔色を読んでばかりで迷路ゆく

子によんだ童話自分のために読む

米子市 白根ふみ

初日の出何時もの松を間違えぬ

マンションの正月なまけ者にする

日本海冬の怒濤が大股で

ぶかぶかと柚子に溺れているひと夜

鳥取県 乾喜与志

シベリアの死を免れて今日の幸

もう白寿まだ若いのか老いたのか

デイサービスで手を握らせる痛いほど

腰古りて苦屋にこもりだす白寿

鳥取県 前坂 なお美

縁あつて京都の方とお親戚
嫁になどやりたくないとおねてゐる
娘よを歌つて泣いて飲んでゐる
披露宴の祝辞短い方がいい

鳥取県 鳥羽 直市

上向いて歩こう空は澄んでゐる
沈むならふたり元氣なこのままで
愛称が米のうま味を売つてゐる
顔でない広いこころの人が好き

鳥取県 鳥羽 玲子

座り方変えてしんみり話聞く
夜叉の面いつも被つてゐるひとり
消しゴムで消したい脳にある記憶
無欲の手大きい幸を掴めそう

鳥取県 山本 正光

はればれと眺めて暮らす伯耆富士
大山の四季素晴らしい里に住む
さぞ耐えて苦勞したろう崖の松
いい便りだった手紙にあたま下げ

鳥取県 平井 栄翁

初雪を握つて投げる青い空
生きる物朝の明かりで動きだす
極楽へ行くトンネルを妻と掘る
鍋の輪で笑つて食べる雪の夜

鳥取県 佐伯 やえ

屋根の雪とけてドレミを唄い出す
おくれてついた賀状に和むことがある
一宿一飯の恩義かネコが出ていかぬ
大好きだったトチ餅ですよ仏さま

鳥取県 吉田 孔美子

ワイシャツを刻んだだけの乱だった
侵略者 体毛残す愛しさよ
世界から仰がれシャイに照れる月
一息にいけと仰しやる姿焼

鳥取県 近藤 春恵

新年だ神風世界中に吹け
新年はみんな優しい顔でゐる
新婚の孫へ早くと期待する
三猿になったらボケてしまひそう

鳥取県 林 露杖

雪の無い正月しばし日向ぼこ
さて米寿なにも変わったことがない
左義長の焰も小さく人静か
フセインは出たぞ出て来いビンラディン

鳥取県 深田 俱久

メモ取つて聞く青春のメッセージ
御自慢のリングこの頃嵌めてない
膨らんだ財布レシート回数券
自信など無いがネクタイ凜と締め

松江市 佐野木 みえ

娘への便千両一枝入れておく
風水にこり部屋の中模様がえ
百合の花いっぱい活けて鬱の日を
さよならも出逢いも春の定めかも

松江市 津川 紫晃

迎春に夢書き添えて腕を組む
一年のドラマ息づく日記帳
数の子の歯ざわりが好き冬が好き
それぞれのドラマを抱いて眠る窓

松江市 小川 注湖

高見盛 癖も人気の土俵上
新築の横文字名札金彫りだ
一本の電話で晴れた胸の雨
残酷に戦時終ったきのこ雲

松江市 安食 友子

どたばたが汗まみれして笑わせる
出陣の如きエプロン見てくれだ
修身を知らない親と子の無様
余命まだ魚と菜っ葉食べてます

出雲市 岡 あきら

元旦の通りひっそり国旗出版
元旦や郵便受の初仕事
達筆のさてどなたでしょうか賀状
春の陽に恥じないように吐く息吹

出雲市 板垣 夢酔

瘦せていてお金持ちとはつゆ知らず
夫婦とも頑固で離婚せぬきずな
おかしいかならば笑えの設計図
青葉燃え小鳥や人を誘う花

出雲市 久谷 まこと

里の味忘れていない祭り笛
味噌汁に今日の幸せほのほのと
初夢も呆けているのかかすんでる
やりくりで息付くひまの無い暮らし

出雲市 伊藤 玲子

松過ぎて乾く間もなし黒い服
火傷でもせねばピリリとしない脳
屋根の雪解けだし春の音になる
思い出が枯れないように水をやる

島根県 森 茂美

試歩の足ゆっくり運ぶ長廊下
千人針ふと思ひ出す開戦日
大宇宙 国境はない人が往く
初空へもつと祈ろう世の平和

島根県 持田 多輝子

行革は永田町からしてほしい
大学院出たが不況の岐路に立つ
脳細胞輪切りにされてSOS
野次馬が遠巻きでみる内輪もめ

岡山市 井上 柳五郎

わが家にてひ孫の声も久し振り
曾孫抱くおばの笑顔初カメラ
痛風に悪いと知りつビール飲む
キュッキュツとハルピンの雪思い出に

岡山市 国米 きくゑ

年新たな病院の空深呼吸
初出勤ネクタイ締めた孫キラリ
遊び好きの風船今日も帰らない
本年も達者で回れ夫婦独楽

岡山市 大石 あすなろ

花束を貰い子離れ親離れ
積んで来た苦勞が丸い人にする
脳みそのスペアが欲しい物忘れ
肩車この子に賭ける夢いくつ

広島市 森田 文

除夜の鐘撞き終え年始メール打つ
サッカー狂死闘へ挑む隣の子
ふるさとへの便りは何時も喋りすぎ
ハーモニカの自信一度も聴いてない

東かがわ市 清川 玲子

新米が見直されてる不作年
石一つ蹴って腹立ちしずつめる
三が日過ぎるとどん恋しゆなる
タイガースの話題もちきりクラス会

東かがわ市 池内 かおり

つつこみとほけで楽しい晩ごはん
明日の糧湯どうふゆらり酒とろり
おでんコトコト帰り待ってる辛子味噌
明日から禁煙なんて耳に胼胝

東かがわ市 原 賢

肩車父の知らない道が見え
高くない鼻で人間らしく生き
生きざまを変えたくなつて旅に出る
騙されてあげる綺麗な薔薇だから

東かがわ市 伊勢 八重子

なつかしい声を背で聞く里がえり
猿真似はまかせて私年女
指笛がとっても上手好きな人
おみくじの好い所だけでもらつとき

松山市 高橋 宏臣

アングルを変えていい夢ばかり追う
ひと押しのチャンス wait っている過信
正装をすると尻尾が邪魔になる
高笑いして本心をさらけ出し

松山市 宮尾 みのり

囚われた錯覚に似て夜行バス
失速の個所もあるけどマイペース
錯覚のままあなたと赤い糸
ひばりもチエミも昔の彼も向う岸

高知市 北川竹萌

晩酌は嗜むものと決めました
早く寝て早く起床も身にあわせ
思い変え雲の流れも面白い
嗜みに変えてほんとの酒の味

高知市 赤川菊野

初日の出夢が広がるパスポート
ほのぼのと亡夫と酌み交う夢の中
淋しいが冬の夜長が大好きで
生きるとは何度越えるか水たまり

高知県 小澤幸泉

共白髪約束だったはずなのに
よく生きているぞと息子はめてやり
思惑を秘めた工事が動き出す
ひとまわり違う夫婦で仲が良い

熊本県 高野宵草

やれやれのお正月から着ぶくれる
初詣で神様お先に酔いました
ほどほどに当たってほしい宝くじ
人類の淘汰か憎み合う兵器

弘前市 須郷井蛙

叱るにも方言にある温か味
親と子の会話がはずむ竹とんぼ
傷跡の同士が話す温泉の宿
里帰り金魚に元気かけてやる

弘前市 相馬銀波

卒論の前には欲しい内定書
残り香を探しながらの形見分け
雲行きを確かめながら磨ぐ五感
度忘れに自問自答の茶を啜る

青森県 小寺花峯

梅咲いて池の氷は解けている
ぐずぐずを妻に言えない均等法
茶柱が立ってシナリオ書き直す
赤信号素直に僕は立ち止まる

静岡市 安本晃授

春風を心の壁にたたみ込む
友情の温さ掌の石捨てさせる
血の濃さの過保護に揺れる少女の瞳
先生の蹟く駅の裏通り

滋賀県 中宗明

古希来てもせっかちな癖居座った
難題に出くわし妻に下駄預け
老練な医者に預けるわが命
じれったい悶える気持伝わらぬ

大阪市 杉澤汀

枯れ木かとみえた男の大勝負
居眠りも耳はしっかり立っている
堀炬燵 顔色さぐる足の先
寒うても咲かねばならん寒桜

大阪市 清水 絹子

大阪市 中田 あい子

平等院改めて見るお賽銭

通せんぼした子も古稀にこんにちは

墓参りすめば湯の町四姉妹

金婚や今に手を焼くおさな妻

大阪市 渡部 さと美

新年のあいさつくれた孫三歳

抜きん出たものがないから続けられ

たいくつをさせぬ車窓の冬の雲

年輪へますます光るお方だな

大阪市 町田 達子

三が日おだやかなりやお正月

公園で凧上げの子等風を待つ

初詣り小吉のみくじに励まされ

お餅に飽いてたこ焼きがよく売れる

大阪市 小泉 ひさ乃

新年へプラス思考に切り替える

トンネルを抜け新年の青い天

帳尻が合わないままで年を越す

待つ事に慣れて軽んじられている

大阪市 安達 はじめ

好きだとは言えず机を拭いてあげ

梅一輪咲いて病床温まる

隠し事まだまだであると妻の顔

冬山の良さを語ってまだ老いず

平和な世 汚職誘拐子をあやめ

とび上がる尾が輝いたイルカショー

初日の出堤の下で待つ八十路

正業につくよりバイト好く青年

大阪市 鶴田 遠野

年賀状戻り消息まで途絶え

眠気待つ本とビールの午前二時

悲しい酒初めて飲んだ父の通夜

出張に絞り出しているロスタイム

大阪市 川原 章久

自転車や車で通う平野の湯

跳び箱をいくつ飛んだか八十路坂

おいでやすと言わぬ病院自動ドア

寒いのにギャルがヘソ出す足も出す

大阪市 中澤 伽羅

浮かれない気を引きしめてロスタイム

お世辞にもすぐに乗ります浮かれます

へそくりを探したらしい跡がある

私ならテレビ無くても平気です

大阪市 榎本 舞夢

大空を恋するように凧は舞う

孫の名が増えて嬉しい祝箸

差し上げる人も無いのに買ったチョコ

幾人の孫を祝うか初節句

大阪市 松 尾 柳 右 子

冬空の満月を追うスニーカー

寒さくら梅もちらほら戎さん

ふる里の匂い一杯帰省客

志望校決まりバイトに精を出し

大阪市 津 守 柳 伸

万札の釣りは存じぬ戎さん

顔見世でうっとり師走締めくくる

重複のお通夜見下ろす寒気団

除夜の鐘すんなり響く旅ごころ

大阪市 寺 井 東 雲

操縦桿何か忘れた気持する

ボケが抜け人間固くなりました

ボケて来た誰に相談したものか

親が子に覚えるために早よ譲る

大阪市 奥 村 五 月

苦勞するひとはあの世に福が待つ

古希すぎて軍手下タビ捨てきれず

忙しい母もくつろぐ仕舞い風呂

往復のキップあるなら地獄でも

大阪市 大 川 桃 花

あれあれと脳順調に老いて来た

一人旅 朝昼晩と子に電話

蟬殻の形にドレス脱いである

切った枝バキバキと食む清掃車

大阪市 岩 崎 公 誠

へそくりを区分所有の老いふたり

嘘ばかり重ねた夜に乾く喉

完熟の老々介護会話なく

ヤミ金は新手編み出し地に潜る

大阪市 伊 藤 武

煩惱を一つ増やして除夜の鐘

年の暮れベンチで遊ぶ老い一人

さばり氣と葛藤している透析日

久し振りを声をかけたが名前出ず

池田市 栗 田 久 子

移り氣な相手にかけておく呪文

やっかみが過ぎて近くへさえ寄れぬ

沈丁花の風に近づく春を知る

茶をそっと沈黙つづく仲直り

池田市 岡 本 吉 太 郎

一直線ばかり歩いて困ってる

フセインさんドラム缶よりの顔哀れなり

病床より見ゆ五月山晴れわたる

欲深く八十路が来ても株をやる

和泉市 西 岡 洛 醉

懸命に生きた七十路恋しがり

耳朶のピアスの穴も老けて来た

神詣でたと願った孫の指

回転の鈍さを攻める老いの脳

岸和田市 原 苑子

母ちゃんにまかせてあると呑気です
掛け声をかけて私を弾ませる
歯切れよい言葉たくみにあやつられ
わらべ唄楽しんでるのは爺と婆

岸和田市 亀井 皎月

登山道お助け水で潤され
逝く時の写真毎年撮る御仁
もの言えば怒鳴る男で疲れます
爪を噛む癖の指先痛いたし

堺市 矢倉 五月

だったネと恋も過去形少し老い
病み上りですのと猪口を受け流す
子に芝居した日もあった夫婦坂
妻よりも土産の地酒まだかいな

堺市 齋藤 さくら

リハビリの父にエールの杖となり
こんなにも口は元氣と父笑い
肝臓も泣いているのよ二日酔い
ジャンボくじ一万円で祝杯す

堺市 源田 八千代

吉事増え物入りばかり去年今年
新年を祝う二世帯恙無し
賽銭日和ほくほくのえべっさん
新年を寿ぐ詩吟 富土づくし

吹田市 早川 棲世

硝煙は消えない勝った国はない
(イラクもアフガンも)
わが若き日を癒した詩いま難解
弥次喜多で来た弥次喜多で行こう妻
まだ新米ですと老人会へ入る

吹田市 野下之男

黒幕になってこの世が面白い
パソコンが許してくれぬ楽隠居
これだけは皆仲が良い万国旗
妻不在みゆきの歌とごろ寝です

吹田市 岩屋 美明

土砂降りもグリコは走る戎橋
大峰へ男のロマン滾らせる
熱燗ヘズンドコ節が出る羅漢
気の長い男の喋る河内弁

大東市 児玉 蛙

煙草酒 医師は飲み過ぎ言うけれど
さり気なく医師は痩せよと薬くれ
約束を忘れ二股せめられる
喪服脱ぎもう泣くまいと紅をひく

大東市 南原 正和

火達磨になって燃えてる日記帳
美の極み求めシャッターチャンス待つ
消えた火を蓮如の里でまた燃やす
年一度会っても無理と言えるひと

高槻市 西谷 治三郎

母ちゃんの丸い背中に手を合わす

携帯を持たせて主人を放し飼ひ

ツケの利く店で飲んでた頃が華

老いてなお生きる欲あり神詣で

高槻市 左右田 泰雄

耳よりな話になるとしゃしゃり出る

あいまいな態度が人を傷つける

枯すすき冬日を浴びて揺れもせず

氷点下 蛇口のつらら拗ねている

豊中市 樫谷 郁子

幸せを積んだ笹舟舵いらぬ

過去未来誇張もなく自分史に

自分史に命の糧を書きとめる

自己主張しない可愛い影法師

豊中市 山門 タミ

三番叟踊るお猿も旅役者

猿真似が十八番の課長さん

三猿は三日坊主のお正月

猿の眼とガッちゃんしたらこつちゃ負け

豊中市 水野 黒兎

感嘆符 終章のためとつておく

里の駅すすきの中に母がいる

街の中迷子になったのは心

手づくりの初めは砂場泥団子

寝屋川市 森 茜

初日の出心のひだにまで届く

頼られて出かけた方が頼りない

踏まれそうに木の葉一枚降ってくる

てんこ盛り勿体なくも箸を置く

寝屋川市 平松 かすみ

予備知識あつて胃カメラ上手なり

レントゲン私の人生物語

モニターを横目でみてる内視鏡

持ち越した検査結果へ姉妹

寝屋川市 富山 ルイ子

真っ先に家求めたい当り籤

家族からはじき出されている不安

私でも役に立つことあるのです

つぎつぎと鬼籍に友が逝く辛さ

寝屋川市 堀江 光子

約束にないが一本提げてゆく

歳月やわが家の犬も代替り

以心伝心 犬も私を好きらしい

懐かしむとは一抹の切なさか

寝屋川市 高田 博泉

不器用な男が描くデカイ夢

結審は忘れた頃に下される

イラクから報いをもろて来ぬように

ひとときを孫と暮らして生き返る

寝屋川市 太田とし子

三が日過ぎたおせちに覇気がない
猿知恵で外交官はつとまらぬ
ほどほどの意見も浸みた屠蘇祝う
整理整頓どこへしもたか解らない

東大阪市 北村賢子

生存を確認し合っている年賀
身の丈の晴着はさらの割烹着
寒いねと交わす言葉があたたかい
下戸ですと言った女が泣き上戸

枚方市 宮川珠笑

手の遅いレジに並んだふしあわせ
不要品実家にあずけ核家族
野良の子を宿し幸せそうな三毛
通じないジョーク変わった人にされ

枚方市 鈴木政子

米高騰より備蓄費が高つくき
三人息子オレ オレとは言いません
高齢者甘えず家事をこなそうよ
アレルギー症好物ばかり禁止され

枚方市 森本節子

思い出のぐるりの丘は様変わり
初詣で戴くお神酒はまったりと
よく笑った日の夜何故かよく眠れる
安らぎをくれるタマちゃんハルウララ

守口市 井上桂作

幸いは誰にも遠慮ない暮らし
年輪を重ねてふえる顔のしわ
民営化無駄な道路を諦めず
予算案改革理念どこへやら

八尾市 村上ミツ子

八時間やつと眠れたお正月
初日の出まだゆめのなか夢の中
天気より景氣予報が気にかかる
わたくしのからだに鬱が居候

八尾市 宮西弥生

聞き流す耳を上手に使い分け
けつまずくたびに重味のあるいのち
まだ欲に走り信号無視をする
すこしずつ肩の荷おろす新春の酒

大阪府 桑田ゆきの

あした逢う人と夢路で喋ってた
BSE地球の裏から湧く恐怖
さりげない言葉の底に刺があり
鍵掛けて居留守決め込ましたたかさ

神戸市 池田善守

三が日昔のメニューで祝う膳
去る人もくる人もあり年賀状
孫かえりパントマイムの老夫婦
これが字かピカソもびっくり書道展

神戸市 山口 美穂

早寝早起去年と変わらない課題

震災の痛みは九年たったとて

花を飾って自分を祝う誕生日

パソコンに小馬鹿にされているようで

神戸市 伊勢田 毅

修整をしつつ夫婦が四十年

寒肥えをしつかりやって春を待つ

改革のラッパがいつか棚の上

赤ちゃん語理解した頃孫帰る

相生市 中塚 礎石

軸足を替えれば愛が近くなる

アルバムを剥がした跡は尋ねない

一行の余白残して明日へ生き

駅名は時代の波をくぐり抜け

尼崎市 林 昭三

通勤の背筋が伸びぬ不況風

引返す勇氣登山家教えてる

大吉を結んで拝む春の枝

発端はまたあの人の横車

西宮市 牧 渕 富喜子

手短なケンカ重ねている師走

さり気なくひとまだぎしてお正月

少しだけ透明になるお正月

同じもの作っても嫁はシャレている

西宮市 亀岡 哲子

凶が出て一度おふだお養錢

親切にされて年寄りらしくなり

核心には触れぬ街角平和論

御近所も我が家の花を待っている

西宮市 菊池 トミエ

靴音にリズムがついた嬉しい日

備前焼触れる火襦あかね色

歳月は人を待たずに除夜の鐘

御馳走を横目にちよろりダイエツト

西宮市 刈田 泰司

雲つかむ夢見てる亡父の歳を越え

雲竜になり不知火になる雲の峰

離職した友を氣遣う十二月

十二月八日は苦い酒である

西宮市 長谷川 淳

顧みれば皆んなに詫びることばかり

日の出より夕陽を拝み有難う

初詣で事故車にお札貼ってある

日向ぼこ戦禍の人に相済まぬ

西宮市 井上 松煙

柿熟れて鳥と仲よく分かち合い

初仕事先ず盆栽に水をやり

極楽に苦勞ないなら寂しかる

日陰でも草芽に生きる力満ち

兵庫県 大谷 幸次郎

雪の日に春時く種を買ってくる
やがて来る春に大きな帆を上げる
恍惚の母百歳の春祝う
熱鬧が好きだと蟹のボスが言う

別会

3月31日(水) 13時からアウイーナ大阪2F

参与以上の方は出席して下さい

議題

- ①合同句集の件
- ②80周年記念大会・第10回まつりの件
- ③その他

特常任理事

第一回 大野風柳賞作品募集

雑詠

五句(未発表作品)

審査 大野風柳

集句は記名選。五句一組として総合力で賞を決定。

特選3句、秀逸7句、佳作50句。6月27日柳都大会で表彰。

締切り 4月25日

千円(発表誌希望者は五百円加算) 小為替

〒956-8691 新津局私書箱15号 柳都川柳社宛

第81回 大阪川柳の会

日時 4月2日(金) 17時開場

会場 サンケイビル本館3F 3222号室

題と選者 △顔・長島敏子 △だから・住田英

比古 △命・岩佐ダン吉 △サイズ・

磯野いさむ(各題2句)

席題なし 会費千円 18時締切

欠席投句 4月1日締切(会員のみに)



(つづき)

尼崎市 桑原東園

尼崎市 古川正子

三田市 堀正和

三田市 辻開子

兵庫県 黒崎美紗子

青い空亡母と亡姉会話くれ
老い二人それぞれの鉢愛そそぐ
恒例の新年祈願出来た幸
商魂か客を呼んでる福袋
好い年になりそう籤の餅当たる
百円で大きな気分籠の中

自選集

橘 高 薫 風

つぎ琵琶の長明さんと春隣り
除破急も傘寿に近く面白し
仏像も今日の明暗ほしいまま
さくら咲くわたしも孫と花四天
がっかりとするときの僕匂い立ち

西 田 柳宏子

冷えた瞳を見交わす火花散る夫婦
パパとママ和服で他所行きらしい顔
無理だとは知っているだら反抗期
祭りの灯夫婦和服の歩を揃え
日本の無防備テロの目が光り

西 村 早 苗

正月へ義理人情ののし袋
ほどかれて庭木一本空に向く
食う時は食う物がある平和な日
春の空みな倅せになれそう
あの頃と言えばみんなよき時代

お世話さまその一言のタイミング
お世話した甲斐で賀状が二十年
世話のやける娘むこだが同じ干支
お世話など受けずと叫び夢が覚め
世話ずきの世間話が野火となり

野 村 太茂津

寂しさに耐え酷い腰痛堪えている
腰痛を堪え休えて身を試す
腰痛で全て忘れて苛められ
ベッドから炬燵往復這うばかり
生きている資格あるのか顧みる

波多野 五楽庵

寒ざくら嫁にゆかない子が一人
目も耳も閉じてつらの人になる
目貼りして吹雪の音をやり過ぐす
多喜二忌や今日もシベリヤ低気圧
さりながら春が恋しい花粉症

藤 村 女

風の夜は風の話をした母娘
真っ白に干して老母は満ち足りる
苔むした墓石に歴史の由来聞く
同じ趣味困めば平和な顔ばかり
なごやかな日々が流れて老い忘れ

仁 部 四 郎

芳 地 狸 村

申どしを七めぐりして生きている
絵手紙の筆に酔つて年賀状
ワープロの年賀の文字に味がない
琴の音がここに響く初セール(ベルサイドモール 2句)
初売りのヤングにうける福袋

宮 口 笛 生

健康を神に頼んで初詣で
留守番に一升瓶が横にある
安い物無いか売り出し見て回り
電線の下で並木がいじめられ
気の弱い人間となり社寺巡り

森 下 愛 論

嬰鏢と米寿へ歩む春日和
静寂に夜のいのちの星月よ
春陽の限り無き世に老いの活
向かい合う女の影も春らしく
魁の春つんとした影ひとつ

八 木 千 代

生来の持病支えている鎖骨
肝を据えたのか小骨も気にならぬ
知らず知らず情けに傾いた背骨
誠実に母系を継いだ首の骨
渡来人の骨に親近感がある

八十田 洞 庵

それからは苦渋の酒となる別れ
テロの火で地球が軋む音がする
門限が切れる頃から酔いはじめ
春がくるまではいつも生きのびる
ていねいに書いてはいるが果たし状

両 川 洋 々

辞世の句酒か恋の句かにしよう
リハビリと言うおしゃべりがまだ続く
人生に途中下車などあるもんか
七人の敵の一人が癌で逝く
男である事に男が疲れ果て

阿 萬 萬 的

前ばかり見ていて影を見失う
腹さぐり合つて本当の顔がない
一微な主張へ友が減つてゆく
大胆が過ぎて阿呆かとなじられる
雑念もなし元旦の大あくび

石 川 侃 流 洞

気が付けば子が還暦の新暦
冷蔵庫の中も光陰矢の如し
老いるにはまだまだ百へあと十年
付録の人生だつて生きたい薬飲む
喫煙エリア埋められ煙草冬の陣

板尾 岳人

ほどほどの愛を下さる杜若
少しだけ愛に溺れた蝸牛
男坂急に険しくなる早春
ゆらゆらと男が揺れる森伊蔵
母に逢う約束だった無人駅

奥田 みつ子

生きてゆくかなしみ山の音を聞く
あせるなどポツカリ浮かぶ昼の月
ドレミファソ 人はそれぞれ違う音
春風がきつと解決してくれる
キュツキュツと明日へ向かう靴が鳴る

河井 庸佑

慎重に読んだが逆の風に遭う
締切りへ時は刻刻容赦せず
一步退き二步前進の策を取る
予期しない出会いがあつたまわり道
原点に戻り来た道追うてみる

川島 諷云児

男には避けて通れぬ道がある
心まで映しきれない水鏡
以心伝心伊達に夫婦はしていない
目の鱗落ちて過去から脱皮する
想い出が焼けぼっくりに火をつける

木村 あきら

セセラギに小石搔き分け路のトウ
土堤柳 春を先取りして蒼い
地球儀も壊れてしまう核武装
松植えて青い地球を取り戻す
ゲームセンター論吉どんどん吸い込まれ

工藤 吟笑

サラ金と警察 女房より怖い
迷いから抜けると広い海に出る
思惑があつてか庭園を賞め千切る
飾り気のない天道の暖かさ
ただ会釈だけして行つた老舗路

黒川 紫香

介添えの若さに日々が春となる
寝て起きて孫から年玉貰いけり
あと三年生きる手立てを考える
縁側で寝ている猫のだらしなさ
妹から九十越えたとホームから

小西 雄々

幸せを深追いせぬも処世術
聖地にも見えかくれするテロリスト
他人より大きい財布持つている
猿知恵を貰い右脳に喝入れる
炎の耳で聞けば叫んだ恋童

小林 由多香

田中正坊

騙されることにも慣れて老けてゆく
初詣でみな善人の顔をして

我が家にも娘一人あり難まつり(旧作俳句)
オール3普通ですよと言う教師

赤飯を配りよろこび分かち合う

高校はやつと新設府立校

家系にはない喜寿という歳祝う

短大はいや大学へ行くと言う

ケーキ屋になる夢ケーキ食べながら

いま教師三人の子の母となり

斉藤 姦

玉置 重人

なごやかな歌声だった同期会

煙幕を張りトラブルを避けている

先輩の歌集と出会う古本屋

よく撮れた遺影にしたい男まえ

合格りんご供えておこう鏡餅

水戸黄門のチャネル権は譲らない

少年の風 初空をひとり占め

身の内におちちよこちよいの虫がいる

満点を取った顔する雪だるま

たいがいは笑って済ますマグカップ

田口 虹汀

恒松 町紅

土筆ん坊みんなの春を連れて来い

呼ぶ声がして振り向いた人違い

少し手を伸ばせば百に届きそう

性格がそのまま筆に生きている

紫を着れば小春が従いて来る

まだ若い気分背骨が柔らかい

自選集右も左もお偉方

年の功 話をうまく注いでいる

筆か頭か悪い一つを取り替える

神様も驚いている几帳面

竹内 紫鏑

遠山 可住

古き良き写真 みとせ 三年の角帽よ

張り切ったトップへ老人会が揉め

自分史に亡父の儉約ぶりも添え

コンビニのおでんあなどり難き味

駅古りて歩かす地下の改札機

昔から漬物石はここにある

高らかにセーノと叫ぶ幼稚園

新年へ奇跡は起きぬ宝くじ

お花畑が氷河を退かず温暖化

百歳の母の爪切る薄い音

第4回 春はくろぼこ川柳大会

とき 4月4日(日) 午前10時30分開場
ところ いなば温泉郷 浜村温泉
「浜村ビューホテル」(JR浜村駅)
電話 0857-82-0531

兼題と選者

当日出句 (正午締切・欠席投句拝辞)

「熱」	天根 夢草 選
「誘う」	河内 月子 選
「針」	草地 豊子 選
「トップ」	新家 完司 選
「指」	山本 玲子 選
「赤い」	石谷美恵子 選

事前出句「犬」 石井 富子 選
宛先〒680-0801 鳥取市松並町2-260-16
石井 富子 宛

3月29日締切 必ず「はがき」使用
各題2句まで、当日出句作品は欠席の場合
無効となります

参加費 3000円(昼食・大会誌呈)

賞 最優秀作品賞・優秀作品賞・秀吟賞

懇親宴 2000円(当日受付)

連絡先 電話0857-84-2886・公弘

主催 くろぼこ川柳会 公家の会

露の世の果て無い夢を追いつづけ
三猿になって疑うのは愚か
はっけよい残ったいのちひとつなり
隣の芝生どこか違っているようだ
夢幻から覚めよと牡丹雪が舞う
思いとは逆さのことを口走り
神様に横を向かれたロスタイム
手術台ひらき直れるところなり
好きな事している時の満ちた顔
祖母が舞い降りて来そうな茶粥なり

河
内
天
笑

土
橋
螢

第5回 文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

募集作品 文学ルート(5市)周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗
行事などを題材とする川柳。(未発表のオリジナル作品に限りです)

宿題・応募先(宿題に応じてご応募下さい。各2句)

松江市「しじみ」「怪談」	松江市産業振興部 観光文化課	TEL(0852)55-5293
	〒690-8540 松江市末次町86	FAX(0852)55-5564
尾道市「塔」「眺める」	尾道市産業文化部 観光文化課	TEL(0848)25-7366
	〒722-8501 尾道市久保1丁目15-1	FAX(0848)25-7293
今治市「港」「焼き鳥」	今治市教育委員会 文化振興課	TEL(0898)36-1608
	〒794-8511 今治市別宮町1丁目4-1	FAX(0898)25-1700
松山市「ロマン」「野球」	松山市企画財政部 国際文化振興課	TEL(089)948-6634
	〒790-8571 松山市二番町4丁目7-2	FAX(089)943-9001
高知市「はりまや橋」「黒潮」	高知市教育委員会 生涯学習課	TEL(088)822-6394
	〒780-0870 高知市本町4丁目3-30	FAX(088)823-1095

応募方法

- ・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品(FAXによる応募可)
- ・応募作品には「宿題」及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記して下さい。(雅号の場合は本名も明記)
- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。

応募締切 平成16年3月31日(水)(当日消印有効)

出品料 無料 選考 平成15年5・6月

発表 平成16年7月、入賞者に通知します。(表彰式は、16年9月下旬予定)

選考委員(第二次選者) 吉岡龍城・塩見草映・橘高薫風

(第一次選者) 柏井日出子(松江市) 三浦 宏(尾道市) 木原 鶴子(今治市)

関谷 省三(松江市) 曾我部佳風(高知市)

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

水煙砂

板尾岳人選

草津市 久保和友

米子市 猪森 スミエ

人形の首が揺れてる隙間風

絵日記に変え一葉の日記読む

極楽と地獄の夢を見る初日

初日の出昭和一桁無口なり

生きるヒントひとつ貰った年賀状

京都市 清水英旺

ペンダント中にニトロの護符入れる

乾杯もウーロン茶でする下戸の意地

汗染みたタスキにこめるスピリッツ

シミュレーションどおりにいかぬ終楽章

凍てる夜これ見よがしに満ちる月

長岡京市 山田葉子

離されてからのペースがつかめない

最後までやさしいままのひとでした

いくつ角曲ればめぐりあえるだろう

ここいらで曲ってみたい釘を打つ

マイペース怠ける虫もついてくる

港町栄える蟹のVサイン

三猿になろうなろうと肩が凝る

人の群れみんな呑み込み発車ベル

群がって俺も私も好奇心

ミサイルが飛んで来そうな点にいる

藤井寺市 若松雅枝

挫けずに待とう光が見えるまで

紅白の飾りが付いた荷の重さ

故郷は遠い昔の音がする

無洗米やつぱり洗って炊いている

遺産分け思ったほどは無いらしい

東京都 やまぐち 珠美

いとしさが胸であばれて泣けている

松葉杖冬の重さの影ひいて

記録魔の行間だけに棲む憂い

ひとはいつ泣くのか褪せた笑い面

手ざわりがしゃべる仕立てのよいコート

奈良県 江波 正 純

春うごく力をためる梅の枝
寒風に怠け心がさらされる
猿知恵と笑いお猿に笑われる
しみじみと反省しては休む酒
休肝日一日延ばす鬼の留守

奈良県 南海 美知夫

留守番で知らず知らずに酒の量
しみじみと独りの留守居かみしめる
ライバルがあつて終日独りの日
入ったかポストをいつものぞくくせ
転んでもポケットの金握つてる

和歌山市 喜田 准 一

すぐに抜く刀は鞘に戻せない
割り切ったつもりが疼き出す歯茎
車座で座り直してからの愚痴
過労死を企業戦士で片付ける
結び目がみんな解けている意見

倉吉市 酒井 美美子

ぬくもりの握手心が通じ合い
仲の良い夫婦だ共に風邪を引く
馬鹿でない証拠だ共に風邪を引く
ごめんねと涙の雫光ってる
形あるものより心贈ります

鳥取県 岡村 孝 明

片時も猿離さず食探す
単身の夫へ梅花を文に添え
胃袋へ長居してると嫌われる
幽玄の世界引き込む能の舞
心意気だけは老いても衰えず

鳥取県 平木 公 子

やり直しきけば子育てもう一度
生きてさえいれば良いこときつとある
学ないが生きた知恵なら負けてない
男と女違う文化で生きている
私なら出来るはずだと暗示かけ

鳥取県 吉田 弘 子

迷い消え始発の駅に立っている
よく笑う母が我が家の福の神
楽しかった思い出で消す痴話ゲンカ
生きざまをダブらせて見る小津映画
小兼ねる大を時時もてあます

松江市 山根 邦 代

母米寿祝い受けてる深い皺
でこぼこの人生母の足の跡
三が日笑いとはして福もらう
大声で今日も母との日が暮れる
ときざむ音が耳たぶ太くする

府中市 馬場 利子

愛媛県 黒田 茂代

明日開く花に乗せたい虹の彩
謎めいた言葉わたしをねむらせぬ
いたずらな風がわたしを好きになる

のびのびと下界を覗く万華鏡
水溜り一度に翔んだ老いふたり

北九州市 岡田 幸生

雨の夜の駅にやさしい迎え傘
理屈ではそうだがうまくいかぬ運
年金と介護ニュースは見逃さず
夫には言えぬ火種が胸の底
掌を合わせ仏と対話する

今治市 野村 清美

三面鏡知らん顔する両隣
ピーマンへ愛をたっぷり詰めておく
挫折感背を押す友に感謝する
傘立てに杖も仲よく同居する
喪の窓にやたら淋しい流れ肩

今治市 塩路 よしみ

亡母の声たしかに聞いたそば枕
寒椿耐える女を通し切る
暦剥ぐ昨日のうつを消すように
嫉妬して女衰しい淵に佇つ
人生は耐えねばならぬ傘の内

人生の四季を演じてきた扇
言い訳を探す重たい傘の中
ちぎり絵に似てほんわかと昼の月
吊り橋の揺れと上手に生きている
常識がずれたか共鳴音が出ぬ

高知県 百田 幸

一病は誰も持つてるクラス会
スニーカーおかげで楽に歩けます
狂い咲き花にも花の理由があり
転ぶたび丸い女になりました
魂胆のある親切で隙がない

札幌市 三浦 強一

初夢の夢判断は中の吉
緋けば愛のこぼれてくる句集
ふる里を捨てふる里を賛美する
サバイバルゲームが続く喜寿傘寿
美辞麗句ばかりで本音分らない

横浜市 金森 徳三

義理欠いたままで気になる年を越し
合成酒慣れてしまえば肌に合い
慣らされて開くのを待った手動ドア
CMの美女にききたい貼りぐすり
K点を生命線が超えている

日立市 加藤 権 悟

恩をみな返してたれる枯尾花
木守柿のこして過疎の風ねむる
至福いま初春へ三日の酒に酔う
春一番つばみもすこしずつ笑う
君子蘭人を騙したことがある

京都市 三宅 満 子

老いるほど言葉美人を目指さねば
もう国に頼ってはいはのたれ死ぬ
今年こそ今年こそはと思うだけ
反省の仕方を猿に教えられ
スローライフ目指していると負け惜しみ

大阪市 三浦 千津子

生かされる実感愛というくすり
大夕日たつぷり明日へ気をもらう
冬枯れの心を溶かすある出会い
沈丁花はんなり香る寒の入り
無理しない生き方にある自尊心

大阪市 升 成 好

寝そびれて三億の夢ふくらます
いける口ですなと猪口がにじり寄り
目をつむるこれも立派な自己主張
前向きに考えますと逃げている
常識と一緒にタバコはいと捨て

河内長野市 大西 文 次

わっと来てすつと帰った里帰り
九十三骨董品の仲間入り
朝刊と眼鏡待たせて朝ごはん
目標は百歳後はどっちゃでも
大阪城高層ビルに包囲され

堺市 萩野 像 山

燃やすのが勿体ないようなお棺
犬向けの笑顔僕にはしてくれぬ
才媛も歳にかなわぬ忘れ癖
枯葉さらさら簾へ悪さするように
打ち水に下水処理代とは迂闊

堺市 大久保 伸 子

当らぬと知りつつ買うた宝くじ
何もせぬ正月なのにいそがしい
ともかくも旅行してたら元気です
アメリカの進軍ラップにおどる人
鉛筆をかねでストレス晴らして

吹田市 木下 敏 子

スカートを穿いて六十路の揺れ動く
紅差してまだ六十路なり初鏡
まだまだと歩幅を正す万歩計
趣味ひとつ提げて今年も若返る
春に咲く花に負けずにもう一度

羽曳野市 福田悦子

神戸市 両川無限

梅一輪冬がベールを脱いだ朝
梅にも春亡母が残した舞扇

幸せです三食足りているだけで

万歩計親から受けた足がある

カーテンを開けると春の顔に会え

東大阪市 小川賀世子

愛情も小出しに登る六十路坂

派手め着て無駄な抵抗する六十路

六十路まだ女おんなの風匂う

喜びはしつかり溜める母の壺

余生まだ波乱含みの青写真

八尾市 松葉君江

血の流れ歩き方まで父譲り

拳骨をバネに汗かく出世魚

祝日の国旗我が家の顔になる

はめられて愚痴閉じこめるのだ仏

頭一つさげて心を軽くする

八尾市 脇俊子

見えすぎる眼鏡はよそう生きる道

針穴の中から人の心みえ

別れとはご飯の味が砂になる

笑うても泣いても時は二十四時

味噌汁に寂しさポトリ浮き上る

神様の試練か涙もろくなる

男でしょ夢はでっかい方がいい

悶々どこかで鉤掛け違う

溺れたら助けてくれる人がいる

本物になろうと爪を研いでいる

尼崎市 河津正治

愛情のスパイスに泣く反抗期

稲光り妻と出合った雨宿り

簡単にオベにしますと書くカルテ

咳払いして声とのえる留守電話

論点をずらし攻勢交わす術

伊丹市 延寿庵野鶴

酔わされてやがて本心見抜かれる

虚を衝いた言葉がやがて胸を突く

いたわりの風にリハビリ癒される

片べりの靴こつこつと明日へ向く

生命線もつと伸びそう喜寿の膳

兵庫県 安達厚

過疎化する里が市制になるという

急ぐからこけるんだよと蝸牛

急ぐこともない百までは生きてやる

蹴つまずくたびに歳だと言いきかす

朝風呂の湯気が菩薩の顔にする

奈良市 成橋邦柳

戦前派もつたいないとまた仕舞う
年の暮喪中のハガキ多すぎる
癖のあるこの字は友の年賀状
虎暴れ未が消えて申来たる

奈良市 乾 春雄

やさしさが欲しくて迷う曲り角
言い切った満足悔いている孤独
アイロンの余熱のような良い夫婦
曲り角迷路抜け出す明るい灯

奈良市 田中賢治

少子化で年金ダムも地肌みせ
針千本飲んだ振りして派遣指示
テロ許す国は無いのに散る命
自衛隊針の筵で水配る

生駒市 小西稔

携帯の操作に困る老夫婦
針穴の向こうに見える新時代
針供養感謝の心よみがえる
夜なべとは母の思い出針仕事

和歌山市 根田よしこ

猿年も見たい聞きたいしゃべりたい
わたしにはわたしにだけの幸せも
忘れん坊くよくよしない天才で
今日もまた普通に過ぎる有り難さ

和歌山県 辻内次根

温かい借りは返さず抱いている
大切なものがこぼれていく記憶
カタログの色を食べてるタラバガニ
私は得意なんです危険予知

和歌山県 村中悦男

乱れ糸焦るばかりに増す苦勞
お互いが歳を重ねて和を選ぶ
買ひものに軽く紅ひく妻を待つ
生きている証と思う妻の意地

鳥取市 横田春名

温めた言葉出口を見失う
大胆な発言いつも胸の中
世界中人の命はただ一つ
今泣いた鳥が笑う賑やかさ

鳥取市 河田のり代

子が決めた盥回しの舟によう
俤に唄って踊る日の早さ
小言言い妻を困らすボケ防止
酔うほどに浮世の皺が泣き笑う

鳥取市 岡田信恵

人前で言えぬ言動目でサイン
白髪染生きがいくれて若がえる
今年こそ笑顔忘れず動き出す
冗談が通じない身のもどかしさ

鳥取市 近藤 秋星

出雲市 荒木 英子

元旦に生まれる人と死ぬ人と
生かされています命を大切に
冬海砂丘に佇てば風が哭く
けなげさよ梅花は雪に凜と咲く

鳥取市 大坪 天涯

倅せという困難なことがある
恋という字が飛び込んで夜が長い
禁酒禁煙とても無理だと妻の笑み
超越の世界は酒がいちばんだ

鳥取市 山口 千代子

煩悩を消せと仏の鐘ひびく
気苦勞も少々あつて脳のバネ
札儀から初のお茶席日本の美
まだ逝けん余生の夢を果すまで

米子市 小塩 智加恵

いも焼酎人気あるから飲んでみる
七草の粥で胃袋勞わりて
美人から貰った嘘は許さない
万札に羽が生えたよ年の暮れ

鳥取県 竹信 照彦

干支の猿描いて己に似る始末
手づくりのしめ縄飾り寝正月
賽銭の小銭忘れて初詣で
くじ運の良い妻ティッシュよく当てる

初詣でプラス志向で歩みたい
庭の牡丹も優し笑顔になつて
年重ね命は神にまかせつつ
猿達も身を寄せ合つて春を待つ

鳥根県 武島 ちよえ

もう睨み効かなくなった鬼瓦
雪溶けの流れは春の音で行き
思いようひとつ楽にも苦にもなり
双肩に重荷がかかり呆けられぬ

鳥根県 菅田 かつ子

優しくて昔を語る炬燵守り
七十の明日に小さな夢がある
窓越しへ誰が唄うか春の歌
春うらら趣味ぶら下げて躍ろうか

鳥根県 福岡 博利

中東の風悲しい嘘がある
フセインの顔しげしげと世界中
隙だらけ今日のあなたはきれいです
お喋りが弾みつじつまにぬねの

岡山県 矢谷 富士野

神様もテープを流す初詣で
雪月花喜怒哀楽を盃に
梅一枝仏に見えて春を告ぐ
地下足袋をぬいたら女蝶になる

宇部市 高山 清子

ズバリ言う親友が憎らし有難し
簡単で良いと言われてまた悩む
頑固の角削って老いは従っていく
夫婦でも時々持つ車間距離

串間市 高畑 滝

菜園に雑草の種落ちる夢

公衆の電話消えてる過疎の里
太陽の匂いが好きで布団干す

初日の出スクラム組んで出なおそう

唐津市 坂本 兵八郎

猿真似と笑われながら駈けている
還暦の妻はあちやんと言わせない
みえみえの嘘を信じた妻が好き
妻の乱先ず糧道を断つ構え

今治市 渡邊 伊津志

焦るほど纏れて絡む糸の自我
その怒り買われて海豚提灯にされ
滝しぶき名画の音が聞こえそう
色彩の交差に躍る人の影

愛媛県 宮本 末子

ほんのりと女酔わせた昼の酒
外面はともかく金は持つてはる
ありがたや安い卵に生かされる
七回の猿が教えてくれた真似

愛媛県 安野 かか志

山茶花の温みを抱いて風が舞う
失業を妻の笑顔に包まれる
悠々と生きる決意で二度の職
穏やかな妻の太鼓へ舞い踊る

高知市 伊野部 和江

辛口の妻が私の指令塔
リハビリの悲鳴を聞いている介護
家庭菜園大地はちゃんと答えくれ
軽い惚けとすでに折り合いつける日々

高知県 桑名 孝雄

指差し呼称まだ石橋の前に居る
衣食住足りて羨に蹴蹴く
聞く耳は持たぬが飲める口はある
うっかりとちやっかり老いの処世術

日高市 根岸 方子

ご近所の話鏡を曇らせる
こぼれ種明日の私を見るようで
木枯しのない故郷は物足りず
まだ欲があり罵声をも聞き流す

武蔵野市 亀井 円女

治らない短気がさせる勇み足
残る日は神にお委せ無の心
にっぽん万歳旗は日の丸山は富士
真っ直ぐに人を愛して夢を見て

横浜市 布山嘉信

大阪市 寺井弘子

故郷の風が心の窓あける
器量よし殻も愛でられ桜貝
暖冬に椿が春を咲き急ぐ
猿なりに進化したいと知恵絞る

横浜市 川島良子

池田市 多田契子

初売りへはしれ走れや福袋
干渉をしないルールで丸く住む
お手本にされては困る姑である
盛り上がるリズムに乗る日乗れない日

岐阜市 平野あずま

泉佐野市 稲葉洋

年の功 見る聞く言うの猿になる
年頭の決意を酒と語る父
目の冴えた枕で亡父の叱咤聞く
敵許すことで勝利を手に入れる

大阪市 伏見雅明

柏原市 伴洋子

日だまりを選んで歩く親子猫
踏み潰す気配に虫が身構える
煙幕を張って自分を見失う
村芝居主役もやれば幕も引く

大阪市 尾崎黄紅

河内長野市 木太久正一

アリバイは煙草の灰が落ちていた
白黒を決める話は受付けず
ほんとうの後ろ姿に従っていく
四分六で老妻に譲って恙なし

相席に期待している一人旅
良縁のおみくじ背中押してくれ
お賽銭願ひ多くて奮発し
年賀状だけで途切れぬ友も良し
なんだろう新年早々ウツになる
白面の騎士かと思う冬木立
底冷えの一人の鍋は荒っぽい
マンネリの恋歌静かに燃え尽きる
明るさに引っぱり出され春の息
路線バスゆつたり里は春模様
正月に負けない春も熨斗袋
その内に逝く順がくる彼岸花
浅はかな考え金の横車
虎の尾をわざと踏んでる天邪鬼
踏ん張って家族支える太い足
ああ恋は優しい顔にしてくれる
寅と申ひっかき合うて喜寿と古希
追い抜かれ老い自覚する駅の道
目玉焼上手に作るコッ覚え
旨いもの食べて歩いてよく眠り

河内長野市 坂上 淳司

書き溜めた妻の日記は玉手箱

さいならとニツコリ笑ろて逝けたらな

怖いこと楽へ楽へと流される

芝居気があるのか赤がよく似合う

河内長野市 印 藤 智 子

まわる独楽今年はどうな年になる

チャップリン蚤のダンスを思い出す

憧れの人小説の中に居る

若い日のトラウマ今頃あばれ出す

岸和田市 雪 本 珠 子

溜息が紅葉の海に吸い込まれ

舞い落ちる枯葉と風が戯れる

アバウトに生きて見ろよと月が言い

気がつけば幸せいつも傍にいる

岸和田市 土 橋 房 枝

現代っ子ラブの言葉を軽く言う

軽い咳それでも母は心配す

不安など何も無いのか良く笑い

枯葉舞う風情コートの前を立て

吹田市 二 宮 栄 子

願い事託してとばすしゃぼん玉

毎日をしていねいに生きつつがない

何となくリッチになれる朝のパン

独り住み受話器風呂までついて来る

自分史の完結編は青写真

奇蹟など無いよと笑うフェニックス

用件はなんやったかな長電話

4Bで書いてやさしく人を斬る

高槻市 瀧 本 きよし

お見舞のことばにうそも盛ってある

借財が膨れ密かに闇へ発つ

何もかも知っているから嘘をつき

低金利預金引き出し壺の中

高槻市 大 崎 侑 子

暇と金足りて長寿の楽隠居

尽きること無かった母の知恵袋

楽々と跳べた溝で怪我をする

好き勝手気ままに生きて幕を引く

豊中市 源 田 啓 生

三猿の教えすっかり裏返り

妄執を祓うに足りぬ百八つ

親切にされて微笑む顔と顔

本当の日記は脳の奥に書く

羽曳野市 森 下 一 知

仲違い計り損ねた車間距離

極楽を信じて歩く万歩計

靴下の穴にノルマを言い聞かす

溺愛が子の言い訳を鵜呑みする

オホーツクの北の味覚を持って来る
羽曳野市 濱口 フジ

最北の地をふみしめる宗谷崎
朽ちはてた船も凍った最北地
ニシン漁枯れて網船雪うもれ

藤井寺市 俣野 登志子

娘が嫁ぎ肩の荷降りて肩淋し
嘘ついて火照った顔に春日影
膏藥が晴れ着の肌に顔を出し
限界は三泊四日夫の許可

藤井寺市 鈴木 いさお

血税を砂漠の果てへ捨てに行く
気むずかし多分AB型だろう
ジーンズの下にラクダのパッチ穿き
ここだけの話を皆が知っている

藤井寺市 増井 ヨシ枝

暇そうな神をみこんで願回事
ベイオフが近頃トント耳に來ぬ
本年も鬼一匹を飼う心算
柿熟す鳥にアカンベして落ちる

箕面市 寺井 柳 童

雪のないイブにサンタは立往生
家計簿を真つ赤に染めて年を越す
一枚と同じ猿ない年賀状
初夢に戦争のない世界地図

オブラートに包んだ愛はほのぬくい
八尾市 中島 春江

使い捨て懐炉に老いを温められ
忘れたき事多くして冬牡丹
自転車をドミノ倒しに北風よ

八尾市 赤木 妙子

見てみたい七福神と出会う夢
朝一番まず温かい記事探す
ブライドを捨てて降り立つ無人駅
世の動きついて行くのも無我夢中

八尾市 西川 義明

タイガース夢のつづきを待つビール
還暦の妻へ真つ赤なバラの束
手の内の恋がだんだん目減りする
すり傷にまじらないかける母の指

八尾市 平川 幸枝

しみじみと忘れることの軽くなる
浮き雲の動く気配にひとり生く
嘘のない写真に歳を見つけられ
三猿の守り冬眠すると決め

八尾市 笹倉 ひろし

雑念を捨てて仏の使徒となる
新選組袖の誠にある規律
黒ネコと飛脚が競う年の暮れ
新春に国の大義と命懸け

八尾市 寺川 はじむ

白黒をつけるつもりでグレー色
乗り継ぎへ夢を踏み出す二人旅
日記までトラが溢れている去年
喜怒哀楽を包み込んでる雪の山

大阪府 高木 道子

人生の切符この頃色褪せて
木の葉舞う風の拍手を受けながら
政治家と芸能人は世襲制
時々とは思いつのか休肝日

大阪府 神野 千恵子

歳重ね初めて似合う猫目石
産声はきつと万国共通語
前向きの人からもらう力水
空想が串刺しにされ広がらず

神戸市 山田 婦美子

路のとう襟元堅く春を待ち
雪が舞うロマンの一つ二つなど
諍いの後の気まずさ寒椿
四十年甘い辛いと一つ屋根

川西市 井本 清山

リフォームが出来ず健保で総入れ歯
年金が貯まるつもりで粗衣粗食
お湯割りをちよつと熱目に寒の入り
自衛隊手枷足枷第九条

篠山市 谷田 多美子

お年玉まつ顔揃う母の家
お灯明消さずに猿を迎えまつ
見て言つて聞いて三猿照れ笑い
思い切り一人ばやいて除夜の鐘

三田市 石原 歳子

見舞われる患者の方が元気そう
年金で積もり貯金をして暮らす
腕ふるい料理したのに褒めめせず
人さまのお役に立っているつもり

西宮市 片山 忠

母さんの曲で泣き出すくすり指
中身より見てくれだけの多数決
前向きの上しろに蜜が待っている
妹に惚れたら姉にチェックされ

西脇市 七反田 順子

美人の湯 湯気の向こうは皺の顔
夢買うて祈る気分で神棚へ
曲り角知らずに過ぎた更年期
乾杯で顔に紅さす酔い心地

兵庫県 岩本 美緒子

松飾り音のない朝一人じめ
冷え込みの厳しい朝も靴が鳴る
交流の枝葉おとさぬまだ元気
ささやかな花芽が息吹く春たのし

奈良市 矢野良一

肝機能検査パスしてうまい酒
肝腎な話になるとつぐむ口

禁煙で浮かした金をたかられる

橿原市 藤永実千代

唯じつと聞いて相槌打って欲し
待たされて病の軽さ自覚する
反論を控えて夫婦旨くいさ

田辺市 大峠可動

憲法の九のやさしさ嘘だった
美辞麗句世話になるので聞いている
多情仏心お伽ばなしも抱いている

和歌山県 森下順子

遅くない今が旬だと思ふ古希
嘘いつか大手を振って歩き出す
曲り角ひっそり咲いた枇杷の花

鳥取市 谷岡清子

福の神たまにはお寄り願いたい
初夢に長生きせよと母の顔
平凡に生かされ生きる果報者

鳥取市 西尾敬之介

少々の難有り安い品を買ふ
たつぷりと七味きかせて咳をする
どうにでもなれと迷わずしらをきる

鳥取市 森美智代

申年の娘適齢期がまだこない
年金の話するたび減りそうな
オレオレはこないよ孫のないわたし

倉吉市 前田喜美子

底力出しておふくろコマの軸
若葉マーク貼ってドライバー風の中
ガラス拭く明るい世界みたいから

倉吉市 青砥菊枝

初耳とびつくり顔であの話
目標の元氣二文字へ汗流す
親を越え大きくなれと名に込める

米子市 池尾保子

値上りはしてもやっぱり米が好き
癌よりもミスが恐いよ外科手術
比例区でやつと当選してみたが

米子市 足立由美子

これからの事は誰にも読みきれぬ
点と線 結ばば答出てきそう
折り返し点で考え変えてみる

鳥取県 藤山弘子

要介護上手に利用猿の知恵
トラキチヘパワーをもらい動き出す
人相を変えてもわかる言葉じり

鳥取県 山岡久枝

鳥取県 西原真一

合掌で心の穴をうめている
初夢に安定剤が効きすぎて

弁護士がいるのにホームレス増える
二十年自律神経失調症

平凡に豆ふつくと煮えてきた

金がないああ金がない金がない

鳥取県 竹森富久江

松江市 松浦登志子

過干渉とべない鳥にしてしまふ

妻の声がんの心配吹きとばす

砂の丘母と遊んだ日に戻す

雲低く白い雑巾空を拭く

学ぶ窓まだ開けておく周波数

靴の紐事故の痛さを知っている

鳥取県 岩崎和子

出雲市 小豆沢歌子

着ぶくれて新年の風両の手に

幸せの小さな灯り福寿草

早や十日過ぎてお飾り下げようか

嘘と実のはざまに生きる迷い蝶

低迷をホットミルクがほつとさせ

一步二歩明るい方へ歩き出す

鳥取県 毎田信翁

出雲市 川島和歌子

大山のこだまが隠岐に届きそう

言いかけてなんでもないと口つくむ

介護にはなりたくないと言ふ歩計

古傷の酔えない酒に茶漬食べ

生きている限りウイルス共に吸う

長雨に靴の悲鳴を聞いている

鳥取県 橋谷静江

出雲市 梅ミツエ

軽い気でサインしたのに悩まされ

よそ行きの顔見て貰うお正月

体力を付けると言つた日に転ぶ

母の味黒豆煮ては想い寄せ

まだ燃える余力を残す紅の色

戦争のテレビ見るたび兄偲ぶ

鳥取県 鈴木一弘

安来市 原煩悩児

缶けつて肩身の狭い思いする

カンボジアのんびり牛や豚までも

トックリの狭い喉元過ぎて海

アンコールワット観光バスは日本製

真心がいっぱい詰まる幕の内

カンボジア此処も日本の広告塔

島根県 毛利 幸

愛媛県 花岡 順子

スイッチオン私もできる全自動
夢追つて人生街道徐行する
珍客で慌てふためく台所

倉敷市 撰 喜子

南国市 小原 圭二

団らんの楽しさ残る孤独感
盆正月里の素顔に癒される
胃カメラの順番を待つ不摂生

唐津市 岩崎 實

高知県 貞岡 佐紀子

欲しい物ないかと聞かれたいと言
ランナーに折り返しての向い風
餌をやれば隣は雀追い払い

宜野湾市 杉谷 一栄

青森県 富士トキ

元気ですハガキに返事ひとり言
若い人魔法の味にするサラダ
三猿で息子と暮らし元気です

シドニー 坂上 のり子

秋田県 湊 修水

ばたばたと生きた残りは大らかに
ど忘れをせぬため書いて置き忘れ
貧乏性お金持っても使えない

東かがわ市 向山 治延

東京都 井上 つよし

雪の庭春はそこだとフキのとう
菜の花に蜂がたわむれ蝶が舞う
冬の浜立つて龍馬寒かろう

年明けへ賃金カット待っている
デジカメに初日おさめたお正月
お小言も頂戴してる耳掃除
大晦日いつものように九時に寝る
百歳のまわりにいつも人が居る
飛ぶことはもう考えぬ濡れ落ち葉
ハンガーの背広欠伸し出番待つ
二人三脚結び目少しゆるくする
母譲り眉間のしわが深くなる
今年こそ猿に負けない知恵絞る
白鳥の群れなして飛ぶ愛 平和
何もないところあげたいドナーカード
あけまして不況いや増す新年度
ほどほどに酔うて候孫の酌
さりとても重い荷物のテロリスト

読みたかった本を抱えて冬籠もり
捨てた過去と落葉が溜る路地の溝
孫達の運動場になる座敷

横浜市 石原 三郎

気兼ねなく朝から飲めるお正月

散歩道影に教わり腰伸ばす

部屋の奥まで覗きくる冬日差し

横浜市 長島 亜希子

新婚の笑顔に屠蘇の席弾む

内緒事なのに子供にばらされる

眺望の良さも家賃に加えられる

新潟県 高野 不二

焼酎を毎日吞んでます長寿

年末の美談になった貯金箱

餅がうまいパンがうまくてやせられぬ

静岡市 中西 雅

ひこばえに明日の力を貰い受け

卒寿から一步ふみ出すお正月

この平和拍手の中たつぷりと

大阪市 中村 忠敬

四番打者八人いるのでクジで決め

宝くじ柏手三拝したがダメ

女王が一匹おわすわが家には

大阪市 井丸 昌紀

ゆつくりでええぞと親父早口で

初詣で傘持つて出るおまじない

そういえば久方振りに仰ぐ月

大阪市 近藤 正

添え書きし二枚目も来た年賀状

ひと眠りひよいと疑問の蓋が取れ

また優勝そうは問屋が卸すまい

大阪市 池上 清治

幕間にオペラを溶かしコーヒ飲む

内幕をあばいて稼ぐ週刊誌

幕閉じた友を消しゆく住所録

大阪市 中村 トミノ

座右の銘平和と愛を書き初めに

この賀状ちよつとおかしい胸さわぎ

休刊日新聞好きもホツとする

大阪市 平井 露芳

アメリカの牛も食べてた肉骨粉

先送り好きで上げない消費税

申年に悪いが今年も寅の年

大阪市 吉内 タカ子

くるくると尽くす嫁には幸こばれ

咲き誇る蠟梅告げる元氣くれ

安否問う賀状交換二〇年

大阪狭山市 羽田野 洋介

おみくじの吉は今年も信じない

虫のいい相談だけは来る息子

簡単に結果を出せと言われても

和泉市 小坂凡英

岸和田市 坂口英雄

早々とランドセル買うお正月
とりどりのスタート朝の喫茶店
身辺の整理日記をよう捨てぬ

和泉市 横山捷也

軸受けに母さんが居て駒を打つ
セリフなど無いが主役の馬の脚
定退で主役を妻にゆずるハメ

泉佐野市 備後三代子

指折って幸せを繰る初春の宵
この寒さこの身一つの置きどころ
枯芒わけありそうに首を振り

門真市 矢阪英雄

新選の誠を背なに伏見行く
さるかにの話に孫はそつばむき
デジタルで無音の時計ときざむ

河内長野市 内海綾乃

物忘れ手柄のごとくしゃべってる
何時もの事目出たいと書く年賀状
うどん好きそばは駄目かと大晦日

岸和田市 堤 楢代

舞いますよ足がだめでも心では
初詣お後が待ってる戎さん
嫌な事松の内でも容赦なく

神様は賽銭なんか知らんふり
やさしさとオレオレ詐欺に弱い古い
汗かかぬ人が後ろで御膳立て

岸和田市 森元ふみよ

グルメ旅やはり気になる体重計
突然にライバル訃報声を吞む
平気だと頑固に言うが古い独り

岸和田市 中島寿海

ゆさゆさと揺れてた昔なつかしい
秋の空湿った心を干すチャンス
よい夢を見たくて今日もふとん干す

堺市 奥 時雄

困ったら来いといったがそこまでは
針千本のむ約束をしたままだ
真夜中の秒針いのち刻むごと

堺市 藤井 一二三

終止符をどこで打とうか旅の手記
乾ききった老いを潤す手紙着く
年金の通知わたしは生きている

堺市 河盛龍三

震災の心の傷は未回復
曇天に大口開けて牡丹雪
参拝で首相の腹が見え隠れ

吹田市 須磨活恵

ふところにいつも抱いてる蒼い月
構えずに今年もゆっくり蝸牛
告白に火を吹きそうなくすり指

摂津市 もちづき 遊美

黄色いリボン軒に結んで反戦す
独り居はテレビにお守りされている
テレビなかった頃の独居は如何ばかり

高槻市 安田 忠子

雲海を眼下に眺め富士を知る
七つづつ百から引いてボケ防止
人は皆同じコインの表裏

高槻市 執行 稲子

退院の許可は嬉しい太鼓判
深呼吸とゆっくり相談マイペース
言い訳をびつたり合わすずる男

富田林市 古田 千華

比較的冷静に聞く他人事
独裁者ここにも一人穴に居た
甘えるな成人式は伊達でない

豊中市 藤井 則彦

願わくばこの世の幕を妻と引く
老眼鏡かけた息子と酌み交わす
ゴルフからマージャンになる雪の朝

寝屋川市 岡本 勲

職退いて子供に戻る父の顔
七十で恋人捜すと見栄を切り
怖いのは地震雷火事自爆

羽曳野市 吉村 久仁雄

引き出しに仕舞った本音色があせ
地球との共生よりも妻が先
冷戦が続く地球と人の仲

羽曳野市 仲谷 真一

新年を笑顔で迎える有難さ
新年も禁煙思い煙草吸う
知事選も虎の威を借り闘えり

羽曳野市 永田 章司

七草が一つ足りない家の粥
無駄省き憂さの捨て場に困り果て
改革は痛みだけかと首かしげ

東大阪市 米田 志津子

テロ地震神様天で怒ってる
自衛隊身がわり猿にたのみたい
初日受け庚申さんの猿光る

東大阪市 今岡 貞人

トラ効果あれもこれもと賑々しい
年老いて夢を持ちたく日記買う
小泉さん熟慮三昧お正月

枚方市 大昇 隆 広
ハルウララ君はそれでも走るから

罹病して夫婦のきずな知る散歩
賛美なき精一杯へママの酌

枚方市 莊 司 弘 之

旗色が悪くなりかけ酒を注ぐ

平等の真理を論す雪景色

ほろくそに怒ってくれる妻の愛

枚方市 二 宮 紫 鳳

もみじの手合わせて祈る初詣で

平和です小春日和の三が日

孫帰る台風一過のような朝

枚方市 小 川 良 吉

妻子ありまさかの坂も越えられた

もの言えばあとが続かぬもの忘れ

小津映画スローな時間に癒される

藤井寺市 吉 田 喜代子

人間を雑煮のように食べる駅

冬晴れに人待ち顔の寒ばたん

百歳まで生きるつもり設計図

藤井寺市 西 村 栄 一

生きざまはいつもひとりの風の中

新しい人から風が吹いてくる

波風をたてまい聞かぬ事にする

太陽に裏表みせ舞う落葉

若い芽に春の陽差しが笑ってる

目が覚めて生きてる事にああうれし

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

八尾市 田 中 トシエ

風向きの変わらぬうちに出す答

捨てる夢まだ見ぬ夢を糧とする

七草の由来の説は祖母出番

大阪府 小 栢 こずえ

吹雪く空 手紙届いた春が来た

気まぐれな降っては晴れる冬の虹

物忘れかくも由々しきことです

大阪府 藤 井 郁 代

真実を伝えるために嘘もつく

寒越せば花咲く春を待つ私

ひなの顔古風美人は売れ残り

大阪府 畑 中 節 子

巨大靴脱ぎたる土間の狭きこと

葉を落しやどり木目立つ冬木立

登り坂浮く羽根ほしい万歩計

神戸市 田 中 章 子

隠したいことほど他人は知りたがり

鉛筆を使い切ること忘れがち

アルバムに幸せのシーン埋めていく

(桑原東園・古川正子・堀正和・辻開子・黒崎美紗子さんの句は

51頁に掲載しています)

麻生路郎物語

(27)

—福田山雨楼メモの終結—

東野大八

この麻生路郎物語も、昨日手をつけたばかりと思えば、既に第二十七回目を数えた。ともあれ、頭初予定した通り、本稿をもって筆者のタイトルである「麻生路郎物語」は終結する。路郎時点における年齢は六十五歳。

麻生路郎は明治二年（一八八八）に生誕し、昭和四〇年（一九六五）に他界したのであるから、路郎生涯のストーリーを追うのであれば、あと十四年の晩年の春秋が残されている勘定になる。しかし、この期に拙稿を閉じる理由は、本稿を構成するに当りその重要な主軸ともなった山雨楼メモ、すなわち福田山雨楼記「麻生路郎先生伝記資料」が、昭和二十七年路郎六十五歳をもって杜絶しているからである。

また、この終稿に当たってのいま一つの理由には、路郎門下三百余名という諸賢が、今な

お柳界にあふれ、本誌上にも健吟健筆中であることだ。そのなかには中島生々庵本誌主幹をはじめ、数多の不朽洞門の高足は、師の壮年期から風雪苦楽とともにし、師を知悉することその腹背の如くで、筆者づれの遠くおよぶところではない。したがって路郎師晩年の身辺の動静については、もはや筆者が一知半解の秃筆を弄するまでもないとの考えによる。願わくばこの諸賢各位の活写される本稿への補記によって、麻生路郎師晩年の歳月に有終の美を飾られんことを筆者は衷心より祈念してやまないとこころである。

山雨楼メモという貴重な路郎月旦の記録に對し、つねに才氣馥郁たる書簡を綴られた霞乃夫人には、本稿を閉じるに当たって心から甚な謝意を表する次第であるが、本篇起稿に

当たり寄せられた一昨年十一月の霞乃書簡を掲げよう。

「あなたに路郎のことを書いて頂くのは私年来の希望でありましたから、お心の赴くままにお筆の運びがままにおかき下さい。」

内容につきましては、私達へのご遠慮はさらさら御無用でございます。如何にあなたが精根こめておかき下さいましても「路郎物語」を他の人に伝える人が今仮りに十人あるといえましたら、十人が十人ともめいめいのカラーを出して語られます。芥川竜之介の作品（註「藪の中」）で或る若い旅の夫婦が山中で追剥ぎに逢い、三人とも死んで終ったのです。後程、巫女の口寄せで三人の死者に語らしたところ、三人ともみんな言うことが違っていました。当人の口から直接にきいたことでは、え、こんなに当たらないのです。作者は人間の告白というものには、多少嘘もあることを指摘しているのだと思います」

最後に初稿以来、このストーリーの基盤を成した「麻生路郎先生伝記資料」の作製者福田山雨楼について、筆者はここからの謝意をこめて記述しておこう。

川柳雜誌No三四〇（昭三〇）九月号は、山雨楼追悼号にあてられている。巻頭文要約。

▼多年闘病生活を続けていられた山雨楼。

福田義達氏が六月十六日午前六時四十分、横浜市保土ヶ谷区岩崎町十番地の自宅で永眠されたことはまことに痛惜に堪えない。行年五十七歳。

▼氏は明治三十一年十月一日、岡山市牟佐に生れ、その一生を鉄道人として刻苦精勵、病を得て退職。晩年国会図書館に職を奉じられたが、これまた宿阿のため退職。ひたすら療養されたが遂に起たなかった。

▼氏が川柳に手を初められたのは大正十四年一月頃で、三十余年の川柳生活においてすぐれた作家であり評論家として知られた。その柳歴と識見により路郎門の高足として昭和二十九年二月川柳雑誌副主幹に推され今日に及んでいる。

▼氏は死期が迫ってもなお宗教にすがろうとはしなかった。川柳による安楽死を希望し、何負けてたまるか目に見えぬ菌と最後まで菌と闘い続けられたが、ついに菌のために敗れたのであった。

この悼文は路郎が書き、一頁を痛惜哀悼の悲痛な言葉でつづられ、路郎句帖に

片腕を千切られた思ひして焼香す
川柳仏蒼白き月に入りしか

「オ、山雨楼と呼べば一ト筋のけむり
—しかし奥さんという声もう聞けず
—絶筆も一糸乱れぬ君なりし

と「山雨楼を悼む（五句）」を載せている。

この号「悼 山雨楼」の特集記事が各人の追悼記で埋められている。

その中で富士野鞍馬はこう記している。

「川柳の定義—これは誰でも欲しながら、それを言明するとなると、なかなかむずかしいのである。その難しい川柳の定義を、福田山雨楼さんは立派に論文として発表した。その論文は、岸本水府さんの「川柳の書」に採用されている。

この論文もたしか山雨楼さん病中の作と記憶する。永い病床生活のその間に、克明な調査や研究文章をいつも川柳雑誌に発表されていた。それを読むたびに俳句の正岡子規と見舞っていられたことを知っている。そして川柳雑誌副主幹として期待されていたであらうに、嗚呼……（以下略）

山雨楼の路郎観は、一口にいえば教祖の絶対帰依の敬虔さで一貫している「川柳研究」昭和九年六月号の「麻生路郎論」が伝記資料に再録筆載されているが、その断片中の一、二は本稿にも再録しておいた。

また山雨楼の路郎観は、吉田水車の「山雨楼氏を偲ぶ」にもよく出ている。

「山雨楼氏と私の柳縁は二十数年にもなる。そして私の号を今の水車にしたのにも一つゆかりがある。

それは川柳雑誌社の句会へ初めて出席した折は私の名「二郎」を明としてそのまま使っていたので、その夜何かの句が抜けて名のりの「ジロウ」と答えたが、丁度幹事に出ていられた山雨楼氏がこれを聞きとがめて

「路郎先生と同じような号を名乗るのは誰か」

と半ば叱られたような事があった。こうしたところ、氏の先生をおもわれる念の厚た事がしのばれるのである。勿論、氏に改号を促されたわけでも何でもなかったが、その後自発的に今の号の水車と改めた」

昭和二十七年川柳雑誌六月号（No.30）に「山雨楼居の二時間」と題する巻頭一頁にわたる路郎の記述がある。山雨楼の死に先だつ三年三月前の注目すべき一文である。長文にわたるので要点のみを抄録しよう。

「静岡の大会がすんだ翌日の五月十二日、私は静岡を発つて横浜の自宅に闘病中の山雨楼を見舞った。

べつたり寝込んでいたとばかり思っていた私は、思いがけなく玄關でその姿に接したので、多少の安堵感を抱いて、奥の間の病室に入つたがそこにはやはりベッドが設けられてあり、今の今まで床の中で私のくるのを待ちあぐんでいたのである。この部屋はその昔、私が上京した際泊めて貰った思い出の部屋である。彼は部屋に戻るなり十数年会えなかつ

た感激が咳となつてとまらない。

「まあ静かに寝ていたまえ」

と云つて私が主として話すことにした。やがて咳がおさまると一冊の本を私に手渡し、

「コレを持って帰つて、間違つていゝところがあれば訂正して下さい」

と云つた。その一冊は古帳簿を利用したもので、表紙の中央に「麻生路郎先生伝記資料」と達筆に記し、左手の下に彼の名がある。

私はバラバラと開いてみた。扉ページには私の寿像の模写が一頁大に描かれている。それをめくると序文としてはないが次の文字が読まれる。

「路郎先生の伝記を編むことは一大事業である。須らく遠大なる計画と周到なる用意を以てからなくてはならない。先生の足跡獅子吼えはあらゆる方面に亘っているから、これを発掘し、誤りなきを期することは実に容易なことではない。この資料は山雨楼がこころをこめて折にふれ、時に記録したもので先生の全貌に対しては九牛の一毛に過ぎぬが、同志と共に漸を追うて補して行きたいと思う」

その次をめくると私の顔がいろいろな写真から随分沢山模写されている。大正四年頃、大阪の楽天地の地下室で剣花坊と一緒に写した時の顔、大阪日日の催しで水府君と対談した

時の私の顔まで模写されているのには愕いた。いろいろな雑誌に掲載された「麻生路郎論」も根気よく蒐集されている。私の一歳から数え年六十五歳までのいろいろな記事が年別に綴られてある。そして昨日の観光静岡全国川柳大会に出席したことまで記して筆を止めている。これからもまだ書き続けろということであつた。そしてもう一人この仕事をやってくれる人が欲しいといつた。

私が果して伝記を遺すに足る人物であるかどうかは別として、山雨楼君がこんなにも精神力を傾注して伝記資料を蒐集していようと私の夢想もしなかつたことであるが、こうして私の伝記資料をつきつけられてみると私の勉強ぶりの不足をひしひしと感じると同時に後進に対する責任を痛感したのである。

「麻生君はいい弟子をお持ちですね」

とどつかからいわれそうである。この一冊の本を山雨楼君の手からうけとつた麻生路郎こそ以て瞑すべしであると思つた」

この「麻生路郎物語」に毎号登場した山雨楼メモこそ、他ならぬ山雨楼が病む手で路郎にさし出したその伝記資料の古びた一冊の帖簿、そのものである。筆者は、この両者が、山雨楼の病室でとり交されたその銘記すべき一瞬を脳裡に思ひつかへながら、一種の名状しがたい因縁ごとく考えざるを得

ない。山雨楼も路郎も、この一冊の古帖簿をことある毎に開けながら、らちもない「路郎物語」をせつせと書きつづける、筆者というまぎれもない第三者の介在を、その時夢見たにも考えなかつたことにちがいないと。病床の山雨楼に対して筆者は麻生路郎先生伝記をこんな形で活字に続けたことについて今更ながら忸怩（じくじ）たる想いにとらわれ、答えるべき言葉もない想いである。

「山雨楼さんをわしの養子に出来ないか」と川上三太郎さんが路郎にいわれたことがある。養子というのは川柳研究という柳誌のアシスタントという意味である、と、蔑（あざわら）簡の一節にある。路郎がそれに応え、山雨楼がそれに対しどのような反応を示したかは、もとより論外の事項に属するだろう。

筆者はこの「路郎物語」の結びをかく時点において、今は亡き福田山雨楼副主幹に対し、ただ一筋に、多年の労苦による貴重な資料たる「麻生路郎先生伝記資料」を単なる「山雨楼メモ」によつて処理した冒瀆と非礼について、ただわけもなく叩頭九拜をくりかえし罪の意識にさいなまれる想いで心からの謝罪の言葉を送りたい。

なお、この稿に対し、あと一回「路郎物語」の総括追補と脱落した挿話等について記してみた。御了承願いたい。（昭51・4・29）

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 桜井 千秀

まばたきの刹那にも読む風の向き

煩惱のひとつふたつは道連れに

富田林市 片岡智恵子

約束を破るソプラノからアルト

ヒロインは妻です出世ものがたり

弘前市 高橋 岳水

春を待つ心の隅の花図鑑

雪国の運命の雪を掻き老いる

大阪市 神夏磯典子

運だめし棒を一本立ててみる

死ぬるまで夫は男 妻おんな

西宮市 牧瀬磯喜子

蜩梅咲いて時は逆流して止まる

何人を見送っただろう冬木立

弘前市 高瀬 霜石

いいことをした日もちゃんと手を洗う

柊の木を植えて遺言状とする

和歌山市 木本 朱夏

春を待つ蝶を身内に飼っている

しろい白い闇を吐きだす雪おんな

松原市 玉置 重人

もともとは裸だ迷うことはない

ワンランク下げてゆつくり一幕め

尼崎市 春城武庫坊

安らぎの言葉のような日向はこ

枯葉ころころ心の隅に吹き溜る

京都市 都倉 求芽

充電の相手をいつも変えている

胸底に浮くもの沈むもの炎ゆるもの

東京都 やまぐち珠美

冬の藍 凍てつく海のまだ奥の

朝やけをみつめてひとに媚びぬ大

尼崎市 田辺 鹿太

天と地の落差を知っている椿

世間体ばかり気にするパンの耳

藤井寺市 太田扶美代

冬母すこし甘くて哀しくて

美しく別れたなんてきつと嘘

弘前市 相馬 銀波

平凡の自覚をさせるにぎりめし

哀悼の半旗無風の時がない

富田林市 池 森子

溺愛は硝子の皿の花サラダ

冬帽子目深チャペルのイヤリング

鳥取市 岸本 宏章

空っぽになるまで泣いて立ち直る

見たくない絵を見た渋谷六本木

海南市 三宅 保州

鳥取県 佐伯 やえ

句読点ごとに打ってふり向かぬ

三田市 北野 哲男

繰り言は止めよう梅がふくらんだ

香芝市 大内 朝子

わだかまりとけてストーンと落ちる肩

高槻市 乙倉 武史

ほほ笑んで許り遺影は語らない

弘前市 斉藤 蒔

合格の顔一階から降りてくる

弘前市 福士 慕情

コンパスの円を支える針の穴

弘前市 宮崎ヒサ子

認めればきつと水嵩増してくる

羽曳野市 酒井 一壺

言い訳は終着駅で考える

西宮市 西口いわゑ

隠しても尻尾が見えている喜劇

倉吉市 淡路ゆり子

コーヒーを少し残した無の時間

和歌山市 福井 桂香

菜の花の香に囲まれて立ちくらみ

西宮市 門谷たす子

ひとり言ばかりが増えて寒さ中

和歌山市 田中 みね

父の帯を解いたところで目が覚める

奈良市 乾 春雄

風の噂に胸のトレモロ鳴りやまず

倉吉市 山中 康子

顔色を見抜きその都度切り抜ける

池田市 栗田 久子
 哀愁のにじむ背中だ老いた背だ
 大和郡山市 坊農 柳弘
 紙風船 大正ロマンの数え唄
 鳥取県 西原 艶子
 これからは何の化身になるだろう
 姫路市 古川 奮水
 善人と言われネクタイ外せない
 東かがわ市 木村あきら
 人生の突つ支い棒は母だった
 大和高田市 鍛原 千里
 淋しいと言えうなずく冬の月
 今治市 塩路よしみ
 肩書はないが父の樹まぶしすぎ
 竹原市 正畑 半覚
 善人の座った椅子があたたかい
 京都府 丹後屋 肇
 鼻唄でつい深爪をしてしまふ
 米子市 白根 ふみ
 路の養生がされてまた巡り会ふ
 和歌山市 青枝 鉄治
 外堀を埋めてから練る善後策
 鳥取市 近藤 秋星
 元旦の計も抱負も無い父よ
 河内長野市 水谷 正子
 ヴィヴァルディの四季が流れる春バーゲン
 黒石市 相馬 一花
 油断なく対決をする雑煮餅
 和歌山市 古久保和子
 悪態を百ほど吐いて立ち直る

奈良県 渡辺 富子
 セコムして私を檻に閉じ込める
 富田県 大橋 鐘造
 さあ今だ今だと風が喉かける
 松原市 小池しげお
 税務署の倉庫に積んである尻尾
 和歌山市 武本 碧
 残り時間へ合わせて書く未来絵図
 弘前市 一戸 ツネ
 線香の灰の乱れは修羅の跡
 八尾市 高杉 千歩
 戦争の足音補聴器を外す
 尼崎市 春城 年代
 霜の径さくさく峠越えたつつけ
 藤井寺市 高田美代子
 熱爛がとろりと冬の匂いする
 和歌山市 楠見 章子
 肩籠があふれて嘘がうまくなり
 尼崎市 長浜 美龍
 リタイヤを口にするほど強くない
 大阪市 前 たもつ
 今日のことみんな許され日が暮れる
 鳥取市 徳田ひろこ
 溜息が解かしてしまふ窓の雪
 尼崎市 内田美也子
 舵とりが怪しくなつたひとりの旅
 四条畠市 吉岡 修
 九分九厘のチャンスが逃けた四捨五入
 鳥取県 石谷美恵子
 頼られて涙の混じる酒を呑む

枚方市 海老池 洋
 シナリオが狂う仮面の外せない
 日立市 加藤 権悟
 地吹雪や顎がしばれて喋れない
 寝屋川市 籠島 恵子
 しあわせは逆三角形の上にある
 愛媛県 中居 善信
 昼の月何の意欲も湧いてこぬ
 米子市 木村富美子
 ふるさとの駅がだまって待っている
 和歌山県 辻内 次根
 見下した記憶があつて自己嫌悪
 横浜市 金森 徳三
 休肝日五勺増やして米を研ぐ
 堺市 和田つづや
 離縁から喉が渴いて仕方ない
 米子市 林 瑞枝
 籠いっぱいの夢に向かつて花を撒く
 奈良市 米田 恭昌
 虎落笛あれば亡き父母の声
 和歌山市 上地登美代
 吹つ切れて新しい風動きたす
 羽曳野市 吉川 寿美
 白足袋の白よこの世は生き難し
 高槻市 田中 初恵
 ジャンヌ・ダルクになるには歳をとりすぎた
 岡山市 井上柳五郎
 再生紙過去はさっぱり捨てたはず
 愛媛県 黒田 茂代
 伸び過ぎた尻尾が邪魔になつてくる

有頂点の毬をそろそろしまわねば
森 西

吹田市 太田 昭

陰口が速達便で配られる

鳥取県 岩崎みさ江

寒の底で聴いてる春のピアノニシモ

岡山県 山本 玉恵

何も彼も煮詰めた母の落し蓋

鳥取市 夏目 一粋

なるようになるさにならぬから困る

和歌山市 松原 寿子

甘言に負けそう外は雪しきり

八尾市 井上 民

緩むたび結びなおした赤い糸

倉吉市 野口 節子

たとえばの話に柳眉逆立てる

高槻市 左右田泰雄

磐石の備えたじろぐことはない

箕面市 出口セツ子

笑うしか方法がない日々の鬱

八王子市 播本 充子

少しでも芯を外そう下り坂

鳥取市 武田 帆雀

二階建てベッド牀が効いている

堺市 志田 千代

御本尊は博物館におわします

大阪市 川原 章久

骨つばでボヤいて見ても聞えない

唐津市 宗 水笑

離婚歴ないを不思議な目で見られ

瀬戸際の恋とメールの乱れ打ち
唐津市 仁部 四郎

唐津市 久保 正剣

リモコンで手繰り寄せたいひとが居る

海南市 堂上 泰女

気遣いが過ぎて誤解を生むはめに

和歌山市 喜田 准一

切り札が張り切り過ぎた勇み足

鳥取県 上田 俊路

ガラスの靴を履いてきた初出社

松江市 安食 友子

空事のようなドラマを追うあたし

八尾市 宮崎シマ子

弾む春今なら何でも出来そうだ

滋賀県 中 宗明

悶々と悩む値打ちのある恋だ

堺市 矢倉 五月

泥縄の性分直らぬままに老い

西宮市 坪井 孝一

仕事場も形状記憶の僕である

弘前市 櫻庭 順風

買って出た演技で人事不省なり

和歌山県 中後 清史

遠き日の影を浮かばすフラフラ

美祿市 安平次弘道

安楽死まだ考えたことがない

今治市 野村 清美

貸し借りの無い友だから長続き

鳥取県 吉田孔美子

ベンチャーの羅列母校でありました

福袋とても大きな擬餌鉤だ
羽曳野市 徳山みつこ

橿原市 安土 理恵

コピーしておく背信の簡条書

米子市 中井 ゆき

もう一つホントがかける日記帳

寝屋川市 江口 度

約束を破って気つく薄い影

大阪市 三浦千津子

沈黙は金 脳回路充電中

大阪市 小泉ひさ乃

末席の思い届かぬ多数決

高知市 小川てるみ

企業戦士にさせてしまった都会の灯

砂川市 大橋 政良

丸出しの虚栄並んでいる墓石

鳥取県 土橋はるお

替え歌を唄い退屈しのぎする

札幌市 三浦 強一

朝日浴び融けた昨夜の蟬り

八尾市 山本 宏全

スローライフ空のまんまの冷蔵庫

八尾市 生嶋ますみ

都会という海に溺れた鳥です

大阪市 岩崎 公誠

甘言に揺れてチャンスが手から落ち

交野市 田岡 九好

古稀近くやと諸訳がわかりかけ

大阪市 澤田 和重

ひと騒ぎ起して愛を手に入れる

64

ろうが。

船頭へのめと秋葉へ上りしな

ハ 5

伊吹 賛。

鯉をくふ内供船でおつはしめ

傍 3

という句もある。

清・佐藤 賛。

499 大そうなうろくずを取る熊野うら

小栗 うろくずは魚の異称。(「日国」)

熊野浦は、紀州東西牟婁郡の辺を中心とする一帯の海面の称。即ち西は紀伊水道に至り、東は遠州灘と伊勢海の交界に接する一帯の呼称で、熊野灘、または三熊野浦などとも言われた。この海上は、有名な鯨の産地であった。

江戸時代、捕鯨の地として最も有名であったのは熊野地方である。秦の始皇帝時代に日本に到来した徐福が紀州熊野浦において捕鯨を行って以来、捕鯨業が日本各地に広がったという伝説がある由だが、熊野浦の捕鯨が有名であった証左であらう。

主題句は、熊野浦の捕鯨を「大きな魚を捕る」と表現しただけの句と思う。因みに『和漢三才図会』には「鯨は海中の大魚である」とあり、哺乳類とは認識されていなかったようであるから、「大きな魚」という表現も特

に含意のあるものではなく、そのままの表現であらう。

くまのじの目からまろろハ小鮒じやこ

宝三三三

岸打ち浪や三熊野のくしらの尻 一〇四九

橋本 賛。今でも太地が有名。

清・佐藤 賛。

500 音トのせぬとらを此頃和尚うち

小栗 どちらを打つは放蕩をする。放蕩をして財産を使い果たす。(江戸語の辞典)

放蕩の意の「どら」と、僧侶が法要などで使う「銅鑼」を掛けた趣向。和尚は法要であるが、この頃は音のしない(他人に知られないよう秘かに、の意もあらう)「どら」を打っているという意。

辞書によれば、もともと「どらを打つ」は「金戸く」を「鉦撞く」にもじり「銅鑼(鉦)打つ」としゃれたものとの俗説ありと。

音トのせぬやうに和尚はどらを打つ

安八智 6

本寺からた、き出されるどら和尚

清・佐藤 賛。

一〇五三

501 大江山出見せのていしゆふりよのけが

小栗 茨木童子の句。

茨木童子は大江山の酒吞童子の配下で、羅生門で渡辺綱に片腕を切り取られたが、後に伯母に化けてその片腕を取り返したという伝説がある。

主題句はこの伝説を題材にしたもので、羅生門を大江山の「出店」、茨木童子を出店の「亭主」とし、綱に片腕を切り落とされたことを「不慮の怪我」といったもの。

いはらきも見たやうたとハ思へとも

拾五 17

清・佐藤 賛。

502 しりで穴上手に明て人を入れ

小栗 芝居小屋の切落としなど混雑している場所の光景だろう。身動きもならないような所でも、尻をぐいぐいと動かして人が入れるだけの隙間を上手に作り、連れる無理矢理入れるというふいふことだと思ふ。

むりやりに尻でもみこむきりおとし

清・佐藤 賛。

八八 18

荀香のむ

藤田 泰子選

クスクスと笑って芽吹くことにする
約束をみんな忘れてしまいたし
龍宮城へまたもどりたいたい太郎さん
まあイカ買い被られておこうかな
音を無くして深々と手話に入る
忘れられぬことは書けないのも日記
肌色の人形抱けば温もれる
以心伝心それで会話がなにか
除夜の鐘子等はいくさの中にある
糸車忘れ上手になつてゐる
神様でさえも私を裏切つた
生きるとは有情無情の塩加減
時間ください冷凍も解凍も
身の底へ修二会の火の粉浴びて春
ありがとう何度聞いても美しい
アレルギー性鼻炎は春の磁気風
ハーブティー私の闇が溶けてくる
キンカンの苦さトラウマ逆撫でる
鉛筆を如意棒にして運つかむ

和歌山市 古久保和子
藤井寺市 高田美代子
八尾市 宮崎シマ子
寝屋川市 籠島 恵子
富田林市 池 森子
堺市 志田 千代
藤井寺市 鴨谷瑠美子
大阪市 古今堂蕉子
西宮市 牧瀬富喜子
尼崎市 長浜 美籠
藤井寺市 太田扶美代
弘前市 一戸 ツネ
大阪市 川久保睦子
奈良県 渡辺 富子
八尾市 生嶋ますみ
鳥取県 西原 艶子
富田林市 中井 アキ
橿原市 安土 理恵
吹田市 大谷 篤子

ペン先で涸れた泉を掘り起こす
ストライクゾーンを広く持つて生き
やっと手に入れた無職を翔んで
墨絵はかしの心にすこし朱を足そう
年七十 体八十 気は二十
笑うより見とれてましたにらめっこ
過保護なる愛は結露というかたち
よその地震見ている活断層の上で
にぎりめし今朝の女の喜のかたち
残照へプラス志向の羽開く
追い焚きをせねばまだまだ呆けられぬ
風船も冒険したい春の海
捨て切れぬ欲に命が活気づく
胸の内紙風船に閉じ込める
ひそひそと輪廻の声か春の森
途中下車ひとりぼっちへ風やさし
三猿はとでもできない淋しくて
脱ぎかけた殻からとんと出られない
オアシスはやっぱり我が家旅帰り
夜の明けぬ前にチャンネル吉にする
少しロマンチックに推敲する去年
落ち込めば月が笑った水溜り
幸せは優しい嘘を信じ込む
初恋がきれいに浮かぶ里の川
音ふっと止まる都会のどまん中

鳥取県 岩崎みさ江
箕面市 出口セツ子
鳥取市 永原 昌鼓
西宮市 門谷たず子
和歌山市 山口三千子
堺市 矢倉 五月
和歌山市 福井 桂香
熊本市 永田 俊子
東京都 やまぐち珠美
和歌山市 武本 碧
和歌山市 楠見 章子
和歌山市 松原 寿子
香芝市 大内 朝子
東大阪市 中岡 妙
大阪市 津村志華子
今治市 塩路よしみ
鳥取県 田村さみ子
神戸市 田中 章子
尼崎市 内田美也子
鳥取市 徳田ひろこ
米子市 林 瑞枝
鳥取市 福田 登美
今治市 野村 清美
和歌山市 松尾 和香
寝屋川市 森 茜

愛と憎 詰めた鞆を持つている

乾杯の目にはなかった内助の座

おろろと重荷にならず咲き切ろう

反戦という軸いよはすすまい

出発へ不安抱えて自衛隊

いい訳を背負いイラクへ日章旗

子の部屋で白紙がムザと捨てられる

ゴミ増えて日本が破裂しそうだね

分相応 歳相応の見積書

木枯らしが一入酒をうまくする

ご近所の不幸に自分の歳おもい

ご命日表と兵隊聞かせましよ

アイシヤドウ眼の神経が壊れぬか

退屈やオレオレ詐欺でも来んかいな

はつきりと映り過ぎますハイビジョン

百円の紅がわたしを引き立てる

百均で千円買つて満ち足りる

祖母の家 年玉取りに寄つただけ

延び延びの返事を書いてスツとした

賀状にはそれぞれ浮かぶ顔がある

チクチクと言葉の先が針のよう

音程にクレームが付く子守歌

三ヶ日までも楽しい皺増える

カラオケで大声出して蘇る

本当は戻りたくないブーメラン

藤井寺市 若松 雅枝

鳥取県 吉田孔美子

堺市 西村りつえ

富田林市 中崎 深雪

愛媛県 花岡 順子

西宮市 緒方美津子

橿原市 居谷真理子

大阪府 野田 栄呼

大阪府 津守 柳伸

西宮市 西口いわゑ

大阪市 町田 達子

大阪市 星野さかり

東京都 岸野あやめ

豊中市 安藤寿美子

富田林市 古田 千華

鳥取県 佐伯 やえ

神夏磯典子

米子市 小塩智加恵

三田市 石原 歳子

豊中市 櫻谷 郁子

生駒市 飛水ふりこ

八王子市 播本 充子

東大阪市 北村 賢子

和歌山市 坂部かずみ

羽曳野市 吉川 寿美

いざの時やはり他人と思ひ知る

串柿を食べているのはわたしだけ

木守柿 今日風花がお見舞いに

咳三つ早く眠れとせかされる

信じたり諦めたり薬のむ

三人の女も黙す冬の虹

バッチワーク思い出たぐ残り布

手の平で時雨見ている雨宿り

空っぽの脳にベンペン草生える

遠くから輪を眺めては焦らない

再診のおまけ余病また一つ

留守電の返事が欲しいそう思う

冬至にも探つてもらえぬ袖子悲し

よく拝む割には運のない女

苦と楽は交互にやってくるらしい

いくつ坂こえても次が待っている

和子さんの句——春が来るのが嬉しくて独り笑いをしよう。

辛かった冬ともおさらばですね。美代子さんの句——つい約束してしまっただけ、だんだん重くなる約束、忘れられるものなら

忘れた。責任感が重くのしかかります。作者の生真面目な人

間像が浮かんでくるようです。シマ子さんの句——女性からみた

男性の句が少ない中、作者はいつも温かでユーモラスに男性を

見つめられておられます。多くの太郎さんが見破られたか!!と

思っておられるのでは……。恵子さんの句——母はいつでも何を

していても「天知る地知る人を知る」だから、人が見ていなく

ても裏表なく人とは接しなさい、と言って育ててくれました。

買い被りでなく人の目は正直なのだと思ひます。

愛媛県 黒田 茂代

羽曳野市 徳山みつこ

和歌山県 森下 順子

神戸市 山田婦美子

大和高田市 鍛原 千里

出雲市 園山多賀子

大阪府 米澤 徹子

寝屋川市 坂上 高栄

倉吉市 野口 節子

米子市 白根 ふみ

寝屋川市 太田とし子

和歌山市 田中 みね

大阪府 小栢こずえ

三田市 久保田千代

芦屋市 黒田 能子

米子市 青戸 田鶴

ルーズ

黒田 能子選



ルーズをうまく活かしたなだめ役 (備) 洋
 ルーズでも何故かみんなに愛される 歳子
 ルーズだが年賀さつちり書いてくる 一風
 ゴムひもに慣れ生活もルーズなり (田) 章子
 いつまでもだらだら終わらない会議 玄也
 満腹になるとルーズになる一志 俊子
 水道栓締めて下さいもうちよつと 像山
 表彰式に以下同文というルーズ (岡) 幸生
 それなりのモラルは持っているルーズ (花) 順子
 約束はルーズなれども憎めない 松煙子
 長年の慣れがルーズにさせている ちかし
 太つてるだけでルーズと見られてる 美明
 ポケットにルーズな虫がもぐりこむ 紫晃
 今日もまた破る誓いを立てて出る (南) 正和
 アフリカを旅する時はルーズ良し 蕉子
 Gパンはルーズにはかぬ西部劇 (堀) 正和
 ルーズなど縁ない父の道具箱 寿美
 倦怠期愛もルーズになりました 遠野
 おおらかに加齢ルーズな胴まわり 理恵
 ハンドルの遊びぐらゐのルーズです 登美代
 少しルーズな蓋から秘密漏れてくる 茂代
 ルーズさを少し欲しいと古時計 千里

少しルーズに生きてみようよ日向ぼこ (伏) 五月
 ルーズでも父の机は触らせず 庸佑
 円満はルーズな人になっておく 典子
 子育てにルーズ許せば付けがくる (衛) 美津子
 少し甘えて少しのんきというルーズ 扶美代
 ルーズではないのんびりしてるだけ 千枝子
 ほどほどにルーズな部屋がくつろげる 泰子
 ルーズやないスロウライフで生きてる 恭昌
 生れつきルーズな人ですすみません 朝子
 日曜の時計朝からマイペース 美代子
 校門を出ると若さとなるルーズ 可住
 ワンルームルーズな人の住みごこち たもつ
 ルーズさも母ゆずりなり鍋の底 たず子
 門限が少しルーズになって恋 正雄
 老いぬればルーズな暮し追うている シマ子
 佳
 鍋一杯ルーズ煮こんでから寝よう 雄々
 境界線ルーズになって満つ花野 (渡) 富子
 終章へ少しルーズな絵が丸い 碧
 歯車の少しのルーズよく滑る 孝一
 歳月の流れにルーズから脱皮 弥生
 人
 体内の時計ルーズに鳴っている 富喜子
 地
 ネジ一本足りないくらいちようどいい 霜石
 天
 ルーズな癖つけたための句読点 吉田あずき
 軸
 時々ルーズになってリフレッシュ 時々

墨

山本 益子選



墨つけの野暮な遊びはもうごめん 敬之介
 薄墨の筆百円で売っている (花) 順子
 墨と筆先生よりは上等で 度
 書き初めの墨をすったが何書こう 弘子
 お墨付き仲人口に騙される 次男
 墨もすれた想いを何と残そうか 彩子
 筆ペンに取られ墨することもうせ 美也子
 枠外にはみ出す墨を褒めている 善信
 お墨付き期待に応え意地を張る 檳榔樹
 達筆とは言えぬが温い墨の文字 たもつ
 墨汁になじまぬ紙にあやつられ 孝男
 筆なめるくせが鼻にも墨をのせ 玉恵
 ほんのりと色気が墨絵から浮かぶ 一風
 自分史に墨で消したい個所があり 圭一郎
 墨糸を打って大小屋建つ頑固 登美代
 秀吉の墨絵蔵から出てニュース いさお
 合併論薄墨色の長談義 一粋
 摩る墨の香りに凍と背を正す 水笑
 夢いっぱい含んだ筆に踊る墨 昌鼓
 政治家の墨付けこっこおもしろい 黒兎
 土壇場に追われたたこは墨を吐く 帆雀
 奮水

女白態深さが違う墨の彩

水墨の枝にちよこんと初書

追っかけ合い墨つけあつた恋はじめ

写経まえ心無にして墨をする

墨染めの喪服ゾクツとする色気

一徹で曲がらぬ奴とお墨付き

釣り上げた烏賊の墨吹き命乞い

寂聴の法話墨染熱っぽい

薄墨の己明けの文にある決意

お墨付き貰つてからの怠け癖

薄墨がとてものはかない計の知らせ

手漉き和紙待つてましたと墨を吸う

命名へ墨をたつぷり付けて書く

生かされて写経の墨を磨る悟り

うす墨が涙で滲む喪の便り

佳

墨吐いてボクもストレスから逃げる

パソコンに負けぬと墨字凜と生き

書初めの墨は決意の胸で磨る

硯と墨の仲でも時にきな臭い

永遠の別れへ墨を薄く磨る

人

墨を磨る心の霧が晴れるまで

地

三下り半を書こうと墨を磨っている

天

濃淡の墨の乱れに出る心

軸

墨絵の如き雲海出合う峠道

ツネ

注 湖

章 司

(編) 洋

清 史

花 匠

妻 子

(伊) 玲 子

玄 也

朝 子

鉄 治

宏 章

正 剣

たず子

みつこ

深 雪

岳 水

雄 々

保 州

充 子

美 代 子

出口セツ子

みえみえ

北野 哲男選



若造りしても座席を譲られる

下手くそも個性豊かとうまく褒め

みえみえを承知で歩く外はなし

勘定になるとトイレへ行く男

みえみえのジョークで励ましてあげる

堂々とゴマする男かなわなれ

もう一寸上手に嘘を吐きなはれ

魂胆はみえみえ軽く受け流す

みえみえの人数合わせの誘いあり

三度目の閉店セールの寄らぬ客

みえみえの言葉もつける接待費

みえみえを見て見ぬふりも秘書の役

みえみえのうそも案外長続き

みえみえの嘘許される万愚節

みえみえの嘘が包んであるラッパ

みえみえの嘘が乗ってる白い皿

みえみえの嘘を喜ぶ老母となり

みえみえのお世辞相槌して済ませ

みえみえのお世辞でもいい若がえる

みえみえのお世辞に渋いお茶入れる

みえみえの世辞が驕りに分らない

みえみえのお世辞うれしい気の弱り

みえみえの世辞が驕りに分らない

晴 翠

九 好

美 明

扶美代

みつこ

孝 男

能 子

千 華

たもつ

遠 野

可 住

寿 海

正 剣

茂 代

碧 子

(緒) 美津子

愛 論

章 子

德 三

典 子

喜 子

喜 子

みえみえの世辞もこの世の潤滑油

毒入りと知つてまんじゅう食べている

みえみえの足し算上手い微笑たな

目端利くおとこが貰う御盃

魂胆があるな俄かに丁寧語

玄關でまず奥様を褒め殺す

木久蔵のオチが客席から届き

みえみえの手を打つてくるなめている

子の手品みえみえがまた面白い

みえみえの言訳一度だけ許す

みえみえの義理チョコひとつアテにする

みえみえのよいしよ麻薬のように効き

ママさんの狙い知つて足が向く

拍手する顔おれみんな無責任

ジョンニルの焦りみえみえ核カード

佳

土下座したあとは埃を払つて

みえみえの嘘から恋は始まった

デバ地下を盛つてあるなと夫の目

みえみえの嘘は大きいほどがよい

彼という姉にやさしく叱られる

人

恋は盲目あのみえみえを見抜けない

地

みえみえのよいしよもあつて世が回る

天

その案は僕も前から好きでした

軸

聞かないで欲しいと溜息ついて見せ

あやめ

強 一

宏 臣

高 明

一 花

慕 情

修 子

正 雄

(伊) 玲 子

圭 二

四 郎

孝 一

風 視

勝 一

保 州

主 一郎

(矢) 五 月

宏 章

棲 世

富 喜 子

ちかし

片 山 忠

初歩教室

題 — まさか
三宅保州

今月の題の「まさか」は、文法上は副詞です。副詞とは、主に用言（動詞、形容詞など）を修飾するものです。例えば、いつか、いろいろ、うっかり、がぶり、きつと、ころころ、じわじわ、ゆらゆら、やがて、まもなく、まだ、ぼつかり等々、他の言葉を修飾したり強調したりする品詞ですから、その特性を活かすと作句に活用できます。

【同想句】

「宝くじ等」を詠んだ同想句
宝くじまさかと思いつつも買う
年の暮れまさかと期待宝くじ
皆が皆まさかを信じジャンボ買う
あみだくじまさか私に当たるとは
夢でしたまさかまさかの宝くじ
まさかという運を信じて宝くじ
ジャンボ買いまさかの夢の皮算用
ジャンボくじ思わず眼鏡かけ直す
宝くじまさか自分に当たるとは

登志子 宏子 雅明 アヤ子 和子 こずえ 英旺 洋介 フジ

ジャンボくじ当たり寝汗を掻いている
同想句の中では抜き出ています。

【急な計報】を詠んだ同想句

昨日元氣今日はまさかの友の死去
健康を昨夜威張った友が逝き
昨日飲んだ友の計報に天仰ぐ
元旦にまさかの友の計報聞く
年の暮れまさかと思う人が逝く
旧友のまさかの計報まだ七十
あの人がまさか僕より先に逝き
「物忘れ」を詠んだほとんど同じ句
物忘れまさか自身に起こることは
もの忘れまさか私の事になる

【添削句・批評句】

原「あの人が」三面記事のねたになる 淳司
括弧、記号等は使わなくてもわかるように
原捕らえた空き巣まさかの顔見知り 侑子
「盗人を捕らえてみれば我が子なり」的
原まさか君と驚いた振りしてみせる 雅明
まさかの原因を詠んでください。
原神懸かりまさかの逆転ファン酔う 英旺
説明・報告句。あなたの思いを入れたい。
原街角でまさか逢うとは運の良さ アヤ子
運の良さは詠まずに余韻を持たせては。
添街角でまさかあなたに逢えるとは
原二十年まさか電話があらうとは 志津子

何が二十年ですか。オレオレ電話ですか。
原古道具掘り出し物が文化財 節子
添文化財級の鑑定古道具

原まさかねそんなことはつゆ知らず トミノ
上四字。具体性がほしい。

原あの話まさか嘘ではあるまいな 敬之介
原この品はまさかのときに使うのだ 敬之介
原まさかには信じられんが先をゆく 信翁
三句とも具体性に欠けるから訴えが弱い。
原保険屋はまさかを種に荒稼ぎ 稔
荒稼ぎは悪徳商法的すぎませんか。

原退院日弾みまさかの鼠捕り 実千代
添退院日つい飛ばしすぎねずみ捕り

原景気良い会社倒産するなんて 郁代
添景気良く見えた倒産するなんて

原アメリカまさか他にいないよ 道子
句意が見えにくい。BSEのことですか。

原置き忘れまさかのこへあらわれる 映子
添まさかと思うところにあつた置き忘れ
原義理チョコにまさかこんなにときめいて

添義理チョコもあの人からときめいて 敏子
原やりくりしまさかに備え預ける 孝明

説明句で、常識的すぎませんか、せめて
添貯えを使うまさかが多すぎる
原まさかだか戸締まりしてる過疎のムラ 孝明

添村おこししてから戸締まりをしだす

原へそくりはまさかの時の防波堤 邦柳

立派な標語になつてしましました。

原まさかの時出すへそくりも目減りする 満子

原まさか我が子が思ひは同じ親心 満子

原へそくりはまさかのためにためている 信子

添へそくりはまさかのときに消えている 信子

原ケータイはまさかのときに役に立つ 信子

添ケータイはまさかのときに切れている

四句とも説明調で、真面目、常識的すぎます。

佳い川柳の条件に意外性、機知もあり。

原裏切りがまさかあの人憎めない タカ子

添裏切りと未だに信じられぬ人 タカ子

原まさかこの噂話と信じたい タカ子

添この噂話にすぎぬと信じたい 時雄

原ライバルがまさかそこまで手を打つか 時雄

添味方いつまでも味方と限らない 康子

原残り香にまさかまさかの胸騒ぎ 康子

添残り香に女の勘の胸騒ぎ

【少し工夫すれば佳くなる句】

デジタル放送まさかたとは思わぬが 益子

まさかの坂越えた男の広い背な イセ

「まさかの坂」に一工夫ほしい。

人生はまさかまさかで年が暮れ トキ

「人生は」が大上段すぎませんか。

原まさか男が女だと気がつかぬ 利子

添女より女に見える名女形

十白玉まさかに備え持ち歩く 真一

十白玉よりも通帳、全財産などが川柳的

原領いてくれたまさかのプロポーズ 准一

添プロポーズまさかOKくれるとは

原バカ受けしまさか嘘とは言えぬ嘘 清

添バカ受けし今さら嘘だとも言えず

遅い子にまさかと思う救急車 清

「救急車うちの子供はうちにいる 鞍馬」

という有名な句が浮かびます。

母の舟まさかに備える補強 美恵子

【補強】に一工夫ほしいもの。

原此所という時にまさかのエラー出る 武

ちよつと説明句。視点を變えて例えば

添いざというときには消えている味方

信じられないまさかのことが多すぎる 円女

そのことを具体的に詠むと佳くなります。

原無信心まさかの時の神頼み 政子

添無信心まさかのときは神頼み

大抵はまさかの時に出る本音 千華

解説調を除くと佳くなります。

守りしてた孫目の前で見失う 照彦

【佳句】

お年賀に見知らぬ美女を連れて来る つよし

俺の票当選決めた一票差 章司

口達者まさかの時に役立たず 淳司

指切りをまさか八十路に引きずって 智加恵

へそくりの出番がやって来たまさか 良一

まさかとは思うが妻の厚化粧 いさお

救急車まさか自分が乗ることに

世の中はまさかがあつて面白い 弘子

友だちの貌でまさかのブルータス 弘之

それからのまさかに揺れる再検査 初恵

急逝の叔母から届く年賀状 好

まさかの坂で出逢つた二人結ばれる 像山

老いてきてまさか母似の道標 栄子

糸車まさかの時も回つて 栄子

【今月の推せん句】

鍵掛けたつもりのドアがすつと開く 春代

誰にでも経験があり作れそうなのに気付か

ない。軽妙でミステリアスなコント。

よく見れば敵のベンチに妻がいる 正和

クスツとする川柳の醍醐味。含蓄もある。

神様の仕業まさかの夫婦です 幸

「神様の仕業「まさかの夫婦」の比喩が

効果的。アイロニー（風刺、逆説）拔群。

【私の句】

新聞にそんなまさかが載っている

非常口まさかが無いと言えますか

【番外II楽屋吟】

僕の句が天位に座るはずがない 淳司

あんな句がまさか天まで抜けるとは いさお

秀句鑑賞

同人吟 江口 度

— 2月号から

私にとって川柳とは、麻生路郎師の言われ

た「人間へ締め木をあてて絞るといふような悪汁が流れ出て、後には朗らかな脱俗をした人間が残る。その締め木の役を、川柳が果たしている人間陶冶の詩」と思っている。

穿ちにもまた風刺に通ずる批判的穿ちだけでなく、ユーモア的穿ち、叙情的感覺的穿ち、軽みの穿ちなどがあると言われている。私もこれ等を川柳塔の基本姿勢と思っている。

はたと膝を打つ共感度の高い句、詠む人の温かさ、明るさ、向上心のある句、詠んだ人の心がひしひしと迫ってくる本音の句を中心に選ばせて頂く。

世の中暗いニユース、異常気象、特異な病氣等次々と発見されているが、この申年にはだんだん明るい時代となるよう期待している。同人句を繰返し読み共感した句をチェックし、その中から更に吟味しこれだと思ふ句を二十一句選出してみた。

作者諸兄の意に添わない評があれば寛容のほどを。

卒寿過ぎきどもニユースを見て学ぶ

岡井 やすお

非常に共感度の高い句である。この番組はわかりにくいカタカナ語や、政治のわからない新聞語を良くわかるように説明している。学ぶという前向きな姿勢がよい。

松茸を買った記念に写真撮る

米田 恭昌

明るい庶民の家庭を垣間覗かせてくれ、ほは笑みが……。我が家では君が代を唄いました。大きなたらば蟹を買っても記念写真を撮りましょう。ユーモア的穿ちと思う。

地域での掃除顔触れ決まってる

飛永 ふりこ

はじめの頃は沢山の人が集まったが、しばらくしてからはボランティアの顔ぶれは決まってくる。詠む人の本音が出ていて良い。

威勢良い唖呵を切った後始末

大内 朝子

そして、ドアをパタンと閉めて出て来たが、誰も付いてこない。しまった！

これほどに金たまればとゴミ袋

上地 登美代

何時もゴミを一ぱい出している貴女。ゴミはすぐ溜まるがお金はなかなか貯まりませんね。私も時どきこのように思う。庶民の心の動きが見事に出ている。

落ち葉掃くシャンソンどころではないぞ

古久保 和子

山ほど積み重なった落葉の様子。舗道に散る二、三枚の落葉なら、シャンソンが一番似合っているように思う。「シャンソンどころではないぞ」がうまい。

占いを見て宝くじ買いく

西山 幸

当たりましたか？ 私も占いの勝負このところが「◎」の時、買いに行つて当たりました。占いを見て、がよい見付けで詠む人の心の動きが良く現れている。

共感の多い句と思う。

失点を励みに変えている若さ

森井 菁居

あなたは若い。先に点を取られてもとり返すぞ、という意気込みがひしひしと感じとれる。見ているのではなくて、作者自身が奮いたつてその気になっている姿を思う。向上心のある句。

不器用な生き方もよし汗光る

時 広 一 路

お金をうまく遣って出世する人が多いのに、真面目にこつこつと働く作者、「汗光る」の汗はすばらしい汗です。人の嫌がる仕事に精出している貴方にとつての汗は、何にも優る貴い汗です。いま生きていることを喜びに人生を楽しみましょう。

顔いたばかりに貧乏くじを引き

樋 口 輝 夫

貴方はすぐ顔いてしまふ癖があるのでしょ。よく考えてから顔くことにしましょう。

古伊万里の皿でふく刺し菊の花

山 本 玲 子

古伊万里の皿に並べられたふく刺しに透く金欄手の絵、主婦ならではの喜び。

三国志まさか漫画で読もうとは

木 村 富美子

「まさか漫画で」がいい見付けです。私も般若心経を漫画で覚えた。近頃は漫画で全て覚えらる時代かも。

消したいがズームアップで来る記憶

中 澤 伽 羅

ズームアップが良い表現です。良く消える消しゴムがあればいいのにね。私にも嫌な記憶があります。共感する人が多い句。

デジタルテレビ置いてきぼりにされそうだ

前 たもつ

年寄りには今のテレビで充分。デジタル用は簡単に手が出ない。その裏では何とか買うてみたいと貯金をはじめたのではないか。作者の気持が手にとるように判る。

生きるとやつづく思うゴミの嵩

海老池 洋

よくもこんなにゴミを溜めたものだ。死ぬまでにはあの丘の高さ位まで捨てるのではないか。生きるにゴミの嵩が面白い見付けです。何とかゴミの量を減らす努力を。

ど忘れを思い出してるアカサタナ

小 池 しげお

共感度の非常に高い句です。私もポインセチアが思い出せず、バビブペボまできてやつと出たことを思い出す。指繰って数えている様子が目に浮ぶ。

人のやるパソコン出来ないはずがない

内 海 幸 生

前向きに生活をしようという気持が素直に出ていて好きな句。

パソコンも英語もワープロも努力をすればベテランになれる。きつとなれる。

他人がやれるものなら貴方も私もお互いに頑張ります。

流し目でノックしてみる彼の胸

井 上 富 子

いきなりキスの返事が返ってきたりして。「流し目でノック」がうまい表現、女の気持がひしと胸に伝わってくる。流し目と彼の胸が効き合い一点の隙もなく、この上なくうまく纏まっている。

あしたつく嘘をとろとろ煮ています

山 本 義 子

とろとろ煮るが出色の表現である。一度嘘をつく、その嘘がばれないように、とまたまた嘘を重ねる。ああ言おうこ言おうと悩みながらじつくりと考えている女心。よい考えは煮つまりましたか。

分けるものなくところを差しあげる

吉 岡 きみえ

豊かではないが明るい暮しを想像する。たとえ遺産はなくても、心優しいお母さんのまごころは尊いものです。風樹の嘆きならぬよう日々を大切に。

へたくそな字でも手書きと決めている

奥 田 保 子

金釘流でも自筆のものは、受取るほうには嬉しいもので温さを感じます。ICの時代に取えて手書を選ぶことに決めたあなたに、心からの拍手を送ります。

本社 二月句会

二月六日(金) 午後一時
ア ウ イ ー ナ 大阪

立春は過ぎたもののまだ風が冷たい中、115名の参加を得て2月句会は、にぎやかに開催された。

はじめに、司会から2月28日東京で行われる川柳塔かんと(仮称)発会句会への参加呼びかけがあった。

お話は川端一步氏。受付で配られたプリントを元に大阪市内の史跡の紹介をした。大阪の都心にも沢山の史跡があり、古いお地蔵さんや屋根瓦一枚にも歴史があるという。大阪市は昭和34年から30年間にわたり、毎年数箇所ずつ選んで、現在12箇所の史跡を指定し、顕彰碑を建てている。氏は後藤仁郎氏編纂の『歴史の散歩道』を片手に、史跡、句碑を尋ね歩いていと語った。

初出席は近藤正(大阪市) 菱木誠(王子町) 碓氷祥昭(枚方市) の三氏。

月間賞は太田扶美代さん(藤井寺市)に輝く。
(司会 玄也) (記名 月子・真理子)
(受付 朋月・舞夢) (清記 義)

席題「粋」

中井 アキ選

粋筋は姿勢が違う目が違う
パイパイと粋な別れをした未練
デジタル化粋はどこかに投棄され
バラ一本粋な男のプロポーズ
肩書を外して習う粋なこと
明らかで粋なばあちゃん見習おう
目に見えぬところへ投資の粋な人
粋に生きた誇りはもっている
粋がつてみても案山子は案山子なり
粋な人あわてて椅子に座らない
着こなしで妻にまかせているという
粋な人箸の置き方までちがう
煩惱が邪魔して粋にまだなれぬ
まだ亡父の名が幅きかす茶屋遊び
粋な妻財布にお金入れてある
生つ粋の和歌山弁が通じない
黙ってて会計済ます粋なひと
道頓堀粋と言われた過去を持ち
粋人と言われるまでに涙あり
松園の画集に拾う江戸の粋
髪染めの主義小粋な編がすり
粋筋と間違えられたのが自慢
たこ焼きが好きで生粋江戸生れ
逢いに行く斜にかぶった春帽子
ユニクロも粋に着こなす老夫婦
襟足へ風花舞わせしのが逢う
大阪の粋は河内で生きている

蕉子 朝子 公誠 柳弘 かりん 弘風 いわゑ 光久 恵子 扶美代 楓楽 五月 舞夢 英子 睦子 千恵子 淳司 舞夢 泰子 修 欣子 みつ子 美明 富子 菜月

粋筋が現れてきた遺産分け
両成敗粋な裁きと言われても
遺産みな寄付しておいた粋な人
渋くつて粋な男を捜してる
酒の瓶粋な裁きをしてくれる
佳
しぶちゃんが粋なことすりや雨になり
粋に着て今日は正座をくずせない
物欲をサリ捨てる粋な人
春雨に濡れて行くほど粋でなし
粋を通してまた空腹のまま帰る
人
抜粋のページに火の鳥を放つ
さりげなく薔薇一本を贈られる
天
遊び上手で気持ちと金の切れがいい
見ぬ振りを装う粋な風がある
軸
兼題「囀る」 太田扶美代選
緊張の真つ只中で腹が鳴る
土鈴ふる最北端の海が鳴る
自衛隊矢張りラッパに送られる
主婦の顔してキッチン電子音
ビーポーが今日の所はうちじゃない
有頂天胸の鼓動が鳴りやまぬ
落語家の酒飲む仕草にのどが鳴る
バチンコ屋財布を狙うマーチ鳴る

朋月 千代 深雪 朝子 いわゑ 月子 月子 月子 深雪 美代子 ダン吉 森子 美代子 森子 天 五月 舞夢 英子 睦子 千恵子 淳司 舞夢 泰子 修 欣子 みつ子 美明 富子 菜月 公誠 睦子 寿美 九好 西 利昭 伽羅 美子 伽羅 公誠

海鳴りを私と聞いてくれた恋

戦いを憎む春雷鳴りやまず

溺愛の親に聞こえぬ子の悲鳴

傷ついたわたしたちを包むオルゴール

君と目が合った時に鐘が鳴るのです

風鳴いているのですし飲んで寝る

もう一度逢えば鳴るかも愛の鈴

誕生日また警鐘が鳴っている

娑婆にいる人に彼岸の鐘が鳴る

携帯もサイフも鍵も鈴だらけ

鐘が鳴るもう戦などやめなさい

コマシヤル好きで止まった子の喧嘩

自転車ベルを小さくすみません

取りあえず手の鳴る方へ行ってみる

隅っこで黙る鳴らした人らしい

第四コーナー人生ゲーム鐘が鳴り

おばあちゃんが動くといつも鈴が鳴る

遙か彼方でわたしたちを諭す亡母の鈴

雷を鳴したこともある昔

リストラを知らず目覚し鳴り続け

耳鳴りはきつと地球のうめき声

玄関がうぐいす張りになってきた

警鐘を鳴らす少年Aのメモ

電子レンジのチンに返事をして独り

住

サイレンの鳴らぬ静かな日が欲しい

鳴り止まぬ拍手と闇のざわめきと

厄落し日がな一日鈴が鳴る

笑ったらカタカタと鳴る冬の椅子

アキ

富子

遠野

美代子

天笑

月子

鐘造

泰子

螢

あやめ

ダン吉

英子

恵子

朝子

ダン吉

天笑

ばつは

いわゑ

鐘造

遠野

たもつ

つづや

祥昭

泰子

光久

森子

章久

美代子

どちらへ先に出ようチャイムと電話ベル

人

時々は共鳴出来てまだ夫婦

地

若者を叩くと切れる音がする

天

真実一路心の奥で鈴が鳴る

軸

笛太鼓鳴らし老後がやってくる

兼題「ラーメン」 坊農 柳弘選

君とならカップ麺でも蜜の味

お湯だけで出来るラーメン食べ馴れる

カップ麺ロケット砲とイラク行き

ラーメンの汁にイラクが浮き沈む

カップ麺吸って妻の帰り待つ

まだ妻と和解できないカップ麺

カップラーメンまさかの話する炬燵

カップラーメン主婦のプライド足している

三分間待たばよいのだ慌てな

チキン麺我が青春の味である

ラーメンをすする片手でメール打つ

凝り性の舌でラーメン評論家

ラーメン横丁一番長い列につく

並んでまで食べるラーメンこれかいな

ラーメンの湯気に晒している素顔

三分間待つともどかし腹の虫

熱々のラーメン肩の力抜く

ラーメンすすりひと休みする口喧嘩

ラーメンの湯気の向うも笑ってる

吉野家の横のラーメン屋に入る

ラーメンをすする生きてるって感じ

たかがラーメンさほどのぞみで博多まで

酔い醒めに仏に逢ったラーメン屋

チャルメラへ下駄つつかけた日の屋台

チャルメラの音に惹かれて丑の刻

別姓の二人がすする夜なきソバ

失職の胃の腑に沁みる夜鳴きそば

大阪に大阪ラーメンない不思議

歌舞伎町へ浪華ラーメン殴り込み

新地裏美人と会えるラーメン屋

ツウを相手に講釈長いラーメン屋

住

チャシューが薄い厚いで揉めている

具は高級たかがラーメンでもラーメン

はやふたりラーメンだけで済ます仲

恋人と食べるとラーメンは元氣

ラーメンに力を借りる試験の夜

人

ラーメンをおごつただけの恋でした

地

チャシューが一枚多い蠟細工

天

ラーメンの買い置きしとく家事嫌い

軸

ラーメンに約束があるはしこ酒

一風

淳司

葉

天笑

朱夏

たもつ

茜

正

千代

富美子

とし子

たもつ

美明

章久

美龍

きらり

はじめ

美子

みつ子

朱夏

孝一

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

睦子

兼題「痛み」

玉置 重人選

男はんも腹を痛めてみませんか
歲月という特効薬がまだ効かぬ
散る痛み枯れる痛み耐えて花
ストレスが脱皮出来ない胃の痛み
日の丸が進む痛みはないですか
グーチョキパーそれぞれにある痛み
思いっ切り蹴つた小石が撥ね返る
珈琲に溶かせるほどの痛みです
痛いことおまへんかねえヘソピアス
足腰が痛み一線からおりる
寒風に晒す痛みが凍てるまで
一言がこころの痛み和らげる
貸金庫へ私の痛み持つ株価
転んだら痛みを分かち影法師
不躰に痛くもない腹さぐられる
痛むから愛しさ増しているいのち
思いすこしばかりして胃が痛む
嫁がせる痛みじつと堪えている
耐え抜いた痛みは胸の奥にある
残高が目減りしているのが頭痛
和解した外反拇趾がまた痛む
左遷地の痛み地酒がやわらげる
打ち明けて心の痛み薬になる
傷口をフキフキ痛い顔をする
頷いて友の痛みを分かち合う
雪解けのように痛みを消すシヨパン
ハルウララ心痛んでないだろか
(失)五月 美 籠

傷心を妻はふんわり卵とし
男の子男の子やと砂払う
耳痛い話になった咳ばらい
逃げて来た鬼の痛みも聞いてやる
靴音で父の疲れがわかる母
佳
良心のしずくが痛むウソ一つ
本当の痛み耐えている笑顔
痛目にあうまで意地は張りとおす
リストラへ妻の笑顔が胸を刺す
替つてはやれぬ痛みがもどかしい
人
美しい言葉で傷に塩をふる
地
子をぶつた手にいつまでもある痛み
天
痛目を重ねて人の顔になる
軸
冬木立心が痛む社会面
兼題「雪」

奥田みつ子選

富子 耕治 寿美子 美明 女
柳 弘 鐘造 扶美代 一風 かりん 楓 楽 セツ子 ダン吉 照子 螢 アキ 恵子 扶美代 雅文 春蘭 千恵子

風花を髪に飾って君を待つ
二枚目の顔で都会につもる雪
遠い日をたぐり寄せてる雪見酒
魔女のような冬山の雪囁いて
線香の匂いがしてる寺の雪
情念へ炎と化した雪女
熱の児へお盆に載せて雪兎
雪だるま孤独に溶けて地に還る
じよんがらを聞くところ里雪になる
雪女いたずらしたか椿落ち
吹雪くので胸の扉を閉めておく
メルヘンのくへ誘うはたん雪
千手観音のみ手温かく外は雪
柝が入り役者見栄さる紙吹雪
寒行の素足へ雪の降り止まず
にぎやかな親子の声で雪だるま
孤独感ハートに雪がつもりだす
隊員の家族の涙雪が舞う
雪が降るあの世この世の狭間に
降り続く雪へアタゴを口ずさむ
春雪やジグソーパズルまとまらず
憎しきも愛も消しゆく雪が降る
風花へ恋を語らう寒椿
超然と太棹響く雪舞台
佳
古傷を優しく包むはたん雪
雪山に挑む男の背が躍る
雪見酒 俄詩人の小宇宙
ぎすぎすの心に雪達磨が温かい

富子 美子 楓 楽 一風 美代子 朝子 潤子 (失)五月 千 里 楓 楽 篤子 天 笑 義子 孝一 富子 正雄 かりん 和香 いわゑ 玄也 篤子 一風 ばっは 光久 祥昭 光久 アキ

雪景色子等の声さえやわらかい

人

雪しまき孫は菜の花咲く土地に

地

一言の重さで箕から雪へ

天

雪の里母さんひとり動かない

軸

小雪舞う厄除けの札頂きに

兼題「道」

河内 天笑選

介護など要らぬと父が道いあがる

家の中道う一歳と九十歳

たんぼの地を道うごとく春を待つ

道いながらかばちや大きな実を結ぶ

道い道いの先に転がる紀州毯

春告げるれんぎょうの黄が道うて出る

かぶと虫値札貼られた籠を道う

道い道いに取られた僕の膝枕

道うて出てみみず交通事故に遭う

襟き逃げを追って地を道う虫めがね

横道いのままの物価に有り難う

リング上道いつくばったババがいる

道つても君の葬儀は見届ける

爆薬を抱いて匍匐の自爆テロ

取り立ての鬼が期末を道い回る

残照の海原を道う鎮魂歌

掃除機のように赤ちゃん道いまわり

二日酔い朝は寢床を道うて出る

真理子

哲男

森子

ダン吉

螢

日出子

朝子

いわゑ

朱夏

孝一

正雄

かすみ

寿美子

隆盛

尚士

千代

たもつ

倫子

誠

比ろ志

俣子

鹿太

ときめきを探してマウス道い回る

道うてまで行く気になって喜ばれ

道い道いになるのがいやで竹を踏み

腹道いで新聞読んでいる休み

腹道いで恋を語らう夏の海

道つても帰れるとこで飲んでます

萬の道う球場美酒を待つている

道いながら介護保険にたどり着く

道いながら飛び立つチャンス待つている

デバ地下はいろんな匂い道うている

道つても道いいたい人が胸に棲む

道うてもきつと抜けまます茨道

道い上った苦勞はおくびにも出さず

匍匐前進するのが僕の仕事です

春日差しドンドコドンと道つてくる

佳

インフラに来て匍匐前進稽古する

道うてもトイレに行くとお婆ちゃん

泥を道い棚田に生きた父の自負

手の上に這わせてうまい人使い

一本の薬を掴んで道い上る

人

道えば立て立てば塾へと行かされる

地

路上ライブから道い上がりスターの座

天

行列から野心が一つ道うてでる

軸

鍵盤を滑らかに道うノクターン

太田扶美代

富美子

春蘭

昭子

朋月

萬的

月子

朋月

葉

篤子

千里

鐘造

潤子

一風

三喜夫

美明

伽羅

深雪

富子

トミノ

泰子

義

西宮北口川柳会三十周年

記念川柳大会

とき 平成16年3月27日(土)

午前11時半開場・出句締切午後1時

ところ 西宮市民会館1階 大会議室

西宮市六湛寺町10-11

(電話0798-33-3111)

阪神電鉄西宮駅下車 市役所口から徒歩2分

お話 川柳塔社名誉主幹 橋高 薫風氏

課題と選者 各題5句・席題なし・欠席投句拝辞

「神」事前投句 川柳塔社 黒川 紫香選

(披露 奥田みつ子)

「艶」 川柳塔社 西口いわゑ選

「無心」 川柳塔社 西出 楓楽選

「根」 時の川柳社 小松原爽介選

「平和」 ふあうすと川柳社 泉 比呂史選

「ひととき」 番登川柳本社 森中恵美子選

「チャンス」 川柳塔社 河内 天笑選

会費 2000円(軽食・記念品・発表誌呈)

事前投句締切 3月1日(月) 必着

懇親宴 大会終了後「華宮」にて5000円

投句先及び連絡先 〒663-8202

西宮市高畑町2-82 西口いわゑ

(電話0798-67-3740)

主催 西宮北口川柳会 後援 川柳塔社

—水煙抄

秀句鑑賞

—2月号から

上田俊路

昭和五十九年に地元新聞柳壇への投句がきっかけで、もう二十年になります。

何もわからぬままに歳月を重ねましたが、川柳を通じて多くの仲間と出会えたことが、何よりの宝と思っております。

この度、水煙抄の鑑賞を仰せつかりましたが、作者諸兄姉の意に添わない評になりました。たにお赦し下さい。

何もかも許してふたり日なたぼこ

馬場利子

水煙抄の冒頭の句、年の功というか、諦念にも似た雰囲気を感じさせられます。このまま仲よく長生きして下さい。

児の瞳にはきれいな景色見せておく

足立由美子

幼い時に美しい自然環境の中で育った子は暴力を振るったりはしません。大自然の美が脳内にインプットされているからだそうです。

家族っていいなと思うサザエさん

三浦強一

サザエさんの漫画には懐しい日本の家庭が描かれていました。最近の家庭崩壊の風潮の中で、あのユーモアに満ちた家庭が甦ってきてもいいものです。

騒ぎ立て騒ぎをつくるテレビ局

近藤正

確かに最近のテレビは、何でもないような事でも騒ぎ立てている傾向がみられますが、問題は人権が無視されてはいないかでしょう。

親戚の無いこの町が暮らしよい

青砥菊枝

遠い親戚より近くの他人と申しますが、私の体験からも厄介な親戚がいらない余所での生活が快適だったことを覚えています。

ひもじさの語り部として芋の茎

安野かか志

この方も戦中戦後の体験者のようで、あの食糧難の中で、確かに芋の茎はひもじさの語り部として残っています。もう二度とあのような事はあつて欲しくないと思います。

今だから護憲唱える党が要る

長島亜希子

自衛隊のイラク派遣をめぐり、国民の世論が割れています。若かりし頃の土井たか子さんの絶叫が聞えてくるようです。

呆けるには時期尚早と辞書を買う

伏見雅明

物忘れをするようになると、呆け防止のためと辞書を買います。私も最近、電子辞書を奮発しました。

とれとれの活きいい蟹旬を食う

西尾敬之介

今年の冬は日本海名産の松葉ガニが豊漁でわれわれ庶民も活きいい旬を食べました。

踏いた石を蹴ったらまた転び

石原三郎

よく踏いた石に○○教えられ、とか教訓めいた句が多いのですが、また転びとは余程合性のよくない石だったようですね。

当たらないと思いつ並ぶジャンボくじ

内海綾乃

当たらないと思っても長蛇の列に釣られて並ぶのは、年末大売り出し等でも見られる群集心理にも通ずるものではないでしょうか。

停電でパソコンただの箱になり

森元ふみよ

これは他の電気器具にも共通なのですが、パソコンの場合は特に「ただの箱になり」がよく効いています。

欲しかったケイタイ持てば用がない

荻野象山

おこめ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

ローズ川柳会

山崎 君子報

食い潰す心配祖国も私も

てる

運とやら手ではつかめるものでなし
春風に触れてやる気が目を覚ます

キク子
みつ子

軍靴の音甦る記事ばかり

藍

おいしさの音噛みしめて生きる幸
歳月は人を待たずに除夜の鐘

哲子
トミエ

触れ合うを他生の縁と思わぬ世
八つ手の花そとと触って冬を聞く

貴代子
孝一

戦争の音が聞えて落ちつかぬ
踏切信号冬には冬の音でなる

いわゑ
武庫坊

胸のたかぶり白い椿に触れてから
冬いちごなになにふれたか燃えている

年代
義子

川柳塔おっぱひ吟社

木村あきら報

牙取れた男と羽根のはえた女

初恵

恙なく生きて父母への感謝状
老いてなお明日に夢をつないでる

八重子
文仙

肩書はどうあれ今は低い腰
喝采はなくとも明日の米を研ぐ

かおり
吟笑

蛇口から朝の息吹きが溢れ出る
ふるりの田畑が父と老いてゆく
いい夢は惜しい処で目が醒める
小さい幸追って必死で生きてゆく
ふかし辛美味いと思う苦勞人
冬過路銀杏時雨に追い越され
年金に羽が生え出す年の暮れ
こはれ種そこから芽吹く物語
老いたのか蹟く石の多い事

川柳クラブわたの花 吉村

一風報

家康と同じますかけ妻に有る

(本)たえこ

文殊さまトリオの旅に知恵授け
自分史へ弾みをつける老いのペン

(赤)妙子
ますみ

雨に燃え夕陽に燃えている紅葉
怒ってる妻が敬語で返事する

まさこ
いつふみ

前の日のお酒が残る歳になり
芸人を欠伸一つでききをつけ

義明
春江

阪神のバット湿るとテレビ消し
レシート之余白に一句走りがき

順生
知佐子

旅に出た女の財布よく弾む
姉兄も故人になつて彼岸花

美代子
民

故あつて別れましたと小指立て
乗り継ぎへ夢が踏み出す二人旅

八寿子
はじむ

リストラで親子の余白取りもどし
母と語る子供の声がよく弾む

道子
宏至

がんばれと言われてからの深い闇
歳をとり手紙の余白うまらな

ミツ子
キク子

願い事ふえて追加のお賽銭

君江

あきら

勝

いさむ

賢

輝夫

貞月

放任

坊太郎

治延

延

延

延

延

延

延

延

故郷の訛り飛び交う同窓会

一合の米キュツキュツと生きる音
告げ口はコスモスにつこりノールと言う

鬱捨てにおしゃやれして行く繁華街
電カミの音は不揃い中学生

家族の絆こまつた時にすがりつく
完璧と意気込んでいても余白いる

大宛に獣医さんから来るハガキ
忘年会不況の酒も盛り上り

遺言状余白の付記で大きき
梅田までマリアアカラスに会いに行く

敬礼を今もしているボクである

東大阪市川柳同好会 森下

愛論報

いくさには強いがテロに弱い兵
見せかけの平和に空しい反戦歌

度
良子

看られるも看るも戦い日が沈む
病む父の視線の中に我がいる

シマ子
三重子

暗い世を生きる視線は高くする
すべり台の視線は遥か雲の上

弥生
美弥子

野仏へ歩を休ませる過路笠
仮面など脱いでどのかな菊日和

とみを
萬的

ダムになるのどかな村が騒がしい
民謡を口ずさんでる露天ぶろ

秀夫
太朗

転動で悲喜交々になる仲間
散り際はきれいに老兵消えるのみ

章久
克己

刀匠と火花を散らす向う鉦
まだ欲が充分あるので惚けられぬ

猪太郎
高尚

日展が創作欲を駆り立てる

信治

宏

一風

きらり

欣枝

幸美

俊子

恭一

奈良司

浩三

正純

一道

一道

一道

一道

一道

一道

突つ張つた欲に躍くこともある
生き上手欲を宇宙に遊ばせる
欲深い背からこぼれる冬の鬼

川柳塔打吹

大森 孝惠報

あせらない残りくじには福がある
賞品のつまらん時に当たりくじ
銭がない夢でも見よう宝くじ
年末に残した金でくじを貰う
宝くじ狂騒曲が流れてる
正月も五円御縁のくじばかり
にんじんを見てそれだけそれそれ
戦争の痛みを忘れラッパ吹く
今日こそはやる気が出たが雨が降る
はめちぎりのやる気にさせて給与さげ
やる気だす種が大地をもち上げる
見せかけのやる気小石にけつまずく
ぎりぎりまで卒業したが戦がない
汽車の旅発車ぎりぎりすべり込む
ぎりぎりの線で理性が引き止める
ぎりぎり合格点が認められ
ぎりぎり駆け込み寺にすべり込む
ぎりぎり食べております老夫婦
極限で遙か聞こえる神の声
十二月三十日に産気づく
戦争の怖さを忘れそうになる
いま聞いてすぐ忘れちゃうのは得意
忘れてた自分の歳を人に聞く
置き忘れさびて出てきた花ばさみ

湖風 雅文 愛論 公惠 玲坊 慎元 和子 善江 友楽 重忠 義人 三津子 博文 しろう 龍枝 泰山 貴恵 幸子 清 節子 石花菜 美美子 玲子 富恵 久井代

東京で忘れ名古屋で思い出す
忘れましょお寺の鐘も鳴り出した
忘却の彼方は虹がたつらしい
いないないバーする眼鏡鏡たいこ
女偏みんな忘れてしまいたい
忘れたと言えず相槌打っている

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云見報

行き過ぎた慎重チャンスまた逃がす
慎重に紆余曲折の日を送る
慎重さ欠いた心の隙を衝く
コンパスで書いた日の丸何故歪む
嘘少し入れると話おもしろい
追伸に書く一行がハイライト
天国の便りも来ない不況風
手加減はしない師走の不況風
不況風まだまだあるぞ底力
不況風我が家計簿に皺が来る
膝抱いて不況の風をやり過す
刑務所と病院が混む不況風
がたがたと騒ぎに乗った風来坊
リストラで世帯もローンもがたがたに
がたがたの心を癒す犬といふ
がたがたと積木の家が揺れやまぬ
円高ががたがたにする兜町
予想屋の嘘が当たった万馬券
付け嘘嘘と知って足が向く
嘘包む大風呂敷は持っている
美しい嘘なら嘘にしておこう

勝見 季芳 京子 克枝 芳光 孝恵 萬子 稲佑 庸佑 砂輝守 メ女 初恵 紫香 泰雄 典子 武史 秀夫 石舟 茂 治三郎 スミ子 あやめ 求芽 典子 孝一 高栄 光穂

佳句地十選 (2月号から)

小野 句多留

待たせたり待ったり恋の花時計
前向きに今日という日を渡り終え
ありがとうベッドの文は由に書く
強がりと弱気へ老いの弥次郎兵衛
傷口を縫ったひとこと抱いている
一枚の賀状に遠い恋がある
同窓の十人十色の老いが見え
風も秋秋の笑いをじっと待つ
まだ余熱持つ年輪のひと所
紅少し足して女の列にいる

恵美子 春代 豊枝 ダン吉 志華子 正一 鬼焼 花城 アキ

貸すのならどんと催促できるほど
苦も楽も師走の風は無情なり
口先を拭い姑息に身を守る
裏切りの握手気づかず臍を噛む
太い根がやつぱり生えていた噂
哲學の道で拾った馬の耳
伏線をたつぷり敷いてから本音
火の匂いまとう女のくすり指
歳月は待つてくれない除夜の鐘

とし子 信醉 照子 激 宏章 比ろ志 尚士 活恵 諷云児

岸和田川柳会

長谷川呂万報

口コミの人気行列出来る店
阪神の人氣で売れる福袋
人氣よりネームバリューで売れる本
脱線するので人氣で先生

照女 守 みつ江 穰一

抜け目なくちゃっかりだけど憎めない
抜け目なく如才もないが好きでない

抜け目ない鴉が眠る禁猟区
系列のビール準備の抜け目なさ

抜け目なく孫告げ回る誕生日
熱中の余りテレビと共に泣く
熱中をすればダルマも立ち上がる
熱中をしてる匠はいい顔だ

ケイタイに熱中電車乗りすぎす
パソコンに熱中をして五十肩
辞書の背に熱中の跡見せられる

熱中のファンが埋まる競馬場
のはせてるふたり只今別世界
使い捨てのばせていたら飢えて来る

名月を愛でてのはせる露天風呂
のはせるなバジ外せば粗大ごみ
プライドが白紙に戻すこと嫌う

両方に義理立てをして白紙票
広告の裏の白紙へ五七五
白紙に余生の夢を盛り上げる

死者ふたりでも白紙には戻さない
川柳大阪 高木 信詮報

断ち切れぬ想いが咲かす曼珠沙華
外で大声月がきれいと言妻が呼ぶ
やさしさの外にさびしさを持つ男

外ばかり歩いた父の退職金
歩き通す一途な通路終えました
抜きたるが蘭医者下手と決めている

香代

仁脩

東吉

呂万

ゆり子

力子

英雄

陸馬

蛙城

みよ子

古希の坂下りじゃないぞ登ろうぜ
散った夢つなぎ合わせて生きて行く
嫌われて燃える畦道曼珠沙華

食欲の秋は秋刀魚と大根で
一抜けたつるべ落しの日が暮れる
鬼は外家には誰も居なくなる

人生つて色々有っておもしろい
陽だまりで一途な昔ふり返る
祝年賀阿波踊りならまだ出来る

その時はどうにでもなるマニフェスト
力抜き五臓六腑に風旨し
口出して抜き差しならぬはめになり

悪政を見抜けぬ民もまた悲し
鬼の面外して孫に会いに行く
古希だつておもしろいことすきでっせ

ノーベル賞一途に追った見えぬ影
七人の敵へ外面使い分け
間引き菜を抜きつつ亡母偲ぶ秋

厚化粧おもしろい顔になつてきた
舞い終えた五枚こはぜにある一途
日日常安おもしろい夫婦やつてます

人間を一途に生きるこぼれ種
藤井さん納豆のようねばつこい
耐え抜いた手の温もりを確かめる

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

難聴で争うこともない平和
耳よりな話はドアの向こうまで
首洗う事も人生二度三度

喜楽

隆司

ひろあ

楽子

洛酔

青道

一輪

美花

三十四

本蔭棒

洗剤で心の汚れまでおちず
人生のシミ洗つておこそう古い傷
鬼は留守洗つておこそう古い傷

二つある耳が話を聞き漏らす
洗つても落ちぬ日の丸の赤いしみ
風にのる噂とらえた地獄耳

ドイツ語を混ぜてさりと性と説き
竹原川柳会 時広 一路報

ひとりぼっちになつても続く茜雲
マニフェスト続いています不況風
妻とかく四十年の続柄

僕の川柳よくも続いたありがとう
喝采が続く政治を待ち望む
福相にもなるさいい事続くから

好奇心多すぎ何も続かない
水芭蕉見たさに続く人の列
風の足跡が続いている砂漠

源流の一滴いのちえて海へ
けちんばが続き私が三代目
道続くかぎり人がいる火が点る

新しい財布が福を呼んでいる
カレンダー一枚めくり未来見る
創造の神だと思ふ石工の手

童心に返つてケンケン石畳
躓いた石としばらく禅問答
原石がずらり並んで入社式

見あげれば仏に見えてどの石も
どの石も自己主張する庭の石

民子

ちよえ

はるみ

かつ子

博利

清泉

白汀

蘭幸

房子

厚子

草も木も眠らせて聞く妻のぐち
有難や法話お耳に眠りこけ
生さる戦い保育器に眠る吾子
大の字で眠る孫大物かも知れぬ
耳たてて眠るこの猫武蔵かも
母と子の乳房眠りだす仏
竹林が続く素直さ取り戻す

川柳塔唐津

久保 正剣報

人生の定年酒を断つ日です
だれか言う一期は夢よただ狂え
脛噛んだ娘が泣かせてる披露宴
マリオネット糸がもつれる老いの足
カネ出して老いは三猿強いられる
瓶の中覗くと飲めぬ蝨酒
酔醒めの水は生きてる音で飲む
正月は拝むことから始めよう
総会で泣く子をあやす手にはまり
パソコンが欲しいガンダム貯金箱

城北川柳会

神夏磯典子報

笑子 孝枝 幸子 貞子 万年 不朽 一路 平八郎 輝夫 晴翠 勝視 高明 水笑 虹汀 四郎 正剣

静枝 茂枝 喜美子 久留美 一枝 典子 昭子 はじめ

家計簿にまだまだ詰めよと諭される
ややこしいリストが一人歩きする
蚯蚓の尾頭無くても生き延びる
真実に尾緒つけてる講談師
そこそこの事さえてきぬうちの人
そこそこの額を包んだのし袋
時の波行方誤ることもある
そこそこ効いたでしようか鼻くすり
隣の子成績リストはいつも上
清貧に生きてお腹も尾も白い
そこそこ置いてこそそれが無難だね
夜は夜なべ子へ生く母の強さもて
そこそこ聞いた話はしゃべられぬ
尾を振ってくる野良犬は生き残る
賽銭箱稼いでいます神は留守
若鷲の玉碎二十歳そこそこで
尻尾振りのうまい方から買われてく
宮様に化けても尻尾出しています
そこそこの夢はいつでも抱えている
好き勝手言うて尾を引く民営化
年齢が資産カリリストから消され
故郷の匂いが詰まる母の便

川柳うもん吟社

杉本

孝男報

ぬくもりが欲しくて春の絵に溺れ
繰り上げに次点候補の泣き笑い
男でしよ挫折を糧にもう一度
体から命とりだし日干しする
妻と子を守ってこそ男でしよ

トヨ子 重人 柳一 政子 正 志華子 求芽 あやめ あい子 ひさ乃 達子 春蘭 高栄 史風 とし子 倫子 修 順三 千里 柳弘 千歩 公一

洋々 志げ緒 茂登子 一粹 美雪

嫁ぐ娘へ有り金はたきカップ麺
失敗を糧に伸びてよ男でしよ
男でしよ胸やんわりとくすぐられ
子を思う母の悶えは終りない
彼よりも財の魅力に溺れそう
平和惚け豊の上で溺れそう
男でしよ胸の心棒折るなかれ
世界一のおんなに惚れた不幸者
受けた恩借りた情けに溺れそう
溺れそうとも優しい嘘だから
婿殿が米一俵を拒げない
スポンサーつかまえて遮断機をあげる
高慢チキな河童が川で溺れそう
悶えても時計は命乞いしない
大胆になるには酒がまだ足りぬ
一番のスポンサーです諭吉さん
悶もんとあの一言が眠らせぬ
めっちゃ悔し銀より金が欲しかった
擦り減った靴だけが知る泣き笑い
世界一ばかな男について来る
スポンサーの鼻毛抜いてる赤い爪
一匹の天衣無縫になる無職
スポンサーはでっかい海だ鯛を釣る
世界一大きなほとき様になる
今が匂ええ男でしよマツバガニ

京都塔の会

都倉

求芽報

雲一つおいてけぼりの秋の天
換気扇 お昼はさんまと言いつらす

金祥 一京 春名 益子 三津子 孝男 一瑠 健夫 彰良 忠良 蟹郎 美恵子 鬼松 公乃 裕子 節子 昌鼓 無限 朋恵 圭一郎 朱夏 欣之 完司 公弘 石花菜 春蘭 年代

秋の暮れ自然に足が速くなる

最近の天気予報はよく当たる

同窓会 お転婆組にある活気

日記帳 三日坊主で以下余白

介添えが若くて百まで生きそうだ

フィナーレは妻の拍手で送りたい

フィナーレへ紙吹雪だけ舞っている

フィナーレまであなたに従いてゆくつもり

感謝状 母を取った嫂さんに

状況のつかぬままに派遣とは

白状しますお皿を割ったのはわたし

回り疲れたようなニギリがまだ回る

北朝鮮に残る家族に二度の冬

叱られる子だけ残して皆んな逃げ

千円の差末練が残るオークション

義理人情残す長屋が消えてゆく

無難積み重ねて眠い回り椅子

贈り物無難な品と思案する

目立たない妻と無難に五十年

小泉さんイラク無難に越せますか

段差なくし無難な家にしてくれる

おだやかな顔が一番無難です

コンタクト鳥取砂丘では嵌めぬ

内緒ごと無難に答え気が晴れぬ

賞罰もないまま堅い椅子にいる

川柳ささやま

遠山

可住報

分けあったからよけいに旨かった
厳格な姑から継いだ旨い味

恵美
純子

武庫坊

達子

あやめ

高栄

紫香

芳子

啓子

磯

益子

葉子

百合子

郁郎

満子

メ女

克治

宏子

欣之

庸佑

典子

英旺

ルイ子

比ろ志

藤重

輝美

求芽

抵抗の永い箱入りイヤリング

一泊で山里のよさ持ち帰る

枯れてゆく草の命を土が抱く

イヤリングつけない会の賑やかさ

イヤリング何時も輝く火の女

七彩の夢が輝くイヤリング

人並みに生きていのちの秋刀魚焼く

命綱母姉去って切れたかな

母がいた里の一泊思い出す

イヤリング揺れて子離れどき覚悟

一泊のクラス会なら花も咲く

手鏡に本音を畳むイヤリング

延命の治療はごめん安らかに

安物よ言うイヤリングよく似合う

イヤリングつけてバイトの店を出る

いのち今母子となりぬ乳房吸う

西宮北口川柳会

黒田

能子報

意気込みがカレンダーから洩れてくる

ポリシィも抱負も持たぬカレンダー

三世代へ気配りおせち和洋中

旅土産チラホラ春の気配する

宅配の荷一杯の母の愛

福は内うちに可愛い鬼がいる

スナップを娘に内緒配ってる

内部告発見て見ぬ振りが出来ぬ性

黄檗山寺内異国の風をよぎ

子の内にたぎる炎に気がつかず

鬼さん内のお福と豆いかが

美緒子

美智子

文子

美紗子

靖子

朝子

多美子

開子

かほる

つや子

八重子

富美

康子

君代

哲男

可住

哲男

房子

哲子

絹

良恵

奮水

松煙

石舟

嘉彦

貴代子

キク子

隠すほど速く広がる内緒事

いい月が内気な背中ごとんと押す

手の内を見せて相手を煙に巻く

ひとりばつちでないよと風が背を押す

押さえてつる物言いい自分でも嫌い

ふる里の風に押されてまたやる気

押し花をソツと挟んで本返す

押しでダメ引いてもダメなダメ男

横車押して虚しい向い風

落ちたことない押しピンを妻が踏み

晩年を生きるに冬は寒すぎる

無いものをねだってばかり寒の月

いくさと平和昭和平成十六年

正月を待つ間に南天啄まれ

ひらひらの雪が祈りの手に溶ける

火も風も運命線にはらむ風

酒の瓶たのしくやれと言ひ給う

控え目にスタートをする日記帳

父の樹にひとつも要らぬ枝はない

三幸川柳教室

古久保和子報

知らぬ間に翼生えたか妻は留守

挫折した翼ただいま修理中

子の翼無風地帯を飛びたがる

合わせ鏡で朝の翼を整える

跳ぶことを止めたら退化した翼

日向はこたまに開いて見る翼

夢抱いて翼は世界視野に置く

テレビ消し静かな夜を取り戻す

昭

孝一

光久

たず子

てる

千代

歳子

五月

美代子

春蘭

鹿太

富喜子

いたる

光子

曙蝶

求芽

いわゑ

美龍

秀章

義男

靖子

智三

和子

武

次根

幸

正一

静静と極彩色の仏たち
酸欠の夫婦に起る静電氣

虎落笛ひとりの夜は長すぎる

恋心静かにもえて著我の花

しじまからバントマイムの息遣い

静けさに壁の隙間が喋りだす

ライバルが去ってしまつてすさま風

ライバルに囲まれ若さ取り戻す

ライバルは居るから今日の僕がある

ライバルは自分自身の影法師

ライバルが贈つてくれた塩の味

ライバルが僕よりデカイ鯖をよむ

まだ欲があつてライバルたんと居る

のはほんとと見せてライバル隙がない

リサイクルの過去は問うまいガラス瓶

ガラス王然れど嬉しくすり指

あいまいな答えが好きな磨り硝子

成り行きに任せる秋のクリスタル

モザイクをかけるとガラス喋りだす

多事多難くもガラスの中にある

真実へくもりガラスが邪魔をする

ガラス玉ころがる方へやじろべえ

サークル檸檬

西出

楓桑報

蒼天に天女が雲かただよいぬ
梅一輪天女の乳房だと思ふ
結ばれるまでは天女と見た妻
羽衣を脱いだ天女は母だった
天女からただの妻へとなつたもう

章子 三千子 三子 信子 保州 起世子 千秀 昇 町子 清史 准一 朱夏 さい子 イセ 美枝子 桂香 公子 鉄治 登美代 碧 よし子 哲夫 房子 義子 あずき 房夫

ウエディングドレスあれは天女の贈りもの
わが天女ときどき角も牙も出す
乗り換えた駅で天女が待つていた
いたずらな天女運籌くるわせる
天女にはなりたくもなしなれもせず
ふざけるなこの世に天女などいない
トンボリで客を物色する天女

川柳塔鹿野みか月

土橋

母さんに勝る七福神はない
贈るなら七福神をイラクまで
七福神の中の一人は私かも
イラク派遣七福神も無事祈願
七福神のコピーで夢を吊っている
今年こそ七福神の舟に乗る
七福神の神の一人が見つからぬ
皴面の笑みは大黒天だろう
食べて寝る母のお腹は布袋さん
子供等も弁財天に人気あり
夜が明ける小鳥に負けぬ草を刈る
年明けてことしやお猿も法被着る
夜が明ける二千四年が動いてる
年明けて進路を決める鳩の群れ
お受験へボツケに懐炉入れる母
真四角な炉ばたに真四角な和み
炉のそばに猫も杓子も寄つてくる
囲炉裏から秣を炊いた五升鍋
いろり端いちちゃんの膝ぬくかった
高ぶりを抑えるように炉を燃やす

たもつ 楓久 光久 美籠 みつ子 正坊 遠野 螢報 菊乃 永子 節子 はるお くに子 みさ子 かつ乃 喜与志 幸枝 実満 野草 汲香 武子 みどり 弘子 かおる 久枝 睦子 宣子 盛桜

炉の火をつなぐ母になり芯になる
支持率がちよつと気になる七福神
七福神のひとつはうちの親戚だ
古稀の海七福神も帆を降ろす
七福神と鎮守の森で話し合う
つらい日はアハハと布袋さんになる
七福神揃わなくてもよい新春だ
乗りおくれ無いく七福の宝船
終章は七福神の舟に乗る
その中の弁財天に用がある

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

金盃で呑んでも同じ酒の味
幸福な日々を彩る孫の声
いくたびも苦杯をなめて丸くなり
梅桜待たずいくさの音がする
地酒汲む盃にゆらめく寒の月
盃が人生変えたあの出会い
四世代欠ける事なく福笑い
当らぬが夢は見ました宝くじ
福の神貧乏神もいない家
福はこぶ孫は我が家の宝物
三三九度金交わす愛燦々
鼻ベチャも見方変えれば福々し
三猿を誓う門出の初詣で
足止める春の訪れさくら草
七彩の夜景鎮魂の街コウベ
化粧した言葉の陰にある不安
言い訳はそれだけと聞くふところ手

富久江 公子 きみ子 彩子 小鹿 和子 孔美子 諷人 茶子 螢 鹿太 耕治 全彦 玉枝 勝巳 美代子 よし子 カズ子 信子 秋子 まさき 孝一 義芳 イサミ 正治

幸せ度空の青さに負けている
福の来る窓はカーテン開けておく
おかめひよっとこ小さな福を温め合う

川柳塔なら

坊農 柳弘報

ラストシーンにやり女の業が出る
騒がない子供何だか不気味です
しっかりと握つてくれたもみじの手

騒ぐより陰で見守る親ごころ

潮騒に明日の漁場を決める漁夫
砂糖きびザワザワと反戦歌
議員五年握りつぶす事になれ
大金を握つたことのないカード

野暮ったい僕を磨いた世話女房

ジーパンを縫い直してる野暮な母
生き下手でいつも騒ぎの中に居る
野暮なことと言うなと温い友がいる
つかみ取り欲が握つて抜けない手
最後まで主婦キッチンという皆

ユートピア求めラストの急な坂

そして冬野暮をつらぬく木守柿
つてんでラストを燃やす木守柿
騒ぐ孫見ると和む秋日和

終電の悲喜もごもの万華鏡

悲のかたち哀のかたちに握る数珠

ばあちゃんの握る口座が侮れぬ

野暮なこと一つ残して敵がない

野暮天の男が温い目をしてる

脈拍がコトり少女は風になる

美 籠
求 芽
いわゑ

ふりこ
博一
春

春 雄
秋 泉
卓

千 梢
冬 葉

佳 子

茂 雄

孝 子

太 一

弘 風

登美子

章 久

恵美子

富 子

一 風

良 一

秋 雄

あやめ

真理子

ダン吉
國 治

確実に味方を増やすにぎりめし
柿の実が熟す鴉が騒がしい
さよならの握手手袋とつてから
最後までいのち紅竹を踏む
まだ未練どつと騒いでいる血潮
一徹を曲げぬ親父の野暮な靴

南大阪川柳会

吉川

吉川

寿美報

どじょう鍋昔の話よくはすむ
泥鰌たにし遊び仲間の少年期
泥鰌棲む棚田守つて母ひとり
脱皮する好みに動く時楽しい
少女から女へ脱皮するドラマ
やつと無事今年を脱皮聞く第九

脱皮した男にすねる肝っ玉

のれん分け自分の味を出してゆき
そう言えば元氣だったよ若かった
ランク下げ添うてみようかこの人
以下同文そう簡単に言わないで
双方に言い分があるヤジローベ

あの日もそうだったように汽車を待つ

おかしいぞ背骨ぬがんでいる日本
ねんねこの温さを忘れない背中
伝統を守る男の寡黙な背
背伸びしてみよう私を捨ててみる
好きだった力士がみんな引退し
相談にのれば財布が空になり
相談に乗れば火の粉がふりかかる
相撲とる妻には何時も負けている

隆 盛
美 子
理 恵
弥 生
朝 子
柳 弘

直 子
柳 伸
ひさ乃

ダン吉

叡 子

憲太郎

志華子
東 雲

萬 的
たもつ
寿 美
タカ子
時 弘
章 久
朝 子
遠 野
なぎさ
弘 泰
千 里
重 人

度

直 子

柳 伸

ひさ乃

ダン吉

叡 子

憲太郎

志華子

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

東 雲

はたる川柳同好会

水野 黒兎報

仕事始め会社を挙げて初詣で
一服の茶は座の空気を和ませる
おはようといニコが真似る独り言
転動に熱い視線をくれた人
何事も消えて行くよな深夜の鐘
ピカ一の女房と知るに五十年

初恋の記憶を手繰る童歌

挑発に熱くもならぬ年の功

屠蘇一献雉雞一枕夢心地

健康のためなら渡る熱い灰

辛すぎる記憶は亡母の夢で消す

孫夫婦教育論で熱くなる

一つだけ隠したいこと雪化粧

とんどやき明日へ動き出すけじめ

昭和史の記憶の中のキノコ雲

一本のワインが語り語らせる

遠花火夕餉一人の皿洗う

初春に一から出直す稽古事

竹口ソク燃え鎮魂の日が巡る

みぞおちへおとすたぎっている思い

川柳塔おとり

原 みさを報

人間になると笑顔がからなみだ

暮の店笑顔を貰ってきしまう

日当たりと笑顔の絶えぬばくの部屋

年賀状くばる人にもおめでと

郵便受春を集めた年賀状

雅 通

雅 通

賀状から個性豊かな猿に会う
袴を着けた賀状が鯢に張る
故郷を忘れずに来る年賀状
待つてゐる友の賀状がまた来ない

年賀状あの人からはもう来ない
まだ生きているかと年賀状がくる
年賀状いけば目当てのが来ない

なぜだろう友の賀状が来なかった
ご無沙汰の清算をする年賀状
年賀状疎遠な絆手繰り寄せ

年賀状孫の写真を乗せて来る
年賀状年に一度のおつきあい
そえ書きの自筆が光る年賀状

癖の字の賀状がとても温かい
川柳の鬼と今年は言われたい
魔女になり知らない世界覗きたい

続編の今年はわが身考へる
八十路坂越えて今年は大地踏む
今年こそそそが有るから夢抱ける

今年はいきき込みめるカレンダー
世界中今年はいきき手結び
今年こそ観る聴く言うを誓う年

今年こそ病平癒の願かける
みさを

かわはら川柳会

上田 俊路報

つじつまの合わぬ夫婦が一つ屋根
どたん場につじつま合わず気がもめる
苦しみをこらえつじつま合わせてる
つじつまを合わた糸がはぐれだす

孝子
幸次郎
以和万津
野草
風花
由多香
艶子
道子
せつ子
黙光
舍人
美佳
義弘
宏章
真一
紀子
登美
富貴子
清子
ひろ子
小生
庸二
みさを

つじつまを合わせそこない足が出る
つじつまの合わぬ話で泣き笑い
独り居てつじつま合わず相手なし
つじつまを合わす総理の顔ゆがむ
つじつまを合わせて見ると段ちが
つじつまを合わせて長い夜が明ける
衣食足りてつじつま合わぬはずがない

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

人間になろうなうとしての猿
停年のババカタログで墓地捜す
疑問符が膨れて台詞整わぬ
幸せを膨らませてる母子手帳
膨張の色は避ける太目の子
川柳に夢が膨れる初日の出
焼きもちを焼いて膨れたのもむかし
膨れつ面すると凄味を増す美人
叙情歌が私の生命膨らます
膨らみかけた夢へ家族の応援歌
小心な猿で群れから出られない
猿回し猿の移きで年を越し
僕に似た猿だと猿も僕を観る
三猿で世間を渡る老いの知恵
生け捕りへ猿も最後の賭けに出る
きつちりと責任はとる猿のボス
哀しみを裏返してる猿芝居
猿社会どこか哀しいボスがいる
三猿のまねごととして姑の座に
靖国で総理が見せた猿芝居

好道
雅子
登生
悦子
余史子
泰良
俊路
大輪
あつむ
輝子
和重
東吉
和香
よしこ
三男
泰女
紀久子
さち子
佐一
克子
三喜夫
寿子
順子
裕美
あき子
稚代
ダン吉

川柳塔まつえ吟社 津川 紫晃報

ロボットのカタログばかり胃に溜まる
カタログで無色の家を染めている
カタログで選んだ靴が噛みにくる
カタログが人の温もり遮断する
カタログの女に嫉妬しています
カタログに釣られ義理まで買ってくる
生き方のカタログ父の道標
カタログに未練が残る丸印
カタログに無いものねだる野蛮人
カタログの媚薬にちよつと撲られ

英子
富美子
朱夏
美子
優子
和子
正博
豊太
清史
義良
昌枝
浜丘
文子
昭二
多賀子
政子
たけし
玲子
治代
桂子
茂美
小生
喜美子
邦代
秀子

猿知恵はないが達者で飲んでいる
わたくしをひとりと除くと丸くなる
よもぎの香春の息吹を丸くもむ

丸い人年賀はがきも丸く書き
バイアール二乗が僕の顔なのさ
宝物丸い心の友がいる

厳しさをくれる丸い寒の月

初売りを去年と同じ顔で売る

初耳のような顔して聞いてあげ

初霞暦通りにやつてくる

幸せの写真も添えて初便り

初孫を抱いて戦争考える

初風呂の鏡で顔を確かめる

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

梨の来る三女は待つと素直なり

俳優は皆若いなビデオ積む

秋蝶と花の終りを見届ける

イラク派遣やめる勇気をなげもたぬ

洋服にファッショナブルな下駄を履く

妥協してから歩幅合つてきた

卸生活大ぶんに馴れて新春迎え

銀のスプーンで静かな夜を掬つてる

運という影をひきずる花の乱

ライバルの聲える肩に負けられぬ

願ひごと書いて日記を閉じました

苦勞したことは話さぬ丸い石

悔しさの数だけ根性つけてきた

赤い椿好きだと言つた友の逝く

町紅

房子

操子

芳山

幸子

知恵子

小鹿

蘭

きみえ

静恵

注湖

紫晃

清人

寿々子

春枝

やえ

藍

晶子

八重子

杏

瑞枝

天雀

千絵

てい子

なみ

紫泉

駅弁と車窓の風が旅の友
おふくろの味逃がすまい換気扇
終年の演技は面を使わない

乗り継いだ駅に宝を置き忘れ

ぶな林がはびこり太古その物の水

ばあちゃんのとんと昔があつたかい

懲りもせず夢も買います宝くじ

気骨のある人だな信頼が出来る

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

汗くさい男にさせた歩合給

この汗で家族みんなを養つた

大つづの汗をふきふきインタビユー

人知れず流した汗はよく光る

爽やかに汗時たまのボランテア

ボーイ捨ての掃除を終えた朝の汗

後押しでの汗なら風に褒められる

定退後足速のいたネオンの灯

ネオン街黙つてグチを聞いている

午後三時未だ目の覚めぬネオン街

ネオン街独り歩くに惜しい宵

男はするい女もするいネオンの灯

奥様をひと時魔女にするネオン

怠慢が招く市営の火の車

ガラガラに悩む様子もない市営

カラオケも市営とやらでどうですか

巡回バス利用してますありがとう

空きビルに市長の夢の跡がある

地下鉄もバスも無料で出不精で

恵子

すみえ

日枝子

千代

ふみ

千春

初枝

玲子

遠野

フジ

敏

一壺

かつみ

敦子

扶美代

庸佑

久仁雄

志洋

たけし

泰子

りつえ

一知

耕策

久仁子

ヨシ枝

みつこ

美代子

十二月何かもやもや暮れていく
もやもやの因は些細な誤解です
愛あわれはつきりしないまま別れ

もやもやが消えたスターゼロなんだ

狂つて世にもやもやと冬の草

もやもやを飛ばしてくれた青い空

もやもやがいっぱい北の国にある

もう一人の私が疑問持ち掛ける

もやもやが残る最後の妥協案

もやもやとさせたままです不平等式

思い切り猫に当つて十二月

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

はがらかな蟻で貧乏苦にならず

ロイン済んで妻の鼻唄弾んでる

誰とでも握手したがる癖がある

太陽を真つ赤に塗つて落ち着こう

高いほど赤いいちごにささやかれ

ヤッホーと天まで飜るるホルン

お日様へりごの顔を向けてやる

はがらかになるとドレミの歌になる

ボスターに街の美観が損われ

ワッハハハ冬將軍の御到来

ボスターの方が本物より若い

逢いたくて吹雪のポスト抱きにくる

寒椿アリバイのない雪の夜

赤い月だねって切つてくれた爪

新雪を踏んで口笛吹いて見る

羽子板の音とんとい家族

昭平

いさお

洞庵

ダン吉

専平

悦子

重人

桂子

章司

六点

昭子

きよし

あすなろ

しげる

ヒサ子

てる

順風

慕情

銀波

花匠

雅城

井蛙

黙人

千加子

和香子

花峯

島

ポスターの夏目雅子が肩を押す
充電するとスキップしたくなる

岩美川柳会

石谷美恵子報

メッセージ見合い写真も添えておく
賀状からやる気あふれるメッセージ
俺々に引つかかるなとメッセージ
恋ひとつ抱いてメッセージが続く
青春のメッセージには夢がある
メッセージ花一輪にあるかしこ
餅肌もお餅もすぐに固くなる
腹立ちまぎれに力を入れて餅を搗く
餅肌で歳をとらない母だった
餅食った数で昔を自慢する
ロタンの像あれば退屈かも知れぬ
川柳をやれば退屈などしない
退屈なポーズで油断しておった
主婦稼業退屈なんかやってこぬ
退屈にならないように指を折る
退屈に無縁育児のど真ん中
妻を呼びねずみ退治の幕があく
死ぬことはそんなに怖いことでない
組を叩いて春を呼んでいる
親友が来たので妻をオイと呼ぶ
故郷の正月が呼ぶ大移動
穴埋めの時だけ呼ばれ駒になる
似た人を呼べば見知らぬ人の顔
釣りバカが魚に呼ばれ冬の海
雨の日のくちなし母を呼ぶような

霜石
五楽庵

蟹郎

圭一郎

睦子

さき子

節子

静生

完司

はるお

克枝

稔

忠良

雅女

一瑠

和子

かつみ

裕子

重忠

螢

石花菜

孝男

よしえ

和枝

一京

公子

照子

呼び合つて青虫だって生きている
人並みの幸せでいい餅を焼く
一応は呼ばうよ来たら困るひと

富柳会

池

親切に大きな花が咲きました
その先は神に任せて走るだけ
外は雨ベストセラーは今佳境
少しずつ天に返していく命
糊代が乾く夫婦の倦怠期
外観を気にしてちっとも太れない
外面を良くするほどに肩の凝り
起承転結完の一字はまだ書けぬ
私が透き通るまで鶴を折る
快いリズムに風の一体み
灯の消える頃にはみな美談
さよならは尾灯の消えたあとで言う
忘年会ひとつ終つてまた一つ
ひと筋の佳しさも抱く日向ぼこ
筋書きをかえると弾む母の下駄
ネクタイを外すと妻が強くなり
定年にたつた一人のありがとう
地球よ泣くな平和の声もお聞き
愛しさを綴れば雪が降り止まぬ
いちにちを洗い流してあしたの手
八掛けのテンポで老いを迎え討つ
外で逢うメールが届く隠れ宿
しあわせなことに元氣な妻といふ
外面は哀しいほどに名演技

葛子
公乃
美恵子

森子報

冬虹

一慧

和子

鐘造

浩子

扶美代

和代

夕子

アキ

春蘭

奏子

鹿太

東雲

信子

鬼焼

亮幹

政雪

深雪

初太郎

欣之

巳代一

紅紫朗

宏至

キミエ

いい結果隠し切れずに緩む煩
ため息が熱くて夢を捨てきれず
孫の手が癒してくる老いの背
思い切り愛していると呼びたい
捨てること苦手の私こみの中
指切りげんまん手の温もりを確かめる

高知川柳社

川竹

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

高知川柳社

松風報

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

台所守る女の知恵袋
三歳の曾孫が妹守つて
イメージを守り通した原節子
子を守るツバメに学ぶ人の道
検査日の前だけ守る酒の量
守りから攻めに転じた妻の乱
初日の出時を計らいカメラ提げ
着せ替え人形娘が化ける披露宴
子の歩み思うて飾るおひなさま
人形をおんぶした子をおんぶして
求愛の数に当惑する人形
作品に命を宿する人形師
一日を人形でいる七五三
節目節目に人形と居て乾杯す
紙人形の軽さで母が老いてゆく
手垢付きの子の人形を捨てきれず

洋介
奈保美
誠
たかし
一夫
森子

愛宏

幸

主二

快風

てつを

孝雄

竹萌

功

和江

美々

哲史

まさ子

てるみ

京子

佳風

典雄

弥生

民

まつお

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

床柱むかしの栄華残す傷

父の背な栄華のあとが滲みでる

再びの繁栄願う法善寺

聞いてんか栄枯盛衰お月さま
 弥栄を願うお堀に旗ゆれる
 意のままに動かさない手で孫を抱く
 動きすぎ働きすぎでダウン症
 きよろきよと動く目玉に湧く疑惑
 激動の苦難に耐えた共白髪
 一日に一つ感動して生きる
 人様の情けで動く車椅子

悩みごと飛ばそう一つ咳をして
 殺し文句に弾んだ昔ありました
 そっぱを向いた神様がにたりと笑う
 除夜の鐘余韻は行方不明です
 輝いて明日をつかむ二十歳の掌
 夕暮れの鏡は何時も美しい
 春に向かい盛大に根が張ってくる
 盛大な葬儀写真が笑ってる
 たびだちの子どもに百の灯を点す
 盛大だね満足そうに僕が近く
 盛大な拍手に解けてゆく苦勞
 先頭で旗振った頃青かった
 ならみ鯛頭は妻が食う家系
 楽しいと頭がさえてくるのです
 子の頭そろばんちゃんと置いてある
 振り向けば頭の下がる人ばかり

長柳会 加島 由一報

監督は自信過剰の若芽つむ
 パソコンに自信喪失また手書き
 あなたから守りたいと冬のバラ

幸生 欣美 幸美 弘直 庸佑 春蘭 加津子 きよみ きらり 冬葉 定男 アキラ 巳代一 東雲 シマ子 宏至 欣之 ダン吉 頂留子 とみを 柳伸 芳香 一風 洋

人生は回り舞台の浮世花
 そのうちに金になるぞと歩の自信
 国守の事を忘れたピエロたち
 豪邸も舞台裏では火の車
 自己防衛腹を見せないかぶと虫
 ぱつと散るさくらの自負を学びたし
 自信ある如く振舞う占い師

自信ない男が出来た逆上がり
 守るものなかつた頃のあの自由
 越えて来た自信がさせる笑み深し
 お守りの数で入試は乗り越える
 オレオレの餌食にもなる母の愛
 生きてきた自信が皺に刻まれる
 かたくなに亡母流おせち継いでいる
 スランプを抜けて大きくなる歩幅
 神の守護願つて折るたいこ橋
 終焉の舞台衣裳に映える顔
 白寿なお杯を片手に句を捻る
 舞台去る日まで私の舞を舞う
 親をみる話めだす舞台裏
 帰る子へ灯りを守る母の窓

川柳ねがわ

平松かすみ報

カレンダーめくるたび古いしのび寄る
 イニシャルを誰か忘れたカレンダー
 趣味多彩埋まる姑のカレンダー
 来し方のむだにめくったカレンダー
 カレンダー法事と医者で混んでいる
 カレンダーの余白で夢を見ている

けい子 芳野 和子 たけし 美和子 淳子 正一 良男 敬二 史 淳司 和代 正子 冨美子 靖子 もこ 直樹 正美 由一 一慧 一炊 利昭 庸佑 九好 忠央 恵子

諦めぬ夢でんこ盛るカレンダー
 カレンダーの厚みファイト湧いて来る
 日暮れ時イラク派兵の子を思う
 無人駅人影も無く日が暮れる
 夕暮れを待つてましたと赤トンボ
 暮れなすむ百万ドルの夜景生む
 募金箱までも忙し暮れの街

暮れなすむバリエでテートをしませんか
 暮れるのが早い好きなひとと居る
 卒寿過ぎ達者で運ぶ月句会
 来年の目標高くなるの暮れ
 いい夕日明日を無題にしてならぬ
 百貨店半日浮遊して疲れ
 デパートの袋空せそうに行く
 デパートの旬はひと足早く来る
 百貨店へ春の七草摘みに行く
 アパートで見てスーパーで買いました
 喜怒哀楽共有してる姉妹
 喜ばず哀れ共有してる姉妹
 兄弟は居るが姉妹が無く淋し
 ザ・ピーナツに沸いた経済成長期
 生きていて欲しい笑っていてほしい
 生水の匂いになれて都市暮らし
 酒飲むと僕の時計はすぐ狂う
 約束を破って気付くうすい影

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

配られた名刺にひそむ名誉欲
 人ごみで配るチラシも人を選び
 土産物配って母の旅おわる

朝子 三峰 勇太郎 三郎 博泉 高栄 とし子 弘一 亜成 一笑 ルイ子 洋 西 修 一風 たもつ 仁清 かすみ さち子 祥昭 良知 沙置子 弘風 度 弘直 香住 シマ子

目配せのあうんの仲で通じ合う
配られたものを隣と見較べる
血税を他国へたと配りはる
がらくたの遺産相続困らせる
千の手をあげて辛抱の観世音

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

申年の三人揃う女系家族
三猿と決めてときどき口はさみ
おおかたは猿まねだったという人生
木から落ちのぼる極意を知った猿
落葉して森の明るさ戸惑いぬ
初まり森羅万象お目覚めか
風船に自転車の子が夢乗せる
散りおくれ寒風の中にれの種
獲だった十代のほく懐かしむ
卒寿まで生きたく飯をよく噛んで
佳い風が吹いて来そうだ帆を揚げる
水子地蔵の風車からから冬の底

岬川柳会 八十田洞庵報

能子 あずき 欣史子 加津子 喜美子
正子 純 年子 久子 しづ子 東園 寛之 千恵 光穂 武庫坊 昭三 薫

勇 蛙城 とみ 淑子 和香 年子 令子 茂平

不揃いの翼で雛が巣立ちゆく
明日があるから健康へ歩こうよ
受験の子それから拝む神仏
一言が刺すそれからの口重さ
紅を引きそれから春を摘みに行く
問題児成人式で酒の落ち
先送りした問題に転げ落ち
退職後それから父の時間です
問題の出どころいつも過去のつけ

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

会社での肩書のある妻を持ち
わたくしに火種あるから生さられる
帰省した娘が垢抜けている不安
式で暴れた二十歳嘆いている二十歳
好奇心にすがり余生を生きのびる
贈られたバッグ他人の顔をする
こりやいかん戦の時代に戻りよる
揉め事の火種を消さぬ意地つ張り
一・一七我が生涯に刺さる傷
変わらうとバケの皮はがす大臣殿
年変わりマンネリズムの幕があく
奉仕品さわりまわって買わぬ主婦
花嫁が一度むけて山の神
今はもうヤシロと読める少数派
限られた人生だから面白い
縄文の火種作りを学ぶ子等
年始め社連が掛ると慥とばす
核疑惑そんな火種に病む地球

里子 貞夫 悦子 みやこ 孝子 桜琴 洞庵 よし子 鉄男 紫香 春 重人 石舟 緑骨 満寿巳 久太郎 則彦 郁子 久美子 巴子 玲子 尚士 千津子 蛙 夕美 知香子 萬的

国の罪覆う棺の星条旗
社殿にお神酒の数だけ頭さげ
神頼み勝手な氏子が来ておるぞ
白い杖一寸手を貸すのも奉仕
許す気になれば言葉も丸くなる
じっと耐え風うかがっている火種
白息あふめて失る朝の月
初詣で社でつめるさる絵巻
変わり身が早く主流の列にいる
折あられと望みつないでいる火種
ブロンディあのアメリカは好きだった

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

恋恋としないう方がまだ粘る
誕生日敬語で妻を呼んでいる
年金が破産しそうな長寿国
しょうもない事は覚えてる頭
バーゲンの案内状は妻ばかり
父の文余白に書かぬ言葉見ゆ
御前様足音消して床に入る
人動き鎮魂こめてルミナリエ
愛とお金女心は揺れ動く
脳味噌の煤払いる湯に浸り
盛大に借りて遊べとコマシヤル
孫の来る報せに弾む秋の風
晴れた朝何はなくとも弾む胸
頭ではわかつているが許せない
頭からだめだと決めてかかっている
孫じまん会話が弾むクラス会

見清 宇乃子 寿美子 高栄 メ女 庸佑 求芽 光男 正坊 英子 啓生 (赤) 妙子 ますみ まさこ いつみ 義明 春江 順生 知佐子 美代子 民 八寿子 はじむ 道子 宏至 ミツ子 キク子

跡継ぎがなくて病んでる鬼瓦
次つぎと話の弾む長電話

君江

米ひと粒何うに拾う母

一風

次の世は何方と契るやうご期待

きらり

七人の敵を迎える朝の靴

欣子

浮雲に老後たくせぬ子に貢ぐ

幸枝

グレーの心カラーをつける思いやり

晴美

盛大な余韻が残る第九の夜

俊子

告別式故の字妙に生なまし

恭一

仰き見る通天閣に庶民の灯

奈良司

頭数揃うが知恵が揃わない

浩三

紀伊国屋ヨドバシカメラ焼き肉屋

正純

空仰きこはれる涙止めてます

一道

子に会えぬ年の瀬せまる拉致家族

(本)たえこ

くろぼこ川柳会

前坂なお美報

何もかも洗いたくなる師走水

常子

凜として師走の音を聴いている

帆雀

はや来いと狼が手招きする師走

みち子

赤ワイン老婆の口をすべらせる

つや子

ワイン好き注がれ飲んで千鳥足

ふみ子

はんりのワインを口によく喋る

美智子

宿命と思い我が道また楽し

久代

神様が宿るようにと塩を盛る

一眸

不整脈若い医者みて躍りだす

涼子

子を宿す頃が人生華である

和代

静かな夜月も一緒に露天風呂

(伊)富子

尊敬の医者で一命とり止めた

悦子

傍観を静かにしてる影がいる

悦子

人間のいない所が静かなり
ワイングラスに似合った振りが欲しくなる

はるお

饒舌なワイン女を妖精に

幸子

疑いを宿した壁が揺れている

小鹿

お粗末な家でなければ宿します

遊子

罪宿す胸が灰色おびてくる

なお美

まだ蕾五感に宿す六十路坂

(五)富子

冷静な判断くだすのは神だ

菜美

一病をかかえ医者とは縁きれぬ

あらた

銀行の裏を静かに出入りする

公弘

川柳さんだ

北野哲男報

流行に無頓着でも風邪は別

歳子

おばあちゃん置土産です風邪の菌

開子

風邪ぐらいなんだと言うて抱きに来る

忠

初夢の年賀ハガキに矢が当り

正和

御無沙汰と幼なじみが詫言て来る

雅司

添え書きが無くて気になる年賀状

朋月

一行を添えた温みの年賀状

千代

オレオレに騙されるほど純じやない

房江

光ある裏の部分にある苦惱

婦美子

暖かい日で良かったとお葬式

哲男

川柳エス本

山本三郎報

憂いごと幾つか秘めて年を越す

みさと

抜け道は知って使わぬ事にする

政雄

体当りで生きた抜け道など要らぬ

さとし

抜け道を教えられたが行止り

昭一朗

抜け道を知らぬ正直回り道
抜け道の便利さに馴れ通院時

ゆき子

敵囲み抜け道残しわざ

はつよ

幼子に還りぬけ道ほしい歳

文子

京の抜け道維新の夢が風に舞う

星花

お悩みにですか鼻から抜けてきた煙

れい子

抜け道はあります路地の迷路にも

とし子

脱国の抜け道自由の国求め

さち子

非常口まず確かめて療やしの湯

三峰

抜け道を抜けたらけもの道だった

一幸

抜け道は邪道ですよ子に教え

鈍甲

墨染めの衣に一生許し乞う

団地

王道に抜け道なしと孔子さま

高栄

永遠の旅抜け道とおり白道へ

任炊

抜け道は探さずまっとうに歩く

ルイ子

抜け道があの手この手で誘いかけ

三郎

川柳藤井寺

高田美代子報

久しぶり千支のお猿を拭いている

瑠美子

久しぶり電話の孫は変声期

ヨシ枝

久しぶり亡父の句った袖通す

恵勇

玄関に帰省した子のでかいクツ

六点

久しぶり合えば二倍のエネルギー

アヤ子

久しぶりに会えば白髪の男前

昭子

氏神も久しぶりだと良いお告げ

龍一

一言三言だんだんピンント合ってくる

みつこ

久しぶり母に甘える風邪をひき

扶美代

お久しぶりサダムフセイン生きていた

かつみ

釣書に赤札つけて売りに出す

赤札の元の数字が気にかかる

青春は赤紙老後は赤札になった

赤札で買ったネクタイ締めぬまま

赤札を値切りうれしい大阪弁

赤札を重ね重ねて売れ残る

予定したそんなつもりもはかどらず

大安をつもりに入れて買う馬券

食べたつもり買ったつもりが貯まらない

来年も生きるつもりのおしゃれ買う

百までも生きるつもりのおしゃれ買う

そのつもり方程式は解けぬまま

お邪魔でも生きてるつもり卒寿まで

ああ歳よまたぐつもりで蹟いた

こちらから折れて握手をするつもり

飾って飾って罪を隠しているつもり

聞き流すつもりになって茶がうまい

青い月男のつもり女のもつり

必ずと安易に言わぬことにする

無理解が鬱の病に八つ当たり

倉吉川柳会

竹信

照彦報

溢れ出る心の叫び詩になる

挫折して今幸せの共白髪

叫びにも似て白鳥がごあいさつ

魂の叫び心の琴鳴らす

おっぱいは僕のものだと泣き叫ぶ

おさがりの晴れ着させられ我慢する

鐘造

登志子

元紀

志洋

耕策

喜代子

春蘭

敦子

悦子

マサ子

桂子

大八

いさお

井竿

史郎

アキ

栄一

重人

庸佑

一知

助けてと叫んだ時は遅かった

爪を切る幸せそうな音で切る

晴れ着て美人になったわたしの娘

伊勢神宮掘つ建て小屋に草の屋根

晴れ着て三代そろう初詣で

どう叫んで見てもイラクへ旅立った

亡兄さんの晴れ着国防色だった

キリストの聖地は常に砂嵐

幸せな笑顔が競う初句会

振り袖が雪の晴れ間にひるがえる

艶やかな晴れ着値段が気にかかる

とっておきの晴れ着の下はパッチです

晴れ着きた我が子輝き見連える

幸という手毬大事に子に渡す

やわらかな風よ皇居の森に吹け

スリッパの音もはずんで退院日

菜園は母の聖地で近づけぬ

幸という肉を肴の旨い酒

聖戦と言って聖地を爆撃す

神様が戦争をする聖地なら

太陽が冬の幸ですぼつかばか

恐れ夢叫んだとこで目が覚める

叫んでも誰も助けぬ夢の中

幸せな人生ですか幸子さん

翠洋会

六吹

尚士報

告白の途中で覚める惜しい夢

夢うすい時代た狼がやせている

螢

季芳

ゆり子

石花菜

重忠

きみ子

睦子

幸子

康子

よしえ

和枝

完司

龍枝

(函)喜美子

節子

(前)喜美子

泰輔

十三男

次男

芳光

修

悠子

京子

照彦

孝一

理恵

叶うなら黄泉の国へも夫婦旅

無我夢中今は幸せ時間帯

成人式見上げる孫に夢託す

夢のない二十歳が騒ぐ都市砂漠

初夢は虎の二連覇祝う酒

いい夢だ真空パックにしておこう

わたしだけを夢中にさせて狹い人

補聴器をはずしゆつくり夢ささず

憧れる夢まだ持っている若さ

どんな夢探して来たの七十余年

腰伸ばし歩いた道がなつかしい

草の芽も伸びる元気が沸いてくる

祭りずし父は歪手を伸ばす

伸びる芽を庇う日差しがあたたかい

視聴率伸びて嬉しいテレビ局

踏み出した社会へ髪をなびかせる

見下ろして父の小言は届かない

太陽へ背伸び出窓のシクラメン

日脚伸びちよつぱり得をした気分

申歳が三代揃う初詣で

年男家族の鍋が盛り上がる

申の日に赤い下着の温かさ

猿も人も同じ顔して湯につかる

それぞれの申お目見得の年賀状

限界を悟りボス猿下山する

はるの風さるの家族に会いに行く

本を読むサルで迷いの森に居る

乱気流去ってふたりの海が風ぐ

観子

みつ子

絹子

千歩

良一

蕉子

恭昌

千梢

日の出

会美

蛙

義

東雲

美籠

舞夢

照子

尚士

石舟

楓楽

桃花

さと美

昭

伽羅

志華子

正雄

春

真理子

富子

柳界展望

嶋恵美子 ⑤穴吹尚士

□南大阪川柳会では、平成15年度年間賞を、前たもつ氏に決定。1月29日の句会で表彰した。

□西宮北口川柳会では平成15年度年間賞を次の通り決定した。

「最優秀賞」 門谷たず子
「優秀賞」○内は順位
①黒田能子 ②西口いわ
③田辺鹿太 ④亀岡哲
子 ⑤奥田みつ子

▽出 版△
★米田恭昌氏(奈良市)は句集「五色豆」(B6判・206頁・価二千円)を出版。川柳塔社発行。序文橋高薫風名譽主幹。

★「翠洋会」は、句報二五〇号を記念して川柳合同句集V「翠洋」(B6判・160頁)を出版。序文 橋高薫風名譽主幹。

★「川柳さんだ」は、三周年記念句集「メダカの詩」

を出版。(A5判・95頁) 会員32名各10句他各会天位句を掲載。

★「ローズ川柳会」では、句報100号を記念して句集発刊(B6判98頁)序文は橋高薫風名譽主幹。

★阿萬萬の氏(吹田市・参与)は「天和路 古都京都」を出版。(B6判・140頁 千円) 風景画、川柳、エッセー掲載。編集・印刷・装丁は森下愛論氏。

▽御芳志御礼△
○門谷たず子さん(西宮市)から、亡夫君の供養として金一封を拝受。

新同人紹介

電 井 皎 月
利昭・狸村・淳推薦

盛 田 夢 路
一笑・洋々・完司・公弘推薦

右向け右昔に……を本人申し出により削除。

○岐阜川柳社50周年川柳大会 5月9日 岐阜キャッスルイン(電話058-262-3339)「希望」奈倉楽甫選

「感激」松代天鬼選 各題2句11時締切 千円(発表誌、記念品呈 岐阜県知事賞・市長賞他、懇親宴あり

事前投句は締切りました。○「癌と闘うーユーモア川柳乱魚句集」今川乱魚著。

次回常任理事会は3月8日(月)9時からアウィーナ207号

新葉館出版176頁千円送料290円 注文は乱魚宛 TEL 共0471-72-1590

常任理事会は2月6日(金)出席者17名 ①80周年大会・10回まつり選者再検討ほか

②合同句集進行状況を係から報告 ③表彰規定提案について ④特別常任理事会日程 ⑤同人承認2名 ⑥その他

次回常任理事会は3月8日(月)9時からアウィーナ207号

斗 酢 ③佐藤たい子 ④笠

「優秀賞」(○内は順位)
①川島諷云児 ②一階八

行詩 広岡 志女

おだやかな心に触れる一

花は、平成15年度の各賞を

発表

「最優秀賞」

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	15日(月)午後1時から 新芽(共選)・決める か・つ・お(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
高槻川柳 サークル 卵の花	18日(木)正午から 移す・見事・答・味噌汁 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
城北川柳会	20日(土)午後1時から モラル・天・充実・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏鏡典子
岸和田川柳会	20日(土)午後1時半から 封書・平和・報告・賭い	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
岬川柳会	21日(日)午後1時半から 先頭・参加・音頭・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳ねやがわ	21日(日)午後1時半から 天井・発表・ロボット・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳塔 みぞくち	22日(月)午後7時半から 漬物・祈る・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	24日(水)午後1時から 酢・対・縫・歩	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前10時から 糸・急ぐ・調子・生きる	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
西宮北口川柳会	27日(土)午前11時から 30周年記念川柳大会	2月号(P.95)参照 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
東大阪市川柳同好会	27日(土)午後6時から マイク・流れる・損・姿	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市川柳会	28日(日)午後1時から 運・おちおち・レポーター 「笑う」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	28日(日)午後1時から 欠・ドン・多分	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	29日(月)午後1時から 禁・訪れ・保証	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	4 日(木)午後 1 時から 酌む・桜・外泊	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後 1 時から 柔らかい・安心・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	6 日(土)午後 1 時から 青・嵌まる(はまる)・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	6 日(土)午後 1 時から ショー・長寿・蛙	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	8 日(月)午後 1 時半から 因果・楽隊・いらだつ	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火)午後 1 時から 幻・空(そら)・騒ぐ	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9 日(火)午後 1 時半から 初恋・バーゲン・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
川 柳 塔 打 吹	13 日(土)午後 1 時から 自信・ぼろぼろ・触る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川 柳 塔 ま つ え	13 日(土)午後 1 時半から 躍る・開く・正面・味	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
川 柳 塔 みちのく	13 日(土)午後 4 時から 空気・締める・まぶしい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	14 日(日)午後 1 時から 耳・延びる・真意・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 藤 井 寺	14 日(日)午後 1 時から 青・ときどき	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3 F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
川 柳 塔 わかやま	14 日(日)午後 1 時から アンケート・童謡・撒く・「鳥」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川 柳 会	15 日(月)午後 1 時から 満足・昆布・待つ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩 5 分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊

編集後記

☆本誌では同人が選者になっている大会は、誌面に掲載するようにしている。けれど、選者は個人依頼のため、情報が入手できないことがしばしば起きる。購読しているものや、いたいだい柳誌で目にしたのでは間に合わない。何分にも編集の原稿は2カ月前、つまり3月号なら1月25日に整えなければならぬから。選者を依頼された人は、パンフレット等で出来るだけ早く連絡を下さい。

☆また、柳界展望に載せるための大会の秀句や受賞句、個人情報なども同様に知らせてほしい。頂いたものになるべく掲載するつもりですが、取捨選択や時期等は編集部に任せてもらおうと思っています。

☆ご存知のように第13回芥川賞を、19歳と20歳の女性を受賞した。若者の活字離れが言われて久しいが、公募文学賞の応募者は年々増加し、そのうち昨年の「文藝賞」(河出書房新社)は、10代20代が48%だったという。高齢化に悩む川柳界にとって、若者の台頭はまさに垂涎の話題。

☆新聞によると、昨年東洋大学が募集した「第17回現代学生百人一首」は、6万3千首近い応募があり、梅花女子大主催の高校生らを対象とした「第10回梅花山川登美子短歌賞」は、7千5百首近い応募があった。☆日本川柳協会でもホームページの漫画入りジュニアコーナーで募集しているが、反応はいまいちとのこと。ぜひお孫さん達に勧め下さい。これをお子さんと云えないのが悲しい。(ふ)

ひとこと

海流(科学のたわごと)から

日本列島は、太平洋側を流れる暖流の影響で比較的暖かく、多くの海産物の恩恵を受けている。プランクトンが多く、黒ずんで見えるので、これを黒潮と呼び毎時2、3kmで流れている。

大気の流れと循環があるように、海の水も同じことをくり返している。これを海流と名づけ、熱帯の

水が北へ北へ流れるものを暖流と呼んでいる。

そのおかげで宮崎県青島のビンロウジュなどは、この海流に運ばれ流れついた南の国の植物が繁茂した一例なのだ。

またある意味では大和民族やその文化も、マグロやカツオのように、この流れによって運ばれて来たのかも知れない。

海流のいたずら夢の島が出来

(阿萬 萬的)

○「広辞苑今夜も舟を出す」「撮み食い」と表記してあるではないか！驚き！桃の木！恥ずかしながら初めて知った。

○恥ずかしながらをもうひとつ。「画龍点睛」の「睛」をこれまで「晴」と思い込んでいたのだ。「日」偏と

関係が充実しているという。○校正をしていて初めて出合う語句、文字も多い。辞書の出番である。「つまみ食い」を詠んだ句に出会う。つまみ食い：広辞苑には

「目」偏の違いに気付かず今日まで生きていたことに驚き！桃の木！山椒の木！先ごろカメラ付きケータイ川柳なるものが発表された。ケータイで写してハイ

そこで一句。これで授業をする大学教授がいるという。新しい文芸のジャンルの誕生であろうか。これまた驚き桃の木である。

○因みに驚き桃の木山椒の木は「おどろきの語呂合わせ。これは驚いたの意」と「日本語使いさばき辞典」(アストロ出版)に教えられた。しかし、なぜ「桃の木、山椒の木」なのか？「人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑」薫風 (朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（5月号）地名

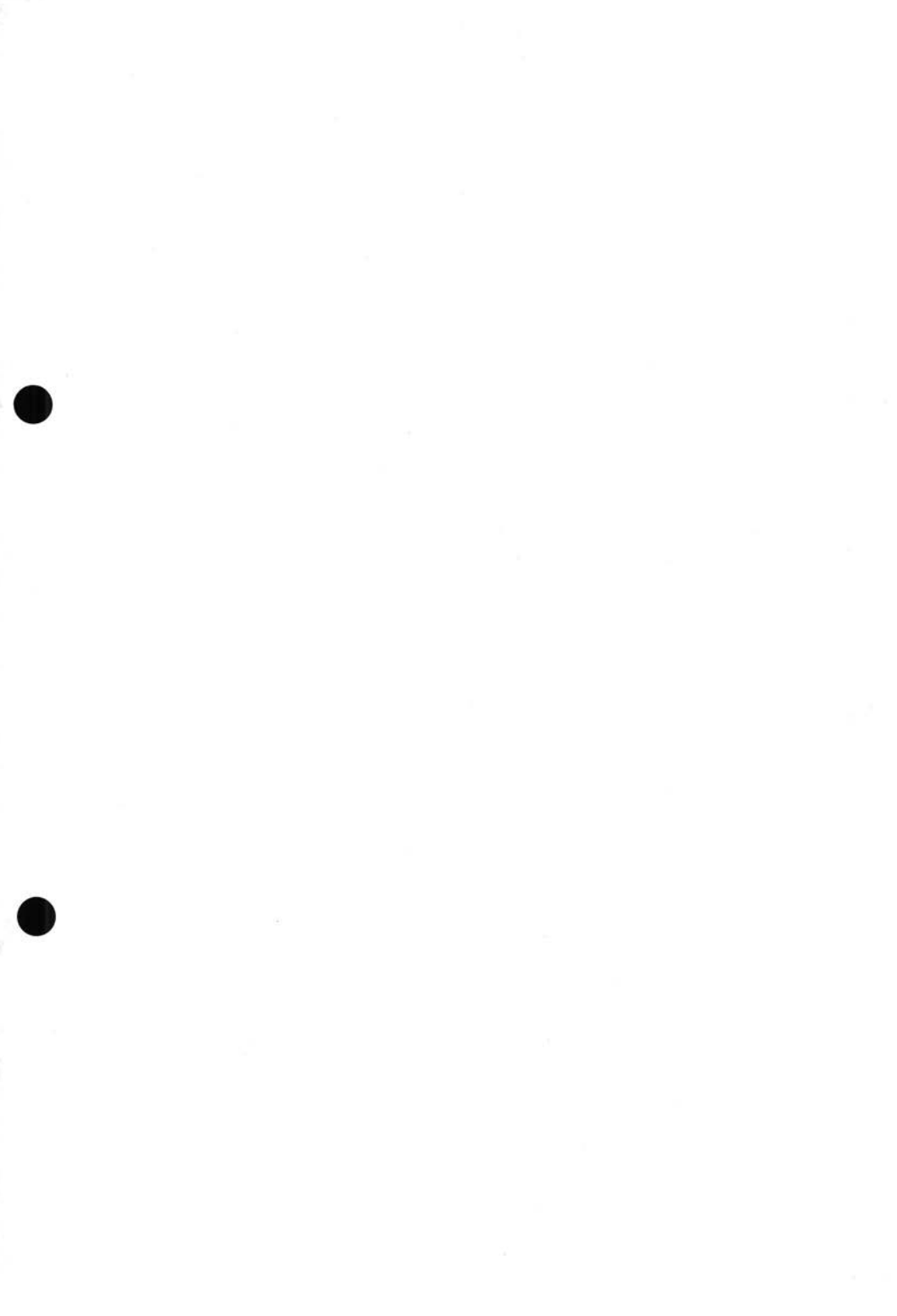
市 県
姓・雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

川柳塔創刊八十周年記念句集 参加用紙



作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑 選
水煙抄 (8句) 板尾岳人 選
愛染帖 (3句) 波多野五楽庵 選
茴香の花 (3句) 藤田泰子 選
吟題 (3句) 「因果」 井上桂作 選
「楽隊」 太田扶美代 選
「いらだつ」 安食友子 選
初歩教室 「庭」 (3句) 三宅保州 担当

5月号発表 (3月15日締切)

6月号
課題吟 「愛」「いも」
「洩れる」
初歩教室 「介護」

本社3月句会

とき 3月8日(月) 午後1時・2時半締切
―開催時間にご注意下さい。―
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛東
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし
兼題 「センス」 川原章 久
「奇麗」 米澤俣子 選
「抱く」 池原寿子 選
「掘る」 三宅保州 選
河内天笑 選
席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社4月句会 7日(水) 午後5時から

兼題 「寿司」「ヒロイン」「原点」
「けじめ」「飼う」

第22年度 夜市川柳募集

第10回 「点」 天根夢草 選
ハガキに3句 3月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 八百円 (送料76円)

半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇〇四年(平成十六年)三月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1496

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番

第28回 全日本川柳2004年埼玉大会

日 時 平成十六年六月十三日(日) 午前十時開場
場 埼玉会館 大ホール

〒330-0063 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-14

TEL 〇四八(八二九)二四七二

交通機関 J R京浜東北線、高崎線、宇都宮線
「浦和駅」西口下車徒歩5分

宿 題 第一部(事前投句、四月十五日締切)
「爽やか」松岡 葉路選 「彩」り 雪石 隆子選
「助ける」天根 夢草選 「まごころ」小島 蘭幸選
ジュニア部門(小・中学生)
「さわやか」平田 朝子選 「助ける」米島 暁子選
「まごころ」国吉司図子選

3.5×18cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句無記名・封筒に住所・氏名明記、投句料一〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛郵送のこと。ジュニア部門は投句料無料

投句先 〒540-0004 大阪市北区天神橋二丁目北一―一
ステッブイン南森町七〇二
(全日本川柳協会 宛)
TEL 〇六(六三三)二二二〇 FAX 〇六(六三三)二四三三
郵便振替口座 〇〇九七〇一九一三五七五

宿 題 第二部(当日投句、十一時二十分締切)
「新鮮」内田 昌波選 「都」合 田頭 良子選
「心機一転」川俣 秀夫選

第二次選者 吉岡 龍城・今川 乱魚・塩見 草映
磯野いさむ・大野 風柳・竹本颯太郎

会 費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)
表彰(予定) 文部科学大臣奨励賞 参議院議長賞 川柳大賞
大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

(全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳埼玉大会実行委員長 佐藤 美文

〈前夜祭ご案内〉

前夜祭 平成十六年六月十二日(土) 午後六時
会場 ホテル・プリランテ武蔵野
〒330-0008 さいたま市中央区新都心2-1-2
TEL 〇四八(六〇二)五五五五

交通 J R京浜東北線、高崎線、宇都宮線
「さいたま新都心駅」西口下車徒歩5分

会 費 八、〇〇〇円(立食、アトラクション)

〈宿泊・観光ご案内〉

宿泊 ☆ホテル・プリランテ武蔵野
シングル 九〇〇〇円 ツイン 一六〇〇〇円 2名分
和室(2〜4名)宿泊人数により料金の差があります。
希望者は事務局まで事前にご連絡下さい。料金は一万
円前後(2室)あります。

☆ラフレ・さいたま(簡保加入者施設)
シングル 九四〇〇円 ツイン 一七四〇〇円 2名分
◆簡易保険加入者本人(70歳以上は旧保険でも可)は事前に証明書コピーの提出があれば2000円割引になります。宿泊日にご返金をいたします。

観光 蔵の町川越観光(近畿日本ツーリスト)
日時 平成十六年六月十二日12時〜17時 集合 ホテル・プリランテ武蔵野12時 会費 五〇〇〇円(昼食なし) 各自昼食を済ませてご乗車して下さい。申し込み35名以下の場合観光を中止します。
◆前夜祭・宿泊・観光の申し込み締切は四月十五日必着で、宿泊は先着順で満員しだい締切ます。

◇別紙申込書に内容記入の上、合計金額を郵便振替口座へご入金下さい。

◇申込先 〒330-0008 さいたま市川口一―三―一四〇一
松岡 葉路方 日川協埼玉大会事務局 宛
TEL 〇四八(二二三)八〇八四
TEL・FAX 〇〇九〇八〇二二五九三三六

◎送金先 郵便振替口座番号 日川協埼玉大会事務局 宛
日川協埼玉大会事務局 宛

定価 八百円(送料 七十六円)